

筑波大学博士（文学）学位請求論文

戦後日本作家による北朝鮮表象の研究

—1960年代から2000年代を中心に—

李 文鎬

2015年度

目次

目次	i
凡例	iv
序章	1
第1節 本論文の目的と問題意識	1
第2節 先行研究と本論文の位置づけ	4
第3節 本論文の研究対象と各章の概要	7
第1章 帰国事業における「楽園」幻想への疑念 ——金達寿「日本人妻」論	16
第1節 はじめに	16
第2節 帰国事業と日本人妻について	20
第3節 帰国事業言説における「楽園」としての「祖国」	21
第4節 「日本に残す登録証」の曖昧さ	31
第5節 「日本人妻」における北朝鮮表象	34
5.1 民族差別のない社会、北朝鮮	34
5.2 芳江が抱える北朝鮮への疑念	37
5.3 芳江のさびしさと「帰国」へのためらい	40
第6節 おわりに	42

第2章 弱き詩人と北朝鮮

——松本清張『北の詩人』論.....	46
第1節 はじめに.....	46
第2節 「謀略朝鮮戦争」と謎としての北朝鮮.....	48
第3節 初出テキストに引用された4編の詩について.....	57
3.1 孤独な林和の内面を表現した詩.....	58
3.2 闘争的な詩と弱い林和の人間像.....	70
第4節 単行本テキストに追加された裁判記録引用部における林和の内面描写...	76
第5節 おわりに.....	78

第3章 人々の表象（不）可能性

——小田実『私と朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』論.....	84
第1節 はじめに.....	84
第2節 小田訪朝記の同時代評価.....	87
第3節 小田の北朝鮮問題に対する立場.....	90
第4節 人々を語ることの困難さ.....	96
第5節 おわりに.....	105

第4章 消費の対象としての北朝鮮

——伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』論.....	108
第1節 はじめに.....	108
第2節 「ナナメ」と「愚直」——荻野の『お笑い北朝鮮』論について.....	110
第3節 『お笑い北朝鮮』以前の「インテリ」による北朝鮮表象.....	113
第4節 「ナナメに受け取る」伊藤の北朝鮮表象.....	120

第5節	伊藤と同時代の北朝鮮表象——主体思想塔をめぐって.....	123
第6節	おわりに.....	131
第5章	過去と他者の消失	
	——村上龍『半島を出よ』論.....	137
第1節	はじめに.....	137
第2節	北朝鮮兵士たちの歴史認識——過去の日本の侵略に対する怒り.....	141
第3節	被害者＝日本人としての自己形成——作中におけるメディアの機能....	145
第4節	植民地近代化論と戦争の記憶という矛盾した歴史認識.....	150
第5節	おわりに.....	154
結章	160
主要参考文献一覧	165
初出一覧	174

凡例

- ・引用に際して、旧漢字は原則として新字体に改める。
- ・本文中の引用は「 」で括る。引用中の論者による補足や、中略や後略は（ ）を用いる。
- ・引用文中の改行は〔／〕で示す。
- ・主要分析作品の頁数は、（ ）内に入れて示す。それ以外の参考文献の頁数は、注で示す。
- ・『 』は著書の題名および雑誌・新聞名、「 」は作品名や論文・評論・雑誌記事・新聞記事などのタイトルを示す。単行本は『 』、複数の作品が収録された単行本の作品や、雑誌に収録されたものは「 」で示す。
- ・引用記号「 」のなかにさらに「 」が必要な場合にも、同じく「 」を用い、『 』に変換することはない。
- ・作品名や引用以外の「 」は、強調か留保を示す。
- ・年号は西暦を用いる。
- ・傍点は筆者による強調を示す。
- ・引用中の論者による補足は（引用者：…）と示す。
- ・引用文の中で理解が難しい単語や表現がある場合、「ママ」の記号を付す。
- ・韓国・朝鮮人名と地名にはルビをつける。

序章

第1節 本論文の目的と問題意識

本論文¹は、1960年代から2000年代の時期に活躍した現代日本の作家たちによるテキスト、主に北朝鮮を題材とした小説や北朝鮮を訪問して記された紀行文を、それぞれのテキストが書かれた時代背景の中で見直し、そこに見られる北朝鮮表象を考察することで、戦後の日本社会にとって北朝鮮はどのような意味をもつのかについての基礎的な視座を提示することを目的とする。

本論文があつかう時期の北朝鮮をめぐる表象の問題をどのようにとらえるべきかについて、基本的な事実をふまえつつ、本論文における問題意識を記述しておく。アジア・太平洋戦争で敗戦した「大日本帝国」の終焉は、日本が植民地支配していた朝鮮半島に新たな対立関係を作りだした²。つまり、アメリカとソ連に象徴される自由主義陣営と共産主義陣営のイデオロギー対立が、解放された朝鮮半島に「大韓民国」（以下「韓国」と略す）と北朝鮮という二つの「朝鮮」を生み出したのである。重要なことは、この体制を異にする二つの「朝鮮」に向けた戦後日本社会からのまなざしは、かつての支配と被支配関係の崩壊がもたらした新しいイデオロギーにもとづいていたということである。たとえば、朝鮮戦争（1950年－1953年）によって顕在化した東アジアにおける冷戦構

造のなかで、日本はアメリカの後方基地として朝鮮戦争に間接的に参戦し³、北朝鮮と軍事的に敵対することになった。対照的に、日本は 1961 年の日米新安保条約体制のもとに 1965 年には韓国との国交正常化⁴を成し遂げ、韓国とは政治・経済・文化的に接近しながら、今日に至ったのである。

それでは、北朝鮮に対して、日本社会はどのようなまなざしを向けてきたのか、以下本論文の議論に即して概略を述べる。朝鮮戦争以後、1950 年代後半から 1960 年代にかけて北朝鮮が徐々に安定を取り戻すと、左翼系知識人たちを中心に、北朝鮮が社会主義のもとに建設され発展している、ある種の楽園として褒め称えられることがあった。こうした雰囲気の中で特筆すべき出来事としては、日本と北朝鮮の間に行われた帰国事業がある。1959 年 12 月から 1984 年 7 月までのおよそ 25 年間、総計 93340 人の在日朝鮮人や日本人配偶者、その家族らが日本から北朝鮮に渡ったこの帰国事業⁵は、イデオロギーを異にする両国間における初めての人的交流であり、日本にとっては、本格的な高度成長期に移行する前に日本に残存している在日朝鮮人を朝鮮半島に送り返すという高度な政治的目的をもつものでもあった。ただし、1950 年代から 1960 年代の、米ソを中心とする冷戦という緊張関係のただ中では日朝間の情報の遮断が行われ、たとえば、朝鮮戦争や北朝鮮における政治家粛清事件などの真相がメディアや小説などでとりあげられることなく、北朝鮮はいわば謎めいた存在として表象されることもあった。

1970 年代になると、よど号ハイジャック事件⁶（1971 年）で北朝鮮の存在がクローズアップされることになったが、基本的には北朝鮮の実情に関する情報は極度に制限されており、そのため日本のメディアは事実にもとづいてない北朝鮮イメージを流布するこ

ともあった。そうした環境の中で、北朝鮮についての「生」の情報が期待され、それに答えるかのような紀行文が発表されることもあった。

1980年代末から1990年代にかけて、世界は社会主義圏の崩壊に伴う冷戦終結の時代を迎えることとなった。ソ連を中心とする社会主義圏においては、すでに1980年代からこの体制を揺るがすような動きがあった。こうした動きをうけて、1989年にはポーランドに非共産政権が登場した。1989年にはベルリンの壁が崩壊し、翌1990年にはソ連が一党独裁体制を放棄し、バルト3国が独立を宣言、そして東西ドイツの統一が実現した。さらに、1991年にはソ連邦が消滅し、社会主義圏が崩壊したのである⁷。このようにして、世界的な共産主義イデオロギーの破綻が明らかになると、日本でも共産党の党勢はさらに後退した⁸。日本社会党も1993年に行われた第40回総選挙で改選前の136議席から70議席へと議席をほぼ半数に減ずる大敗を喫した。こうした状況の中で、社会主義や共産主義は、これまでのように批判あるいは賛美の対象ではなくなってきた。換言すれば、政治体制に関する議論の的から外れ、それを一つの楽しめる対象として受け取っていく傾向さえも起こり始めたのである。

1990年代後半になって、日本と北朝鮮は、北朝鮮の軍事的プレゼンスの増大と日本人拉致問題を契機に、これまでにはなかった険しい局面を迎えた。北朝鮮は、1993年のNPT脱退に続いて長距離弾道ミサイルの発射実験（1998年のテポドン1号の発射実験）をした。これは北朝鮮が開発したテポドンミサイルが日本本土上空を通りすぎて太平洋の海上に落下した事件である。日本国内では、この事件をきっかけに北朝鮮の実質的な軍事的脅威に対する激しい反応が起った⁹。長距離ミサイルの開発は、北朝鮮の核兵器搭載手段として日本に大きな衝撃を与えた。そして、とくに2001年9月11日のア

メロカ同時多発テロ事件以降、日本はもちろん世界中を脅かす「悪党国家」、「犯罪国家」としての北朝鮮のイメージが拡散された¹⁰。

さらに、現代日朝関係の展開においてもっとも大きな反響を呼び起こしたのは、北朝鮮による日本人拉致問題である。これは 2000 年代における日本の対北朝鮮外交の姿勢を決めたといえる。1990 年代半ばから人口に膾炙するようになってきたこの問題は、小泉純一郎（1942 年－）首相の電撃的な平壤訪問と日朝首脳会談（2002 年）において、キムジョンイル金正日（1941 年－2011 年）国防委員長が拉致を公式に認めることによって事実と判明した¹¹。これを機に日本では拉致を実行した北朝鮮を非難・攻撃する報道が氾濫し、日本のメディアは北朝鮮を改めて仮想敵国として想定し、北朝鮮バッシングともいえる現象が起きたのである¹²。

このように、日本における北朝鮮像は、時代によって、理想化された楽園、政治的な策謀がうごめく謎としての空間、アメリカに対抗して自主独立を目指す国家、揶揄や嘲笑の対象、日本人を苦しめる悪魔的存在として、大きく揺れ動いてきたのである。

本論文は、以上のような揺れ動く北朝鮮像が、それぞれ独自の立場から北朝鮮という対象に取り組んできた日本の作家たちによるテキストにおいて具体的にどのように表象されているかを検討するものである。

第 2 節 先行研究と本論文の位置づけ

以上のような目的と問題意識に立って、北朝鮮表象に関する重要な先行研究をまとめておきたい。まず、パクチュンイル朴春日の『近代日本文学における朝鮮像』¹³（未来社、1969 年）

は、北朝鮮体制と金日成を擁護する立場から戦後の日本文学における朝鮮表象を論じ、松本清張（1909年－1992年）を「すぐれた作家」¹⁴、「日本の進歩的作家」¹⁵と述べ、『日本の黒い霧』や『北の詩人』で朝鮮戦争におけるアメリカ帝国主義の謀略を暴いたことに言及するなど¹⁶、思想的に左翼系の作家によるもの、金日成（1912年－1994年）^{キムイルソン}や北朝鮮を賛美する内容を書いたものを中心に高く評価しているためにややバランスを欠いており、北朝鮮表象研究としては包括的とはいえず、不十分である。渡邊一民は『〈他者〉としての朝鮮』¹⁷（岩波書店、2003年）で、在日作家金石範（1925年－）^{キムソクボム}の言葉を借りて、金達寿（1919年－1997年）^{キムダルス}や金詩鐘（1929年－）^{キムシジョン}などの在日作家が、在日本朝鮮人総連合会¹⁸を（以下「朝鮮総連」と略す）という組織内で「不当な批判や攻撃にさらされ」¹⁹排除されてきたことや、金達寿が晩年（1981年）に韓国のソウルを訪問したことが「在日朝鮮人の南への望郷の念を大きくクローズアップ」²⁰したと書くなど、主に在日作家たちによる日本での文学活動に注目したが、日本人作家による北朝鮮表象の問題には触れていない。

他に朝鮮表象の本格的な研究として中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌』²¹（新曜社、2004年）があげられる。中根は、近代日本人の文化的記憶に「朝鮮」という記号が根を下ろす経緯に注目し²²、朝鮮像の形成を日本人の自己形成というパラダイムからとらえ、それを個々の具体的な文化的プロセスのなかで位置づける作業を行った。しかし、中根の研究においても北朝鮮表象の本格的な研究はなされず、戦後の作家では民主主義文学の考察対象として金達寿が言及されたのみである。

一方、メディア研究においては、北朝鮮報道をめぐる日本のメディアの暴力性を批判する研究がなされてきた。渡辺武達は、論文「メディア操作される北朝鮮像」²³（同志

社大学人文学会、1994年9月)で、1994年頃の日本における北朝鮮報道の問題点をとりあげ、「北朝鮮を取り上げた出版物すべてが北を「悪玉」にするイメージづくりに貢献している」²⁴と述べ、日本のメディアの北朝鮮に対するイメージ操作が民衆の世論を左右し、政治的意見を形成させると論じている。しかし、渡辺論文は、北朝鮮を題材にした雑誌の宣伝広告や新聞の見出しなどの分析が中心であり、日本の作家によるテキストの詳細な分析は行っていない。

渡辺の研究の他にも出版メディアの側面から日本の北朝鮮言説の流れを研究した和田春樹・高崎宗司編の『北朝鮮本をどう読むか』（明石書店、2003年）は注目に値する。この著作は、1980年代から2000年代初頭までに日本で刊行された北朝鮮をあつかう書籍を網羅し、その概説と分析を行ったものである。とくにこの研究は、1990年代における「北朝鮮物」に関して大きな成果をあげているが、日本人作者の北朝鮮ルポや脱北者の手記のようなノンフィクションだけではなく、北朝鮮と日本との戦争を想定し描いた近未来小説など多様なジャンルの北朝鮮関連書籍をとりあげ、北朝鮮論の展開の傾向を探るといって本論文が目指す北朝鮮表象研究の大変重要な足がかりとなっている。たとえば、北朝鮮について批判的な言説を生産する著述家たちをレポートした内容や、日本人または脱北者による手記とアメリカにおける北朝鮮像まで紹介している。しかし、各々のテキストに対する具体的な論評を避け、事実関係の確認に重点を置いていることが惜しまれる。

本論文は、以上で言及した研究成果を踏まえつつも、1960年代から2000年代半ばまでという幅広い時期を射程に入れ、北朝鮮表象のあり方をテキストの線密な分析を通し

て探ることによって、単なる北朝鮮関連書籍の紹介やイメージの羅列に留まらない分析を目指すものである。

第3節 本論文の研究対象と各章の概要

本論文の研究対象には、戦後の日本作家、とりわけ北朝鮮問題に取り組んだと考えられる作家たちによるテキストを、戦後から現代までの流れがわかるように、おおよそ10年の時代に区切り、その時代のある側面を代表しつつも独自の特徴を備えた著作を選んだ。それらのテキストは北朝鮮を直接的かつ間接的に描いた小説や、北朝鮮を訪問して書いた紀行文である。本論文は、序章と結章を除き、全5章の構成となる。

第1章では、第一世代在日朝鮮人作家を代表する金達寿による短編小説「日本に残す登録証」と「日本人妻」をとりあげる。短編「日本に残す登録証」は、『別冊週刊朝日』（朝日新聞社、昭和34年6号、1959年11月1日刊）での収載を初出として、以後『金達寿小説全集 第2巻』（筑摩書房、1980年）に載せられた。短編「日本人妻」の初出は、『別冊週刊朝日』（朝日新聞社、昭和36年3号、1961年5月1日刊）所収の「日本人妻物語」であり、以後、短編記録集『中山道』（東方社、1963年）、『金達寿小説全集 第2巻』（筑摩書房、1980年）に「日本人妻」と題して収載された。本論文ではどちらも『金達寿小説全集 第2巻』所収のものを底本とする。

第1章は、帰国事業の最盛期である1950年代後半から1960年代初期を背景とした短編小説「日本に残す登録証」と「日本人妻」という作品が、どのように北朝鮮を表象していたのかを探る。帰国事業が提供する北朝鮮についての「幻想」を「ナイーブ」に信

じた作品であると論じる川村湊の先行研究を踏まえ、帰国事業の規模と原因について概説し、当時のマスコミに金達寿が寄稿した文章を確認することで、金達寿は帰国事業を肯定的にとらえているが、小説においては帰国事業に対する疑念や揺れも読み取られる点を指摘する。具体的には、「日本に残す登録証」では主人公がもつ日本の生活への未練を通して北朝鮮が必ず帰るべき地としては表象されない点を論じる。「日本人妻」では、主人公の芳江が北朝鮮に行くことを決心するが、北朝鮮が南朝鮮とは全く違う理想の地として表象される一方、祖国や失業者のいない社会に対する芳江自身の留保を確認する。さらに「帰国」することで喜ぶ夫と息子からはさびしさを感じる姿を通して、金達寿の小説に見られる帰国事業と北朝鮮への疑念を論じる。

第2章では、松本清張の『北の詩人』（中央公論社、1964年）を研究対象とし、初出版である雑誌掲載の「北の詩人」（『中央公論』892号-905号、中央公論社、1962年1月-1963年3月）を比較検討の対象としてあつかう。本章においては、日米安保条約下でアメリカの極東における軍事的拡張に引き込まれる日本の運命について批判的な姿勢をとった松本清張が、朝鮮戦争のような巨大な陰謀が日本にも起きることを懸念し、朝鮮戦争の裏で活躍し消えていった人々に注目する経緯を考察する。さらに『日本の黒い霧』（1960年）（とくにこの著作に収録された「謀略朝鮮戦争」）が、北朝鮮を「謎」として表象していることを示す。次に、松本清張が、朝鮮の詩人であり文学評論家であった、^{イムフア}林和（1908年-1953年）と彼の詩をどのように描こうとしたのかを考察する。具体的には、「北の詩人」の雑誌掲載時のテキストと単行本のテキストの違い、とくに前者には4編の林和による詩が掲載されていたのに対して、後者ではそれがわずか1編しかとりあげられていないことを論じる。最後に林和の裁判記録に関する記述に

おける雑誌掲載時のテキストと単行本テキストとの差異について検討する。そうすることによって、北朝鮮の閉鎖性を表象することに向けられた松本清張の手法が明らかになるだろう。

第3章と第4章では、北朝鮮を直接訪問した2人の作家による紀行文を論じる。

第3章では、左翼系知識人として知られた作家、小田実（1932年－2007年）による『私と朝鮮』（筑摩書房、1977年）と『「北朝鮮」の人びと』（潮出版社、1978年）を分析の対象としてあつかう。具体的には、小田の北朝鮮訪問記についての当時の評価を紹介しつつ、それらが、むやみに北朝鮮を賛美するのではなく、批判すべき点は批判するという小田の語り方を評価していたことを指摘する。その上で、小田自身の北朝鮮に対する基本的な立場を確認し、とくに小田が北朝鮮の^{チュチェ}主体思想に依拠して北朝鮮の体制や人々をいかに肯定的にとらえていたかを示す。最後に、小田が北朝鮮の人々の生活を観察し、その感想を語る部分を分析して、小田自身が北朝鮮についての情報を正しく入手できないため、北朝鮮の人々を表象することには限界があることを小田実自身が知っていたこと、そしてそれは当時の小田実による北朝鮮表象の限界でもあったことを示す。

第4章では、伊藤輝夫（1949年－）の『お笑い北朝鮮』（コスモの本、1993年）を研究対象にする。冷戦崩壊後の新たな国際秩序の中で、1990年代初期の日本では北朝鮮を一般市民レベルの日常的な娯楽の素材としてとらえようとする新しい動きとして『お笑い北朝鮮』が登場した。本章では、この作品の重要な先行研究である荻野アンナの議論から、「愚直さ」と「ナナメに受け取る」という対照的な二つの概念を借用し、『お笑い北朝鮮』が北朝鮮をとらえているスタンスを提示し、伊藤輝夫の北朝鮮表象の

特徴を明確にする。さらに、この荻野の議論を踏まえて、1970年代後半から『お笑い北朝鮮』前後の金正日や主体思想塔の表象を分析する。具体的にいえば、ジャーナリストや北朝鮮専門家たちと、伊藤輝夫の北朝鮮を語る態度が、どちらも荻野アンナのいうところの「愚直」なものではなく、前者が北朝鮮に対する評価やイメージをただ「ストレート」に述べるのに比べ、後者は事実を真正面からとらえることを避け、「ナナメに受け取る」ことで北朝鮮を笑って誤魔化そうとしていた点を明らかにする。最終的には、北朝鮮に対する伊藤のまなざしの分析を通して、北朝鮮表象の消費という側面を浮かび上がらせる。

第5章では、村上龍（1952年ー）の『半島を出よ 上下』（幻冬舎、2005年）を分析対象としてあつかう。第5章は、『半島を出よ』の文学的価値として頻りに論じられる「北朝鮮兵士の視点」という問題を念頭におきつつ、小説に登場する人物たち（北朝鮮の兵士と日本人）がそれぞれ抱えている、お互いに相容れないはずの歴史認識が、北朝鮮兵の暴力を伝えるメディアと、日本における歴史修正主義的な言説との関係においていわば無効化され、日本社会における他者としての「北朝鮮の兵士」の視線がその他者性を失ってゆくプロセスに焦点を当てて議論する。

【注】

¹本論文のタイトル「戦後日本作家による北朝鮮表象の研究—1960年代から2000年代を中心に—」における用語について明確にしておく。「戦後」は日本におけるアジア・太平洋戦争の敗戦後現在に至るまでの時期をさすこととする。とくに本論文においては、1945年以降、日本の対アジア戦後処理の過程で、北朝鮮とは戦後賠償・国交正常化などがまだ行われていない現実を踏まえ「戦後」という概念を用いる。次に「日本作家」であるが、これは日本国籍をもつ作家を意味するのではなく、日本に在住し日本語で作品を書いている作家を指す。たとえば、本論文では金達寿という在日朝鮮人作家の作品をあつかうが、彼は日本国籍を持たなかったため日本人作家ではないが、日本在住の日本語で作品を書く作家であった。このような立場の作家を議論に含めるため「日本作家」という用語を用いた。最後に「北朝鮮」という言葉であるが、いうまでもなくこれは略称であり、正式名称は「朝鮮民主主義人民共和国」である。しかし、本論文では煩雑さを避けるため北朝鮮という略称を用いることとする。

²大沼久夫は朝鮮半島分断の原因と日本の関係について以下のように述べている。「日本は、9月2日に降伏文書に調印し、同時に一般命令第一号により、連合国（米、英、中、ソ）による日本軍の武装解除を受けることになった。すでに知られているように一般命令第一号の規定に従って、日本国大本営並びに日本国本土、これに隣接する諸小島、北緯三八度以南の朝鮮等は合衆国太平洋艦隊最高司令官（D・マッカーサー）に降伏し、「満州」、北緯三八度以北の朝鮮、樺太及び千島諸島などはソビエト極東最高司令官に降伏することになった。」（大沼久夫『朝鮮分断の歴史——1945年—1950年』新幹社、1993年、17頁）。

³庄司潤一郎は、朝鮮戦争における日本の役割について以下のように述べている。「朝鮮戦争の後方基地としても、日本は多大な貢献を行った。日本の掃海部隊による朝鮮半島領域での機雷掃海は有名であるが、先に述べた在日米軍基地のほか、輸送拠点としての港湾、工場における兵器生産・修理、国鉄・船舶などによる輸送、病院などのハード面のみならず、それに付随するマンパワーなどソフトの面においても重要な役割を果たしていた。基地労働者、港湾労働者、工場労働者、看護婦など技術・専門職の動員である。」（庄司潤一郎「朝鮮戦争と日本——ア

イデンティティ、安全保障をめぐるジレンマ」防衛省防衛研究所編『朝鮮戦争の再検討——その遺産』防衛省防衛研究所、2007年、46頁）。

⁴イジョンウォン 李鐘元・木宮正史・浅野豊美の「外交文書公開と日韓会談研究の新展開」では、日韓国交正常化の詳細について以下のように述べられている。「日韓国交正常化交渉は、1951年10月の予備会談から始まり、1965年の調印まで14年近くの歳月を要し、外交史に残る難交渉のひとつとなった。1965年6月22日に締結、調印された日韓条約は、「一つの条約と四つの協定、二つの議定書、五つの合意議事録、九つの交換公文、二つの往復書簡、二つの討議録」からなる膨大な文書だが、その解釈をめぐるのは当初から日韓のあいだに大きな隔たりがあった。そもそも会談に臨む日韓の認識は異なっており、その乖離は長きにわたる交渉でも狭まることはなく、曖昧さを含んだままの「決着」になってしまったからにはほかならない。韓国併合にいたる一連の旧条約の効力を規定した「基本条約」の条文（「もはや無効」）や、「請求権協定」による個人請求権の範囲やその消滅をめぐるのは、日韓のあいだで解釈の違いがあり、現在にいたっても日韓関係におけるある種の争点になっていることは周知のとおりである。」（李鐘元・木宮正史・浅野豊美「外交文書公開と日韓会談研究の新展開」李鐘元・木宮正史・浅野豊美編『東アジア冷戦編——歴史としての日韓国交正常化 1』法政大学出版局、2011年、3頁）。

⁵菊池嘉晃『北朝鮮帰国事業——「壮大な拉致」か「追放」か』中央公論新社、2009年、1頁。

⁶スタインホフは1970年3月31日の「よど号ハイジャック事件」について以下のように述べている。「九人の赤軍派のメンバーが日航の国内線旅客機「よど号」をハイジャックし、朝鮮民主主義人民共和国の首都平壤に向かわせたのである。（中略）朝鮮民主主義人民共和国は、ハイジャッカーに対し刑法上の罪を科すことがなかったが、かわりに、革命戦線のために彼らを「再教育」することとなった。」（パトリシア・スタインホフ、木村由美子訳『死へのイデオロギー——日本赤軍派』岩波書店、2003年、101頁－102頁）。

⁷鹿島正裕『冷戦終結後の世界と日本』風行社、1997年、7頁。

⁸信田智人『冷戦後の日本外交——安全保障政策の国内政治過程』ミネルヴァ書房、2006年、134頁。

⁹2003年に発表された小針進の研究によると、北朝鮮の戦争挑発の可能性に対する韓国『中央日報』の調査では北朝鮮が今後3年間のうちに韓国を全面攻撃する可能性に対し、63.5%がないと答えたのに対し、日本では現在北朝鮮は危険かという設問に、危険だという回答が93%を占めたデータ―「TBS世論調査」（2003年5月31日から6月1日実施）―もあることが明らかになった。（小針進「일・한양국의 국민여론과 북한문제를 둘러싼 주변국과의 관계」 한국오코노기연구회편『新韓일관계론―과거에서미래로』 도서출판오름、2005年、152頁）。

（小針進「日・韓両国の国民世論と北朝鮮問題をめぐる周辺国との関係」韓国小此木研究会編『新韓日関係論―過去から未来へ』 図書出版オ름、2005年）

¹⁰이철현^{イチョルヒョン}は、北朝鮮のイメージ変化について以下のように述べている。「（日本語訳は引用者による）アメリカのジョージ・W・ブッシュ大統領は、2002年1月29日に米上・下議員合同会議で行われた演説で北朝鮮をイラン・イラクとともに大量破壊兵器（WMD）を開発し世界平和を脅かす「悪の枢軸（AXIS OF EVIL）」と規定した。この表現はそれまでの「ならずもの国家（ROGUE STATES）」を超えた強硬な表現であった。」（이철현「미국의 “악의축” 政策과 한반도정세」 『社會科學論叢』 VOL. 18、명지대학교사회과학연구소、2002年、133頁）。

（イ・チョルヒョン「米国の“悪の枢軸”政策と韓半島情勢」 『社会科学論叢』 VOL. 18、明知大学社会科学研究所、2002年）

¹¹和田春樹は、この点について以下のように述べている。「九七年から横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されたのではないかということが浮上し、日本政府が彼女のケースを「拉致疑惑」の中に数えると決定した後、北朝鮮本の出版は急増した。もっとも「拉致疑惑」は確たる資料が少ないため、拉致問題自体を扱った本はあまり多くない。事の発端をなしたテレビ朝日系列のディレクター石高健次の本『金正日の拉致指令』は九六年に出たのだが、内容は別にして、朝日新聞社からこのような題名の本が刊行されたこと自体が驚きである。石高は九七年にはカッパブックスから『これでもシラを切るのか北朝鮮―日本人拉致続々届く「生存の証」』を出した。九八年には横田めぐみさんに会ったと証言した安明進の本『北朝鮮拉致工作員』が出ている。九九年は日本電波ニュース部長高世仁の本『娘をかえせ、息子をかえせ―北朝鮮拉致事件の真相』が旬報社（元労働旬報社）から出た。この九九年、北朝鮮本は七十九冊刊行され、年最高記録を更新した。この年の代表的な本は、北朝鮮からの大物亡命者黄長燁の手記『金正日への

宣戦布告—黄長燁回顧録』である。こののち、二〇〇〇年以降は点数はずこし下がっている。二〇〇〇年六月の南北首脳会談ののちにはこれに対抗する論者の本がいくつも出たが、全体としては北朝鮮への認識の悪化にブレーキがかかった感があった。しかし、二〇〇二年、日朝首脳会談のあと、十月—十二月に出た本は三十六冊に達し、北朝鮮本の四半期出版点数の最高記録となった。」（和田春樹「北朝鮮ネガティブキャンペーンを読み解く」和田春樹・高崎宗司編『北朝鮮本をどう読むか』明石書店、2003年、15頁—16頁）。

¹²日朝平壤宣言以後の北朝鮮バッシングについて和田は以下のように述べている。「小泉首相の電撃的な平壤訪問、日朝首脳会談、そして平壤宣言の調印によって、日本と朝鮮民主主義人民共和国は、過去の敵対、怨讐をのりこえて、傷を癒しつつ、すみやかな国交樹立に向けて、ともに誠実に努力していくことになった。しかしながら、金正日国防委員会委員長が日本人十三人の拉致を認め、うち八人はすでに死亡していると明らかにしたことが日本国民にあたえた衝撃はあまりに大きかった。はじめて「拉致疑惑」は拉致の事実となり、驚き憤激が本格的に高まるにいたったのである。拉致された犠牲者の家族、帰国した五人の生存者について、二ヵ月以上、連日のように、同一の調子の報道がなされた。合わせて北朝鮮はこのような犯罪行為をする国家であり、崩壊に瀕している国だというイメージが、テレビ、週刊誌を通じて流されている。」（同上、7頁）。

¹³朴春日『近代日本文学における朝鮮像』未来社、1969年。

¹⁴同上、274頁。

¹⁵同上、315頁。

¹⁶同上、315頁。

¹⁷渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮——文学的考察』岩波書店、2003年。

¹⁸樋口雄一は「朝鮮総連」について以下のように述べている。「一九五五年、民戦は組織改革を実施して新しい在日朝鮮人組織である在日本朝鮮人総連合会（総連）となる。そのポイントはこの組織がそれまで指導を受けることになっていた日本共産党から離脱し、朝鮮民主主義人民共和国の海外公民として日本で生活するという方針転換をしたことであった。朝鮮人たちは日本共産党員から離脱し、共和国公民として運動を展開することとなったのである。（中略）以後、日本の内政干渉と受け取られるようなことは差し控えられ、生活や人権擁護、外国人とし

での平等な権利が認められるような運動に転換していった。とくに教育弾圧や公立学校での朝鮮人子弟の教育などで民族教育の体系が崩れていたが、民族教育整備を事業の柱として朝鮮人学校の拡充を図ることに最大の力を注いで、朝鮮人学校の体系的な展開がすすんだ。」（樋口雄一『日本の朝鮮・韓国人』同成社、2002年、175頁）。

¹⁹渡邊一民、前掲書、209頁。

²⁰同上、278頁。

²¹中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌——近代日本と他者をめぐる知の植民地化』新曜社、2004年。

²²同上、25頁。

²³渡辺武達「メディア操作される北朝鮮像——メディア・ホークス（4）」『評論・社会科学』50号、同志社大学人文学会、1994年9月。

²⁴同上、55頁－56頁。

第1章 帰国事業における「楽園」幻想への疑念

——金達寿「日本人妻」論

第1節 はじめに

金達寿（以下「金」と略す）は、1919年に現在の韓国の慶尚南道昌原^{ギョンサンナムドチャンウォン}で農家の三男として生まれ、朝鮮がまだ日本の植民地だった1930年に日本へ渡った。日本大学専門部芸術家に入学した翌年の1940年に処女作「位置」を、日本大学芸術科が発行していた雑誌『芸術科』（1940年8月号）に発表し専業作家としてデビューした彼は、以後『文芸首都』（文芸首都社、1933年－1970年）、回覧同人誌『鶏林』などを経て、1946年朝鮮人連盟（以下「朝連」と略す）の援助を受けて雑誌『民主朝鮮』（民主朝鮮社・朝鮮文化社・文化朝鮮社、1946年－1950年）を創刊し、編集者を務めるなど、創作活動を行った。そして1969年に長編小説『太白山脈』（筑摩書房）を発表した後、文学活動から徐々に身を引き、晩年には日本の古代文化探求に没頭し、『日本の中の朝鮮文化 その古代遺跡をたずねて』（全12巻）（講談社、1970年－1991年）を発表した¹。

金は、帰国事業を背景とした短編小説を2編残している。まず、短編小説「日本に残す登録証」は、1959年『別冊週刊朝日』（朝日新聞出版、昭和34年6号、1959年11月1日刊）に発表され、以後『金達寿小説全集 第2巻』（筑摩書房、1980年）に所

収された。まだ在日朝鮮人の北朝鮮への渡航が始まる前（渡航開始は1959年12月）に書かれた「日本に残す登録証」では、北朝鮮に行くことを決めたある朝鮮人青年がもつ期待や、それとは裏腹に安定しはじめたばかりの日本での生活をあきらめることに対する未練ともいうべき気持ちが巧妙に描かれている。

金による「プレ帰国物語」といえる「日本に残す登録証」の他に、本章で主な考察対象とするのは、帰国事業における在日朝鮮人男性の配偶者である日本人妻を主人公に据えた短編小説「日本人妻」である。「日本人妻」の初出「日本人妻物語」は、1961年『別冊週刊朝日』（朝日新聞出版、昭和36年3号、1961年5月1日刊）に発表され、後に「日本人妻」と改題されたものが短編記録集『中山道』（東方社、1963年）と『金達寿小説全集 第2巻』（筑摩書房、1980年）に収載された。

「日本人妻」のあらすじを要約すれば以下の通りである。朝鮮南部の慶尚南道金海^{ギョンスンナムドキムヘ}出身で、戦前に炭鉱労働者として徴用されて日本に渡った朝鮮人男性である劉徳守^{ユドクス}（以下「劉」と略す）と、戦争で日本人の夫を亡くした戦争未亡人である加原芳江は1945年に結婚し、戦争が終わる1945年以後、南朝鮮と日本を行き来して様々な差別と苦境に直面する。やがて在日朝鮮人の北朝鮮への帰国事業が始まると、芳江は「帰国」を決心し、夫と息子を北朝鮮に行かせるが、芳江自身は、亡くなった日本人夫との間に生まれていた娘であるさだ子の養育費の問題で「帰国」できず、一人新潟に残されることとなる。

小説「日本人妻」は、日本人の妻であると同時に朝鮮人の妻でもあるという二重の属性をもつ存在として生きざるを得なかった日本人妻を主人公に据え、彼女の目から帰国事業を見直しているという点で注目に値する。

本章でこの作品をとりあげる最大の理由は、この作品が「地上の楽園」あるいは「社会主義楽園」として北朝鮮を理想化することと深い関係にあった帰国事業において、日本人妻が北朝鮮に無事渡ることができる成功話ではなく、「帰国」を挫折させられる失敗談を描いた点である。そして北朝鮮は「帰国」すべき「祖国」であり「楽園」であるという、帰国事業をめぐる言説への批判ともなりうる疑念を、芳江を通して表しているからである。

この作品について唯一の先行研究を行った川村湊は、「日本人妻」を「日本に残す登録証」と並べて、次のように評価している。

「日本に残す登録証」（別冊週刊朝日）1959年や「日本人妻」（同1961年）は、1960年から始まった北朝鮮への帰還運動を作品世界の背景としており、在日朝鮮人の世界に澎湃として起こり、日本人をも巻き込んだ熱狂的な運動となった帰国事業を、ナイーブに信じ込んでいる。もちろん祖国で帰っていった人々がやがてどんな運命に逢着することになるのか、そんなことはそうした祖国帰還の運動に邁進した在日朝鮮人のだれも予想することなどできなかったのである²。

上掲の引用で川村は、金が書いた「日本に残す登録証」と「日本人妻」が帰国事業を「ナイーブに信じ込んでいる」と述べ、北朝鮮をめぐる理想と現実の乖離を冷静に見極めなかった作家を遠回しに批判している。しかし、「日本に残す登録証」と「日本人妻」という作品が、「帰国事業」に対して「ナイーブ」な期待を煽っている作品かどうかについては異論の余地がある。

以下、本章では、「日本に残す登録証」と「日本人妻」が北朝鮮を安易に「楽園」として、または「祖国」として表象しないばかりか、帰国事業や北朝鮮に批判的なまなざしを向ける作品として位置づけることも可能であることを示したい。

具体的には、まず、作品の背景となる帰国事業と日本人妻についての基本的な情報を確認する。次に、朝鮮半島南部出身者が多かった在日朝鮮人たちが、北朝鮮をなぜ「祖国」として「想像」するようになったかについて論じる。そして、日本人妻の北朝鮮への「帰国」をめぐる言説が、彼女たちに帰国事業についてどのような意識をもつように働きかけていたのかを論じる。作品分析では、まず、「日本に残す登録証」をとりあげ、密航者という不安定な状況からようやく外国人登録証を手に入れ安定した生活をおくれるようになったある朝鮮人青年が、帰国事業で北朝鮮へ「帰国」することを選択したにもかかわらず、「帰国」を喜ぶばかりではなく、日本を離れることを惜しむようなニュアンスを漂わせる様子を分析する。「日本人妻」の考察では、主人公の芳江が朝鮮人である夫に対する日本での民族差別や貧困に耐えず、夫と息子3人で北朝鮮へ「帰国」を決意した場面をクローズアップして、「日本人妻」において北朝鮮がどのように表象されているか、その両面価値について論じる。北朝鮮を理想の地・「祖国」として表象しつつも、日本人妻である芳江はそれに疑念を抱き、とまどうような姿勢を見せるだけでなく、「帰国」することで喜ぶ夫と息子をみてさびしさをも感じる。それは芳江の「帰国」へのためらいとしてとらえられる。

このように、金は帰国事業と日本人妻の「帰国」を応援する執筆活動を活発に行っていた一方で、彼の小説は、帰国事業における北朝鮮に対する「幻想」は弱化され、帰国事業を推進する側の言説を批判するという側面をもっていることを明らかにする。

なお、本章では「日本に残す登録証」と「日本人妻」という二つの作品を分析・考察する上で、いずれも『金達寿小説全集 第2巻』（筑摩書房、1980年）所収のテキストを底本とする。

第2節 帰国事業と日本人妻について

「日本に残す登録証」と「日本人妻」の本格的な考察に先立って、帰国事業と日本人妻に関する基礎的な事実を確認しておく必要がある。なぜなら、とくに「日本人妻」の主人公である芳江がとる言動は、何よりも帰国事業そのものに影響されているからである。

本論文で論じる「帰国事業」の日本政府による正式名称は「帰還事業」である。しかし、帰国事業をみる立場によっては他の言い方も用いられる。たとえば、在日朝鮮人による自発的な意思を重視し、在日朝鮮人運動史的観点からとらえて「帰国運動」という名称を用いる場合もあれば、当時も今も韓国政府の立場からは「自国民」としての在日朝鮮人を日本政府と北朝鮮政府が北朝鮮に強制送還させたという見解に立ち「北送事業」と呼ぶ場合もある。帰国事業を研究した菊池嘉晃は『北朝鮮帰国事業』（中央公論新社、2009年）において、「日本人配偶者はもちろん、朝鮮南部出身者の多い在日一世、日本生まれの在日二世らにとって北朝鮮へ渡るとは厳密な意味での帰国ではない」³と述べて「帰国」という言い方に対して断っているが、本論文では、北朝鮮を「祖国」であるかのように想像させる言説の働きがあったことや、作中の人物である劉と芳江が北

朝鮮を「祖国」と思って帰ろうとしたことなどを考慮し、「帰国事業」という名称を用いることとする。

テッサ・モーリス＝スズキによれば、帰国事業は、北朝鮮政府が 1959 年 11 月上旬にソ連に対して正式に帰国者のための配船を依頼して、クリリオン号とトボルスク号の 2 隻を用意し、1959 年 12 月 14 日に第一次帰国船 2 隻が 975 人を乗せて、受け入れ港に決められた新潟港を出港して以降、1984 年 7 月 25 日に第 187 次最終船が出港するまで、86603 人の朝鮮人とその配偶者あるいは扶養家族である日本人 6730 人、そして中国人 7 人を合わせた総計 93340 人が北朝鮮へ大量移住した事業である⁴。日本政府と北朝鮮政府の間には国交がなかったため、名目上の推進は国際赤十字社の管理のもとに日本赤十字社と北朝鮮赤十字社間で行われたものの、どちらも各国政府の意向を代理しており、日本は国内のマイノリティ問題の解消を計り、北朝鮮は海外居住朝鮮人を自国領土内に引き入れた。

彼らのうち、在日朝鮮人の家族とともに北朝鮮に帰国した日本人妻の総数は、統計資料によりばらつきがあり、確定した数字は存在しないが、一般的に 1800 名強と考えられている。その根拠は、1980 年 5 月 7 日の衆議院法務委員会で法務省入国管理局長が答弁の中で挙げた数字（「日本国籍のまま北朝鮮に渡った日本人の数として男女合計で 6671 名、そのうち女性は 4082 名、日本人妻と推定される者の数は 1828 名」）である⁵。

第 3 節 帰国事業言説における「樂園」としての「祖国」

在日朝鮮人の大多数は、朝鮮南部すなわち現在の韓国に当たる地域の出身であった。しかし、ほとんどの在日朝鮮人が北朝鮮に渡ったことは、帰国事業を論ずる際に重要視される問題である。実際、朝鮮南部出身の在日朝鮮人たちは北朝鮮に帰ることに違和感があったという⁶。在日朝鮮人が北朝鮮へ渡ることを選択した事情について、太田修は次のように記している。

まず一つ目に、在日朝鮮人の生活苦があった。五六年の生活保護の大幅削減と五八年の「なべ底景気」により在日朝鮮人の生活は厳しいものとなっており、北朝鮮へ帰国することによって経済的困難から脱却できると考えた人も多かったであろう。

二つ目に、在日朝鮮人の間に社会主義国への憧れがあった。日本の敗戦により祖国を取り戻した人々が、朝鮮戦争から復興し始めた北朝鮮への憧れを持ったのは当然だったが、同時にその憧れには新興社会主義への幻想がともなった。一部の日本の知識人、革新団体、総連がその幻想作りを手伝ったことも否定できない。三つ目に、子どもの将来への不安があった。日本社会での民族差別と蔑視の中で子どもの将来に不安を抱き「帰国」を選択した人々もいた⁷。

この引用は、「帰国」の理由として、①経済的問題、②精神的な満足、③日本での民族差別からの逃避を指摘している。その他に、菊池義晃は「帰国事業開始の時期、世界的にも社会主義圏の勢いは強く、李承晩政権末期の韓国の混乱に対し「南の政権は遠からず自壊し、いずれ北の共和国によって統一される」との見方が朝鮮総連関係者を中心に広がっていた」⁸と述べ、その根拠を次のように分析している。「そうした見方は六〇

年四月の「四・一九学生革命」で李承晩政権が崩壊すると、より現実感をもって総連系の人々に受け止められた。「北」へ「帰国」しても遠からず統一されて「南」へ帰郷できるだろうと考える人々も多かったのである⁹。朝鮮南部出身の在日朝鮮人たちが北朝鮮に渡ったのは、こうした複合的な理由からであったといえる。

ただし、明確にしておきたいのは、当時の日本と韓国をめぐる状況や、北朝鮮と朝鮮総連の営為は、地理的な「祖国」である「南朝鮮」を相対化させ、心象的な「祖国」である「北朝鮮」を想起させるよう、在日朝鮮人に働きかけたということである。その一例として、北朝鮮政府と朝鮮総連が、日本における在日朝鮮人の民族教育に対する取り組みの重要性を認識し、全力を挙げて支援したことが挙げられる¹⁰。韓国政府の強い反対にもかかわらず、日本政府は 1956 年 4 月に北朝鮮政府からの在日朝鮮人への教育援助金の受け入れを受諾し、1957 年 4 月に 1 億 2109 万円、さらにその 6 ヶ月後にほぼ同額の援助金が北朝鮮から日本に送られてきた¹¹。このことについて在日ノンフィクション作家の金賛汀は、「それまで「祖国」が具体的に在日のために何かをしてくれた体験を持たない人々にとって、素晴らしい感激的な出来事であった。そこに人々は「祖国」の「愛」を実感し、未来に対する希望を膨らませた¹²と語っているが、まさにこのような例こそ心象的な「祖国」を北朝鮮に置き換える力学が働いたケースであろう。

一方で、朝鮮人の夫と共に北朝鮮に渡ろうとした(あるいは渡った)日本人妻たちは、夫の「祖国朝鮮」をどう認識していたのだろうか。また、日本人妻をめぐる社会的な言説における朝鮮表象はどのように展開したのであるだろうか。この問いが重要であるのは、「日本人妻」において、日本人妻の芳江の朝鮮認識が、夫の劉徳守を帰国に導く過程で

決定的な働きをするからである。まず、当時の言説において日本人妻が北朝鮮という「祖国」をどのように認識していたのか、確認する。

たとえば、北朝鮮の清津^{チョンジン}にむけ新潟港から帰国第一船が出発する前日の 1959 年 12 月 13 日の『毎日新聞』には次のような社説が掲載されている。

北朝鮮に帰還する人たちの感情は、こうして、いよいよ日本を去ろうとするときを迎え、たぶん複雑なものがあろう。我々も同様である。この人たちが日本にきて以来の月日は不愉快なことが多かったと思う。戦前の圧迫が忘れられない思い出となっていることも、十分に想像されることだ。(中略) 去っていく人たちに対して日本での、そして日本人に対しての、いい思い出だけは、消さずに持っていることを望む。それがお互いの友好を断ってしまわないための最善の方法なのである。送る側も、いたらなかったことを反省して、北朝鮮での生活が恵まれたものであることを心から願う¹³。

この記事は、「北朝鮮に帰還する人たちの感情」を「複雑なもの」としてとらえている。しかし、記事の後半は、いわばその「複雑」さを解消してくれるのが帰国事業であるかのように書かれている。この事業は、「不愉快なこと」や「戦前の圧迫」といった過去の忌まわしい記憶を「いい思い出」へと変え、北朝鮮と日本との友好をも期待する解決策だったのである。そのためには、在日朝鮮人の帰還先である北朝鮮での生活は「恵まれたもの」であることが暗示されなければならなかったのである。そして、現実がどうだったかは別として、送る側も送られる側も、そのように信じることを「心から願」っ

たのである。この記事においては、帰国事業における北朝鮮を「楽園」として構築するプロセスの一端を読み取ることができる。

また、1959年8月の『朝日新聞』に掲載された「帰国話はタブー——夫と子供には生まれ」という見出しの記事では、朝鮮に帰りたい夫と、帰国に躊躇する日本人妻、姜君江の話を紹介している。

国際結婚して朝鮮（韓国）に帰った人たちのなかには苦勞した人も多かったというのだ。（中略）北朝鮮は違うかも知れないが、これ（引用者：北朝鮮）は未知の国だ。民族的な差別待遇がないかどうかも今のところ分からない。（中略）「子供のためには朝鮮に行った方がほんとうはいいんだと思うけれども、私には決心ができません。自分の国（日本）ならコジキをしてもいい、子供三人くらいは育てて行きます」君江さんの目から涙がボロボロこぼれる¹⁴。

この記事において、姜君江の認識は朝鮮＝韓国で、それに対して北朝鮮は「未知の国」であり、渡航する「決心ができない」国とされている。具体的にいえば、北朝鮮は新しい希望に満ちた魅力ある地ではなく、むしろ不安と懸念を覚えさせる得体の知れない国であり、また、夫と子供のためには行くべきであるが、日本人である自分には何のメリットもなく、むしろ民族的差別を想定しなければならない場所として表象されているのである。実際、北朝鮮に渡った日本人妻たちが書いた手記の中には、夫と子どもの就職差別や周りの差別的な視線、つまり「日本国内での差別」が「帰国」を決心させた一つの要因だったという内容がみられる¹⁵。さらに、上掲の姜君江の談話では、北朝鮮に帰

国した後の北朝鮮における日本人（および朝鮮出身者と日本出身者のあいだに生まれた子ども）に対する「民族的な差別待遇」が存在する危険もあった。結果的にこのような懸念もあってか、北朝鮮に渡った日本人妻の数は決して多くなかった。1950年代、在日朝鮮人世帯、約13万世帯のうち、約5分の1から3分の1が日本人を妻とする世帯であった¹⁶ことから推察すると、実際に北朝鮮に渡った1800人あまりの日本人妻はむしろ特殊なケースであったとも考えられる。

また、1960年3月号の『週刊朝日・別冊』に掲載された「新潟から帰った人々―意外に多い日本人妻」¹⁷という記事からは、上述の事実と反して、当時の日本においては日本人妻は「意外に多い」ととらえられていたことがわかる。この記事には、「彼女たち(引用者：日本人妻)は、たまたま朝鮮人の妻となったということで、自分の祖国のなかでありながら、その夫とともに、様々な圧迫や差別に耐えてこなければならなかった」が、「そこ(引用者：北朝鮮)でしあわせになってくれるように、と望まないではいられなかった」と記されている。

金も、日本人妻の「帰国」に関して、雑誌や新聞に多数の文章を残している。彼の文章にみられる特徴は、誰よりも日本人妻本人の幸せのために、「帰国」がいかに大事であるかを強調している点である。さらに、「朝鮮＝韓国」という図式が完全に消えていることも看過してはならない。このことは、当時「帰国」を推進していた朝鮮総連のプロパガンダ¹⁸とも一致するものであったといえる。

一例として、金が、帰国第一船が出発した1959年12月14日の新潟港を取材し、1959年12月15日付け『読売新聞』に寄稿した手記「帰国船を見送って」の一部をとりあげる。

在日朝鮮人でこのように希望に目をかがやかせ、胸もふくらませたことがかつてあったであろうか。見ると、タラップのうえには朝鮮赤十字の李一卿代表団長が出て立っている。私もここではじめて同団長に紹介されて握手をかわしたのであるが、タラップでは朝鮮からの奉仕者たちが乗船者たちの手荷物を運んだり、老人や子供たちなどは丸ごと抱きかかえるようにして乗船をたすけていたが、李団長はそこに立って、いちいちそれらをことこまかく指図しているのであった。代表団はただ、帰国者たちを引き取りにきたのではない。それはまさに配慮のゆきとどいた「祖国の手」であった。「ザ」「ザ」とひびく北朝鮮なまりもなまなましく、なつかしいものであった¹⁹。

「故国へかける夢——しみじみと平和の喜び」と副題がつけられたこの手記において、在日朝鮮人は初めて「胸をふくらませ」ることのできる瞬間を迎えていると記されている。注目すべきなのは、北朝鮮赤十字社が「朝鮮赤十字社」と記され、タラップで乗船者たちの荷物運びを手伝う北朝鮮から船に乗ってきた奉仕者たちは「朝鮮からの奉仕者」とされており、「朝鮮」といえばおのずと北朝鮮を指すかのような表現がなされている点である。さらに、「乗船者たちの手荷物を運んだり、老人や子供たちなどは丸ごと抱きかかえるようにして乗船をたすけて」いる情け深い奉仕者や団長ら代表団の差し伸べた手は、「配慮のゆきとどいた「祖国の手）」とされている。南朝鮮の出身者が大半を占めるはずの帰国者が聞く北朝鮮の訛りも、いつのまにか「なつかしい」ふるさとのものになっているのである。

この手記について興味深い点は他にもある。それは手記の最後にある金の紹介文についてである。彼の略歴欄には「金達寿氏 在日朝鮮人作家、朝鮮慶尚道生まれ。四十歳。戦前渡日し日大芸術科を卒業。神奈川新聞、京城日報記者を経て作家生活に入った。

「玄海灘」「朴達の裁判」で二度も芥川賞候補にのぼった」と書かれている。日本大学を卒業し、戦前内地と外地の新聞社に勤めた元ジャーナリストで、芥川賞候補にまでのぼった朝鮮人という極めて特殊な経歴は、社会的に低い地位にあった在日朝鮮人コミュニティにおいては珍しいケースであったといえる。彼がもつ地位は、朝鮮人はもちろん日本人にも安心して読んでもらえる信頼を与えるものだったであろう。この紹介文からは、金が大手全国紙などで活発に寄稿できた理由が伺える。つまり、彼は日本において在日朝鮮人を代表する知識人としての地位を獲得していたのである。そのような立場の人物による帰国事業の肯定には少なからぬ影響力があったと推察できる。

さらに金の文章を検討してみよう。以下は、1959年5月号の『婦人公論』に掲載された「夫の国 朝鮮へ帰る“日本人妻”」と題した文章である。

この人たち（引用者：在日朝鮮人）をして朝鮮への帰国を決意させて踏みきらせた最大のものは、生活苦ということもあるが、それは何といても、この日本では民族的差別に耐えられないからであるという。（中略）ただ一つ、ハッキリと確信をもっていえることは、「朝鮮民主主義人民共和国では、この日本でのような民族的差別というものは決してない」ということである²⁰。

ここでは、見出しの中の「夫の国 朝鮮」が「朝鮮人民民主主義共和国」であると具体的に示されている。この朝鮮＝北朝鮮という等式は、植民地化される以前の朝鮮から、植民地朝鮮を省き、直接的に北朝鮮にいたる「祖国」の連続性を強調していると解釈できる。もう一点注目すべきことは、日本人妻の新たな「祖国」である北朝鮮には「民族的差別というものはない」と主張されていることである。このような言い方は、すでに引用した 1959 年 8 月の『朝日新聞』の記事における、「帰国」に躊躇していた姜君江の話した内容と対照的である。

日本人妻について、金は次のような文章も残している。1959 年 2 月の『読売新聞』の記事「帰国する朝鮮人——“日本人”も朝鮮へ」の内容を詳しくみてみよう。

私は最近新日本文学会あてに送られてきた「朝鮮児童作品集」というのを一冊うけとった。これは朝鮮・平壤の外国文出版社がだした日本文で、平壤師範専門学校付属人民学校三年生、李玉秀をはじめとする二十人ばかりの児童の作品集である。なぜ私は冒頭にこの「作品集」をもちだしたかという、その内容をここに紹介しようとするためではない。紹介したいのは、これの翻訳者である。それは水生勝子、日本人である。私はこの本を手にしたとき、さいしょはチョット奇異な感に打たれた。「水生」などという姓は朝鮮にはない。中国にもないはず^マが、私はすぐに「ははア、なるほど」と思った。(中略)あの「児童作品集」を翻訳した水生勝子さんというのはこの“日本人妻”の一人にちがいないのである。朝鮮では結婚しても互いの姓は依然として元のままであるから、この人はそれにちがいないと私は思うのであるが、それとも、その夫も日本人であるか？それはどちらでもいい、いず

れにしても私はここで一つの空想をするのである。それは、この“日本人”たちも朝鮮へ帰ってやがて数年もすれば、この水生さんのように朝鮮語を自由にすることができるであろう。そしてこの人たちは、こうして翻訳をするばかりか、やがては朝鮮語で小説や詩をもかくことになるかも知れない。その渡来の来歴はまったくちがうが、私がいまこうして日本語で文章を書いているように。そして、この人たちはきっと日本のこと、日本人の生活のことをかくに違いない。何だか自分のことを裏返しにしていっているみたいで気がひけるが、しかし、それは必ずこの朝鮮と日本というシュクメイ的な両国、両民族の理解にとって大きな寄与となるであろう。すでに、水生勝子さんは向こうでそういう仕事をしているのだ²¹。

この文章における金の日本人妻に対する立場は明快である。記事の中で紹介されている「水生勝子」は日本人妻であるが、彼女が北朝鮮で翻訳した「児童作品集」に接した金は、北朝鮮が日本人妻にとって「未知の国」などではなく、（上掲の引用で金自身が述べているように）朝鮮人である金自身が日本に渡り著名な作家になったのと同様に、日本人妻たちも朝鮮語で「小説や詩」を書けるかもしれない場所であると語っているのがある。

以上のように、金は、朝鮮人と結婚したことによって、とくに日本国内では民族的差別を受ける可能性が高い日本人妻たちをも朝鮮民族として受け入れるという「祖国」、すなわち北朝鮮を称揚しているのである。このように、金が帰国事業と北朝鮮の体制について肯定的に述べていたことを確認した上で、「日本に残す登録証」と「日本人妻」、とくに後者について詳しく論じることとする。

第4節 「日本に残す登録証」の曖昧さ

まず、「日本に残す登録証」について論じる。この作品はある在日朝鮮人青年の北朝鮮「帰国」への期待感を描いた作品ではあるが、それだけではなく、日本の生活への未練を暗示するような叙述がなされていることを示したい。

最初にこの作品のあらすじを紹介する。ある日、在日作家の「私」の家に呉成吉（以下「呉」に略す）という青年が訪ねてくる。呉は1953年の朝鮮戦争の停戦と同時に密航して日本にきた密航者であった。彼が密航してきた理由はテキストでは明確には語られていないが、呉の父、呉陽沢オヤンテクが、植民地時代に日本の監獄に入れられていたことが関係するかもしれない。この理由もテキストでは明らかになっていないが、1945年の朝鮮の解放後、釈放された呉陽沢が韓国成立後間もなく監獄に逆戻りさせられ、「朝鮮戦争が始まると同時に、その監獄から引きだされて、多くの政治・思想犯とともに、憲兵たちによって山中に生理めにされた」（263頁）という記述や、その後呉成吉が「赤色家族」といわれていた」（263頁）という言葉から推測すれば、呉陽沢は共産主義者であった可能性が高い。つまり、こうした父をもつ呉には、朝鮮半島を離れる理由があったわけである。実際、その後朝鮮戦争が起こり、「父の味方であるはずの北の人民軍は慶尚南道・馬山すれすれにまで南下してきたけれども、アメリカ軍のためにそれは果されず」（263頁）敗退し、「李承晩政府がまだ健在であるとわかった南朝鮮にはとどまる気がしなかった」（263頁）ため、戦前から日本に渡っていた叔父が住んでいる「東海道沿線のS市」（264頁）にやってきたのである。

そんな呉が小説の語り手である「私」（作者の金自身である可能性が高い）を訪ねた理由は、今度始まる帰国事業で北朝鮮に行くことになった自分の日本での経験を話したいからであった。密航者としていつも日本の警察に逮捕されることを恐れていた呉は、すでに日本に渡っていた叔父の家に隠れて生活しながら、叔父の洗濯屋の仕事を手伝うことになる。叔父はそんな呉のために偽の外国人登録証を闇市から手に入れて呉に渡す。ところが、この偽の登録証も期限切れで更新の日が訪れ、呉は市役所の支所に登録証の更新に行くが、明らかに登録証の写真と別人の顔をしているため係員から疑われる。しかし係長の黙認で登録証の更新ができ、呉は日本で暮らしていけるようになった。それにもかかわらず、彼は「帰国」することを選択する。

ここで注目したいのは、主人公は日本でひどい目にもあったが「よい思い出」（273頁）もあるということである。つまり、ここで金は北朝鮮と帰国事業を無条件で賛美せず、「帰国」しない人々のそれなりに幸福な人生もあることを暗示しているともいえる。しかしその「よい思い出」も作品の最後で相対化されている。以下はその箇所である。

係長は手にしているそれを係員の机におくと、うしろ向きになって出ていった。五分後、呉成吉はころがるようにして、その支所を出てきた。朝から飲んだ酒が、そのときになってカアッーと酔いを発してきた。

呉成吉は駆けよってきた叔母に支えられながら、大道にそのままぶったおれた。叔母は歓喜の声をあげて、泣きだした。――

「ぼくがあなたに話したかった、はなしというのは、これだけです」と、呉成吉はいった。

「つまり、その係長は何もかも、知っていたのですね」と私がいった。

「そうなのです。まえのもう一人の交番の巡査もそうだったのですが—」

「うむ、そうですね」

「ぼくはあと一ヶ月もすれば、いまもっているその外国人登録証を、この日本に残して帰るのですが、これには、それだけの思い出がつきまとっているのです。そしてぼくは、その思い出だけは……、いや、はっはは」と呉成吉は、急にうつろな声を立てて笑った。(273 頁)

この作品には、理想の地としての北朝鮮が明示的に描かれているわけではない。しかし、日本社会で苦闘する呉が「帰国」すべき地として、具体的な姿が描写されない北朝鮮の存在がしっかりと示唆されているのである。他方、この作品は、呉の（不法取得した）外国人登録証をめぐる「思い出」が「とても明るい」（262 頁）という記述で始まるものの、最後は「うつろな声を立てて笑った」（273 頁）と、呉の日本への態度の複雑さを示している。こうしてみると、この作品は、呉青年の日本社会に対する「思い出」の複雑さを示すことで、在日朝鮮人の日本社会における不遇や不満を表現し、それを解決する手段としての北朝鮮の重要性を暗示し、間接的に帰国事業を正当化するものともいえる。しかし、在日朝鮮人が「帰国」すべき、希望に満ちた場所としての北朝鮮像を明確に提示してはおらず、呉青年のような人々が北朝鮮に「帰国」せずとも生きていける日本の状況をも描写している。この作品は、川村が指摘するように「日本人をも巻き込んだ熱狂的な運動」²²であった帰国事業の産物ではあるのだが、しかしそのプロパガンダとしてのみ論じるのは難しい、ある種の曖昧さをはらんでいるというべきだろう。

第5節 「日本人妻」における北朝鮮表象

本節では、「日本人妻」について論じることとする。この作品は、帰国事業に期待を寄せる日本人妻の姿を描いており、彼女のような立場の人も「帰国」すべき地として北朝鮮を肯定しているという意味において、川村が示唆しているように、「在日朝鮮人の世界に澎湃として起こり、日本人をも巻き込んだ熱狂的な運動となった帰国事業を、ナイーブに信じ込んでいる」²³と結論づけることも可能ではあるが、一方で、帰国事業や北朝鮮体制賛美のプロパガンダとしては微妙に曖昧で、押しの弱さが目につくのも事実である。

まず、テキストにみられる芳江が語る理想の国としての北朝鮮について、作品に即して考察したい。次は、理想の国としての北朝鮮を夫に紹介した後、自分も北朝鮮に行こうと決意するものの、一方では「帰国」へのためらいも感じる芳江の姿を通して、「日本人妻」における北朝鮮表象について論じていきたい。

5.1 民族差別のない社会、北朝鮮

芳江と劉が結婚したのは1945年であり、劉は芳江と彼女の前夫中川との間に生まれた娘であるさだ子を伴って「戦後の混乱のなかを、逃げるようにして朝鮮の劉徳守の故郷」(333頁)へ帰っていった。そして、1948年の韓国建国前の朝鮮南部の「慶尚南道・金海」に着いた芳江は、日本から送った荷物が届かないことを調べに単身で釜山に行っ

た劉が、芳江に知らせずに単身で再び日本に出稼ぎに行ってしまう以降、「ことばも知らない異民族のただなかで」(333 頁)途方にくれることとなる。娘のさだ子と経済的にも苦しい日々を送っていた芳江は、やがて、日本人であるという理由で村の人々からも排斥され、翌年さだ子連れて日本に戻ることになる。

日本で夫の劉と再会した芳江は、かつぎ屋や屑屋をして生計をたてる夫と共に、大阪、福井、新潟を転々としながら生活していく。しかし今度は夫の劉が、日本人が行った詐欺の罪を朝鮮人であるという理由で被せられ、さらには泥棒であると疑われたりと、不当な民族差別を経験する。それだけではなく、劉の詐欺疑惑は朝連にまで持ち込まれ、同じ朝鮮人のメンバーから「詐欺を働くとは「朝鮮人の面汚しではないか」」(336 頁)といわれ、暴行を受ける。最後には日本の警察に連行され、拷問をうけた劉は「精神分裂症」(340 頁)になる。劉・芳江夫婦は、それぞれ妻の国、夫の国で民族差別を味わった経験をもつのである。しかし、こういう厳しい状況を乗り切るため、より積極的に行動するのは妻の芳江の方であった。国の失業対策労働者として日雇い労働で働いていた芳江は、劉に帰国事業の話を持ちかける。以下の引用は、芳江が帰国事業の話に劉を持ちかけた時の芳江の心境があらわれている箇所である。

その彼をさいごに救うことになったのは、在日朝鮮人の帰国であった。

はじめ、そのはなしを聞いてきて持ちだしたのは、劉ではなくて、芳江の方であった。劉は半病人でいつも家のなかでぼんやりしていたから、そんな世間の動きも何も知らなかったが、芳江は長いあいだの失対労働者として、いまはその組合運動

にも加わっていたから、朝鮮民主主義人民共和国・北朝鮮における社会主義のことなども、むしろ彼女の方がくわしく、よく知っていた。

芳江は、朝鮮といえば、あの南朝鮮でのことを思いだしておぞけをふるったが、しかし、だからまた、その南とはまったく別な朝鮮があるということをも知るようになっていた。彼女は失業者というもののいない新しい社会というものについて夫の劉に話しながら、それを持ちだしたのであったが、そんなにくわしく語る必要はなかった。

「なに、朝鮮へ帰る、帰れる？」と劉はそれを聞くと、すぐに目をかがやかせていった。(341 頁)

半病人で世間の動きを全く知らない劉にくらべ、芳江は労働組合運動に加わっていたため、北朝鮮における社会主義をよく知るようになっていた。夫を救うことになった帰国事業がめざす「祖国」として、そして、世間しらずの夫にとっても芳江自身にとっても民族差別のない社会として、芳江は北朝鮮を位置づけようとしている。このような姿勢は、前述の日本人妻姜君江が不安を覚えていた「未知の国」としての北朝鮮とは大きく異なる評価である。また、芳江は、かつては朝鮮といえば南朝鮮を思い浮かべていたが、その南朝鮮で日本人であるという理由から民族差別をうけたがゆえに、南朝鮮に比べて北朝鮮の方により好感をもつのは不自然ではないといえるだろう。それでは、その「南とはまったく別な朝鮮」、すなわち北朝鮮は、テキストの中でどのように表象されているのだろうか。

芳江は北朝鮮を「失業者というもののいない新しい社会というもの」とであると夫に紹介している。帰国事業において、北朝鮮を「楽園」に表象する際の骨子は、経済的な平等が強調され、失業者がおらず、みなが働ける・食える社会であるというものであった。従って、芳江が夫の劉に話した北朝鮮は、当時「帰国」を考えていた人々にとって「理想の国家」に近いものであったといえる。芳江による北朝鮮表象は、韓国を「朝鮮」から切り離しつつ「朝鮮＝祖国＝北朝鮮」の等式を完成させる側面をもっており、さらには、北朝鮮側の声を代弁していた朝鮮総連をはじめ、雑誌・新聞などのメディアを利用して積極的に帰国事業を応援する活動を行った金の主張とも合致する部分があるといえる。しかし、芳江は「失業者というもののいない新しい社会というもの」において「というもの」を付し、一定の距離を保とうとしている点には注意したい。つまり、決して「失業者のいない社会北朝鮮」とはしていないのである。

5.2 芳江が抱える北朝鮮への疑念

前節で論じた引用における「失業者というもののいない新しい社会というもの」という言葉に、芳江はある種の留保を加えているのを確認した。以下の、芳江が北朝鮮行きを決意する他の箇所にも、類似した留保を読み取ることができる。

芳江はその目のかがやきのなかに、ハット、民族というものを見たような気がした。

民族一。それは芳江にとっては、いまだに不可解なるものであった。かつては自分があの南朝鮮で体験したもの、そしていまは夫の劉徳守がこの日本でなめているもの、そこにはどちらにもその民族というものがあつた。

もしその差別のないところがあるとすれば、かりにそこがどこであろうと、夫のために、またそのあいだに生まれていまはもう十一歳にもなる長男の義夫のためにも、自分はそちらへ行くべきではないか。しかもそこは、ほかならぬ彼らにとっての祖国なのだ。そう考えて、彼女は自分もいっしょにもう一度その朝鮮へ帰って行こうと決意したのであつた。(341 頁)

この引用の最後でみる限り、芳江はもう一度朝鮮に帰る決心をしている。しかし、その決意に至るまでの過程に注意する必要がある。二人とも朝鮮と日本において民族差別を経験した芳江夫婦にとって民族差別がないところは最後に希望を託すことのできる地であるに違いない。ところが、芳江は「もしその差別のないところがあるとすれば、かりにそこがどこであろうと」といって民族差別がない場所が存在することを完全には信じていない姿勢を見せている。さらに「もし」、「かりに」という、判断を留保する言葉を連続して使っていることから、まだ彼女自身が身をもって確認したことのない地に対して警戒するような態度をとっていると分析できる。それは、芳江が夫の劉と一緒に渡った南朝鮮で味わったつらい思いを北朝鮮でも同様に味わうかもしれないということへの懸念であると分析することも可能であろう。この北朝鮮への疑念ともいべき芳江の姿勢と、第 3 節で前述した『婦人公論』1959 年 5 月号に寄せた金の寄稿の中にある「朝鮮民主主義人民共和国では、この日本でのような民族的差別というものは決して

ない」ということである」²⁴という言葉は対照的である。労働者となって組合運動にも参加し、北朝鮮の社会主義を「よく知っていた」芳江にとっては、民族差別というものが「決してない」²⁵という金の言葉も相対化されているのである。

さらに芳江は、北朝鮮を彼女自身の「祖国」ではなく夫の劉と息子の義夫の「祖国」とし、テキストでは「ほかならぬ彼らにとっての祖国」という表現にとどめている点に注目したい。芳江は、帰国事業を利用して北朝鮮に行くことを決意した理由として、第一に夫の劉のために北朝鮮がどんなところであれ、自分に行くべきであると述べている。次に 11 歳になった長男の義夫のためにも自分に行くべきではないかと語っている。しかし、どこにも自分のために北朝鮮へ行くべきであるというセンテンスは見当たらない。そして「(引用者：北朝鮮は) ほかならぬ彼らにとっての祖国」というセンテンスからみても、北朝鮮を彼女の祖国としては受け止めていないことがわかる。

上述した芳江の認識は、日本人妻言説における重要な部分である日本人妻の「祖国」意識の変換、つまり、夫の「祖国」が自分の「祖国」となって、日本人妻も北朝鮮に行き何の不安も民族差別もなく幸せに暮らせるというテーゼに対して「朝鮮人と結婚しただけで日本人妻も北朝鮮を祖国として安易に想像することができるか」という問題提起となっている。金が何より力を注いで伝えたかった「日本人妻の祖国、北朝鮮」での「幸せな生活」というテーゼは、彼自身が書いた小説の中では機能していなかったのである。

「日本人妻」における北朝鮮表象の両面価値はこのように表れているのである。そしてこのことは、「帰国」することを決めた芳江に「帰国」へのためらいを感じさせ、帰国の頓挫につながる結果となる。

5.3 芳江のさびしさと「帰国」へのためらい

前節で論じた芳江の北朝鮮表象を踏まえて、本節では、芳江が「帰国」を決意したにもかかわらず、ためらっている様子を指摘したい。芳江のためらいは、帰国事業を背景としているこのテキストの結末に大きな影響を与えている。以下は、上述の引用の直後の文章である。

ふしぎなことに（と芳江は思った）、それからというものは劉徳守は急に生き生きとしはじめ、ちょっとのあいだにまるで人が変わったようになった。そして、

「芳江、お前にも長いあいだ苦勞をかけた。おれも、まだまだどうして故国へ帰ったらもう一花咲かせてみせるよ」などといったりした。すると、朝鮮といってもそこがどういうところか、まだ見たこともないはずの義夫までが、

「お母さん、早く帰れるといいね。朝鮮へ帰ったら、ぼく、お母さんにうんと孝行するからね」と、どうやら父に教わったらしいそんなことをいうのを聞くと、芳江はなぜか、いまはちょっとさびしいような気さえた。 （341 頁－342 頁）

芳江から「帰国」の話聞いた後、目のかがやきがもどり、生き生きしはじめた劉は、まるで「精神病」を患う前の健康だった時のように芳江に向かってこれまで苦勞をかけたことをあやまり、北朝鮮に帰ってからの生活に対する期待感を語っている。問題は、それを聞いた息子の義夫が「夫に教わったらしいそんなこと」を鵜呑みし芳江に向かっ

て「お母さん、早く帰れるといいね。朝鮮へ帰ったら、ぼく、お母さんにうんと孝行するからね」と言い、それを聞いた芳江が「ちょっとさびしいような気さえ」する場面である。夫の劉はもともと朝鮮で生まれた朝鮮人であるのに対して、義夫は日本で生まれ育った日本人同様の在日朝鮮人2世である。そんな義夫に対して芳江が抱く「ちょっとさびしいような気」という感情は、自分が「未知の国」朝鮮（南朝鮮）で味わったつらい思いや怒りを義夫も感じるのではないかという不安から来ているものであると解釈できる。どんな苦しみが待っているかもわからないまま、「未知の国」へ「帰国」することにすっかり楽しい気分になっている幼い息子を前にした母の感情ともいえるだろう。いいかえれば、芳江は北朝鮮に対して漠然とした不安と疑念をかかえていると分析できる。

芳江が「ちょっとさびしいような気さえ」するもう一つの理由は、これから「帰国」する北朝鮮は夫と息子の祖国、つまり、「彼らにとっての祖国」にすぎず、芳江自身の祖国ではないと彼女が認識しているがゆえに、夫と息子が無垢に喜んでいる姿をみて「虚しさ」に近い「さびしさ」を感じているともいえる。芳江のことは念頭になく、ただ喜んでいる二人の姿は、日本人妻が置かれた孤独で「さびしい」立場をより鮮明に提示しているといえるだろう。

しかしより重要なことは、芳江がかかえていた不安や疑念が「ちょっとさびしいような気さえした」というセンテンスを通じて表出されたことである。この「さびしさ」は、あまり知りもしない北朝鮮について、人から聞いた話を無批判に信じる夫と息子の無防備さへの落胆の表現でもある。むしろ、帰国事業の話をも夫と息子に聞かせたのは芳江ではあるが、芳江が聞いた帰国事業の話は、おそらく、朝鮮総連に代表される民族団体や

金のような著述家、または新聞、雑誌などに金のような人が寄稿したものを讀んだ芳江周辺の人々から聞いたものであろう。芳江に「ちょっとさびしいような気さえ」感じさせた息子の態度は、北朝鮮への「帰国」にやや批判的で、警戒すらしている芳江とは違い、朝鮮総連をはじめ作者の金のように帰国事業を推進し応援する側が生み出した帰国事業言説をすぐに信じてそれに影響され、帰国事業や北朝鮮での暮らしやさらには北朝鮮社会そのものにバラ色の希望を抱く人々を象徴しており、芳江を通じて間接的に批判されているのである。

第6節 おわりに

本章では、帰国事業における北朝鮮という国が、在日朝鮮人や日本人妻たちの帰るべき「祖国」または経済的「楽園」として表象されたことを「楽園幻想」ととらえ、それが金の二つの作品「日本に残す登録証」と「日本人妻」ではどのように表象されていたかを論じた。

まず、「日本に残す登録証」において、北朝鮮は、在日朝鮮人が「帰国」すべき、希望に満ちた理想の地として明示的に描かれてはいなかった。そして、在日朝鮮人が北朝鮮に「帰国」しなくても生きていける日本の状況をも描写していた。従って、この作品は確かに帰国事業を背景とし、北朝鮮に行こうとする呉青年の姿を描いてはいるのだが、単純に帰国事業プロパガンダとしてのみとらえることはできない、ある種の曖昧さを孕んでいるといえる。

次に、帰国事業における北朝鮮「幻想」に対して真正面から取り組んだ「日本人妻」における北朝鮮表象は、「民族差別のない祖国」と「失業者（というもの）のない新しい社会」という表現で要約される。その北朝鮮はまさに劉・芳江夫婦が帰るにふさわしい理想の地であったに違いない。しかし日本人妻の芳江はその北朝鮮をただ肯定するだけではなく、留保させたり、疑念をいだくことで絶対化しない。むしろ、一定の距離を保ち、夫と息子とその距離を失い「帰国」を喜ぶ場面では「さびしい気さえする」のである。そしてそのような表現は、北朝鮮「帰国」へのためらいであり、帰国事業言説ともいうべきプロパガンダに対する批判として機能しているといえる。「日本人妻」という作品が帰国事業を肯定する作品であるかどうかは別として、この作品の細部には帰国事業における北朝鮮に対する不安と疑念、「帰国」に対するためらいが書き込まれているのである。

「日本人妻」で芳江は前夫との間に生まれていた娘さだ子の養育費の問題で夫や息子と一緒に「帰国」できず、一人新潟に残される。それは、「帰国」に成功できなかった日本人妻の事例をあえて小説化した金の意図も作用したと考えられる。つまり、マスメディアや作品において基本的には帰国事業と北朝鮮を肯定する金が、作品の細部では必ずしも全面的な肯定をしていなかったということである。

【注】

- ¹のち講談社文庫より全 12 巻刊行、講談社学術文庫から 3 巻まで刊行。
- ²川村湊『生まれたらそこがふるさと——在日朝鮮人文学論』平凡社、1999 年、118 頁。
- ³菊池嘉晃、前掲書、v 頁。
- ⁴テッサ・モーリス＝スズキ、田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』朝日出版社、2007 年、25 頁。
- ⁵青木敦子「帰国事業における「日本人妻」をめぐる」高崎宗司・朴鐘鎮編『帰国運動とは何だったのか——封印された日朝関係史』平凡社、2005 年、122 頁。
- ⁶金賛汀『在日コリアン 100 年史』三五館、1997 年、198 頁。
- ⁷太田修「帰国問題——さまざまな意味と真相」石坂浩一編『北朝鮮を知るための 51 章』明石書店、2006 年、252 頁。
- ⁸菊池嘉晃、前掲書、154 頁－155 頁。
- ⁹同上、155 頁。
- ¹⁰金賛汀『朝鮮総連』新潮社、2004 年、69 頁。
- ¹¹同上、70 頁。
- ¹²同上、70 頁。
- ¹³「北朝鮮に帰る人たちに」『毎日新聞』1959 年 12 月 13 日、3 面。
- ¹⁴「帰国話はタブー——夫と子供にはさまれ」『朝日新聞』1959 年 8 月 14 日、10 面。
- ¹⁵石田収編『北朝鮮の日本人妻からの手紙』日新報道、1994 年、42 頁－69 頁。
- ¹⁶青木敦子、前掲書、126 頁。
- ¹⁷金達寿「新潟から帰った人々——意外に多い日本人妻」『週刊朝日・別冊』昭和 35 年 2 号、朝日新聞社、1960 年 3 月、102 頁。
- ¹⁸青木敦子、前掲書、134 頁。
- ¹⁹「帰国船を見送って」『読売新聞』1959 年 12 月 15 日、11 面。
- ²⁰金達寿「夫の国 朝鮮へ帰る “日本人妻”」『婦人公論』44 巻 5 号、中央公論新社、1959 年 5 月、228 頁－229 頁。

²¹「帰国する朝鮮人——“日本人”も朝鮮へ」『読売新聞』1959年2月19日、3面。

²²川村湊、前掲書、118頁。

²³同上、118頁。

²⁴金達寿「夫の国 朝鮮へ帰る“日本人妻”」、前掲書、229頁。

²⁵同上、229頁。

第2章 弱き詩人と北朝鮮

——松本清張『北の詩人』論

第1節 はじめに

日本において社会派推理小説というジャンルを開拓した松本清張（以下「松本」と略す）は、1953年に『或る「小倉日記」伝』で芥川賞を受賞した後、『点と線』（1958年）や『砂の器』（1961年）等の多数の作品を残したが、1945年7月3日から1945年10月15日まで陸軍衛生兵として朝鮮の京城と井邑^{ジョンウッブ}に駐屯していた経験をもつ松本が、少なからぬ数の作品において朝鮮をとりあげていることは注目に値する¹。とくに1960年代に入ってから、松本は北朝鮮を題材とした作品を連続的に発表した。戦後の日本社会を描いた『日本の黒い霧』（文藝春秋、1960年）—この作品には「謀略朝鮮戦争」という章が含まれている—と、本章における議論の対象となる『北の詩人』（中央公論社、1964年）である。

『北の詩人』のあらすじを要約すると以下の通りである。1945年、日本の植民地支配から解放されたソウルを背景に、共産主義芸術組織である「朝鮮文学建設本部」の指導者であった林和²は、植民地時代に日本の警察に検束され「転向」したという暗い過去を隠して暮らしていた。また、肺結核を抱えていたため死の恐怖に怯えてもいた。そ

ういう状況で林和は、労働運動家である安永達^{アンヨンドル}に誘われ、米軍政庁の広報部で働く朝鮮人の薛貞植^{ソルジョンシク}と知り合うようになる。薛貞植を通して、今後行われる米軍政庁の大規模な共産主義者弾圧の情報に接した林和は、共産主義者という自らの立場と身の安全の間で悩みはじめる。次第にアメリカの権力に近づいた林和は、過去の転向経歴を暴露するという米軍政庁の脅迫や、結核治療新薬の提供という誘惑に負け、アメリカのスパイとなる。その後、自分以外にも南朝鮮労働党の幹部ら—『解放新聞』の主筆であり南朝鮮労働党の実力者である李承燁^{イソンヨッブ}³（1905 年—1953 年）など—がアメリカのスパイであったことに気づく。林和は、やがて CIC(米軍政庁諜報機関)のアンダーウツドの指令を受け、朝鮮戦争の勃発する 3 年前の 1947 年の秋、北朝鮮に潜入する。ここで場面は一転し、朝鮮戦争の休戦協定が成立した直後の 1953 年、北朝鮮の軍事法廷に被告として立っていた林和の姿が描写される。その直後には裁判記録の原文が引用されているが、林和に下された判決は有罪であり、死刑であった。

『北の詩人』は、1953 年 7 月に北朝鮮で実際に起きた、南朝鮮労働党(以下「南労党」と略する)系の政治家ら 13 名の肅清事件が前景化された作品である。いわゆる「朴憲永⁴=李承燁グループスパイ事件」⁵と呼ばれるこのスパイ事件が解放直後の混乱期の南朝鮮でどのように胎動していたかを、肅清された一人である林和を主人公に据え、彼が死に至るまでの 9 年間を描くことで具体化したものである。

『北の詩人』をめぐるこれまでの先行研究は、川村湊や萩原遼の議論に代表されるように⁶、主人公林和の伝記に関する事実関係を問題にしたり、とくに『北の詩人』がベースにしている北朝鮮側が公表した「朴憲永=李承燁グループスパイ事件」の裁判記録の党派性や偏向を批判する傾向が強かった。もちろん、菊池や趙のように、この作品に

「非政治的人間の政治的脆弱さ」⁷や「一人の詩人であった「林和」が対立する両陣営のイデオロギーの犠牲になっていくドラマ」⁸を読み込む先行研究もあった。しかし、どの研究も『北の詩人』のテキストそれ自体に十分に注目してこなかったといえる。たとえば、『中央公論』連載の初出テキストに引用されていた林和の詩4編のうち3編が翌年刊行の単行本『北の詩人』では削除され、1編は簡略化されていたこと、死を目の前にした林和が法廷で詩人としての内面を語る独白が単行本では裁判記録の直前に追加されていたことなどについては、先行研究では議論されてこなかったのである。

『北の詩人』に見られる北朝鮮表象を論ずるために、本章では以下の内容を順次検討することにする。まず、『北の詩人』の執筆動機や主人公林和の登場の理由を理解するために「謀略朝鮮戦争」の内容を松本の北朝鮮に対する関心と結びつけて分析する。その後、『北の詩人』に関する本格的な検討作業の一つとして、主人公林和がテキストの中でどのように描かれているのかを分析する。最後に、もともと連載小説であった『北の詩人』が単行本化する過程で、詩人であり政治家でもあった林和を北朝鮮表象に組み込む松本の手法を提示する。

なお本章では、総合雑誌『中央公論』に連載した「北の詩人」（中央公論社、1962年1月－1963年3月）と単行本『北の詩人』（中央公論社、1964年）、そして『日本の黒い霧』『松本清張全集 第30巻』（文藝春秋、1972年）を底本とする。

第2節 「謀略朝鮮戦争」と謎としての北朝鮮

まず、『北の詩人』の背景をなす「朴憲永＝李承燁グループスパイ事件」に松本が初めて言及したのは、『日本の黒い霧』所収の「謀略朝鮮戦争」であったことに注目したい。「下山国鉄総裁謀殺論」「白鳥事件」「帝銀事件の謎」など12章の構成となる『日本の黒い霧』は、敗戦後、米軍の占領統治を受けていた頃の日本に起きた奇怪な殺人事件や疑獄事件をGHQ謀略と結びつけ、松本独特の推理小説形式で追及した作品である。その最後のエピソードである「謀略朝鮮戦争」の冒頭で、松本は「これまで書いてきた一連の事件の最終の「目的」は朝鮮戦争のような極点を目指し、そこに焦点を置いての伏線だったと云うこともできる」（385頁）と書くことで、アメリカの陰謀の「完結編」を朝鮮戦争にみいだしている。

興味を引くのは、朝鮮戦争をアメリカの謀略事件だと推理する松本の「朝鮮戦争の端緒についてよく云われる「南北のどちら側から先に攻撃を仕掛けたか」という問題は、今でも興味のある謎である」（386頁）という言葉である。つまり、松本にとってこの問題は解明されるべき謎なのである。そこで「謀略朝鮮戦争」では、松本はアメリカの謀略という観点に立ち、韓国とアメリカが公表している資料の真偽を問うていきながら、北朝鮮側の資料との比較検討を図ろうとするのだが、結局それは挫折に終わる。その理由は、北朝鮮側からの資料や情報の乏しさである。たとえば、戦争勃発の前兆に関する疑惑について、松本は以下のように書いている。

いろいろな資料から見て、南朝鮮側では、戦争勃発を予見したさまざまな準備処置が講じられていたことがうかがえる。しかし、北朝鮮側に、この「処置」があったかどうかを知ることは出来ない。これは、その資料が乏しいためか、それとも、そ

の「処置」が「皆無」だったか、どちらかである。しかし、全く皆無だったとは常識的に思われない。(389頁)

戦争の準備処置が講じられていたかを知ることは、戦争開始の責任がどちら側にあるかを考える上で重要である。しかし、韓国やアメリカから出された「いろいろな資料」をみることができても、北朝鮮側からの記録を知ることは出来ないのである。

松本は北朝鮮側の資料の乏しさについて、次のようにも述べている。

朝鮮戦争は、前にも触れたように、南朝鮮側には資料が豊富だが、北朝鮮側の資料は少ない。この戦争に関して北朝鮮側が発表したものは、米韓軍を敗北させた経過と、士気の旺盛だったことを述べているものばかりで、情勢分析の客観的資料といったものは殆ど無い。

もし、北朝鮮側からの資料がもっと潤沢に出されたら、朝鮮戦争自体に対する分析、評価はもっと精密になるだろう。

しかし、北朝鮮側の動きは、南朝鮮の動きのようにはさっぱり知られていない。戦争の後期には、ソ連の戦車戦の権威ジェーコフ元帥が中国軍と北朝鮮軍の指揮を取ったといわれているが、未だ伝説の域を出ないのである。(413頁-414頁)

松本は情勢分析のための客観的な資料が北朝鮮から出されていないので精密な分析、評価が出来ない現実を嘆いている。朝鮮戦争におけるアメリカの謀略を信じている松本自身、アメリカ、日本そして韓国から出された資料だけを使うのは、客観性を欠いた分析にと

どまると考えていたのである。しかしながら、客観性を備えた分析のために必要とされた北朝鮮側の資料は存在せず、結果として北朝鮮も朝鮮戦争も松本にとって謎のままとなってしまった。

上記の引用に続いて、松本は朝鮮戦争と北朝鮮におけるもう一つの重大な謎について疑問を投げかけている。それは『北の詩人』の背景となった「朴憲永＝李承燁グループスパイ事件」の中心人物である朴憲永（1900年－1955年）の死をめぐる疑問である。かつての南朝鮮労働党の党首であり、北朝鮮の外務大臣・副首相を務めた朴憲永は、1953年「米国スパイ・政府転覆」の容疑で李承燁や林和ら12人とともに逮捕された。朴憲永は、1953年当時は起訴されず、一人だけの裁判をへて1955年に死刑となったが、事件の首謀者と名指しされたため、最初から事件を象徴する人物となっていた。松本は「謀略朝鮮戦争」で朴憲永が国連に向けて発表した声明を紹介している。以下はその引用である。

北朝鮮外相朴憲永は、国連に向けてアメリカ非難の声明を發した。

「朝鮮民主主義人民共和国政府は、すでに一九五〇年六月中旬頃、北朝鮮にたいする武力攻撃がまもなく開始されるだろうことを、たしかな情報にもとづいて知ることができた。この結果、朝鮮民主主義人民共和国政府は李承晩軍の侵攻を撃退するための諸対策をあらかじめとることにした。“安易な勝利”を確信することによって、李承晩一派とそのアメリカの主人たちは誤算をおかしてしまった。李承晩軍の侵攻にたいする返答として、人民軍はただちに潰滅的な打撃をあたえた。朝鮮におけるじぶんの手先たちのあまりに早く、そして完全な敗退をみてとったアメリカ帝

国主義者たちは、既成事実の名をかりて国連をかつぎだし、朝鮮人民にたいする公然たる武力干渉にのりだしたのである。」（398 頁）

1950 年 7 月 5 日、韓国京畿道烏山^{ギョングドオサン}であった米軍と北朝鮮軍との初めての交戦で米軍が敗れた後に発表されたこの声明で、朴憲永はアメリカを「帝国主義者たち」と表現し強く非難している。しかし松本は、この朴憲永が実はアメリカのスパイであって、戦争後処刑されたという報道に接して、この事件を再び北朝鮮の資料の「欠乏」に結びつけ疑問を表している。下記の引用からは、『北の詩人』に先駆けて示されたこの疑問が『北の詩人』の執筆を促した様うかがえる。

疑問も残っている。朝鮮戦争中、北朝鮮側の外務大臣として華々しく国連に抗議文を発表し、アメリカと李承晩政権の侵略を非難した朴憲永は、「アメリカのスパイだった」という名目で戦争終結二年後には処断されたと報じられた。しかし、朴憲永が「アメリカ帝国主義の手先」としてどのように反逆行動をしたかは詳しく分からない。朴憲永の裁判記録があるということは聞いているが、まだ目に触れる機会がない。

この北朝鮮側資料の「欠乏」の理由は、想像されぬではない。どのような国でも弱点はあるし、批判さるべき欠点は持っている。北朝鮮側は資料の発表が「敵」の逆宣伝の材料になるのを恐れているのかもしれない。

こういう意味で、たびたび云うように、朝鮮戦争は、戦闘経過だけの新聞電報の構成ではとても分からないのである。（414 頁）

松本は朴憲永がアメリカのスパイであったことに対してその詳細が分からないと言った後、裁判記録の存在を聞いたことはあるが自身の眼で確かめてはいないと書いている。興味を引くのはこの資料の欠乏の理由を北朝鮮の「批判さるべき欠点」に結びつけている点である。北朝鮮の立場を理解するような筆致ではあるものの、同じくすでに指摘していた北朝鮮の「不明さ」を、朴憲永事件では隠したい「欠点」に結び付けているのは、松本がこの事件にある種の不信を抱いていた姿勢を間接的に表していると考えられる。ここには、情報隠蔽が北朝鮮の「意図的」戦略として行われる可能性もあるという認識が読み取れる。これを裏付けてくれるのが、引用の最後にある「そういう意味で、たびたび云うように、朝鮮戦争は、戦闘経過だけの新聞電報の構成ではとても分からないのである」という記述である。この記述は、朝鮮戦争の真相、いかえれば朝鮮戦争を起こしたアメリカの謀略を知るためには、単なる「戦闘の経過」の報道を超え、「人」をめぐるアメリカの陰謀を暴き出す必要があるという松本の判断を表している。北朝鮮において金日成につづく権力者であった朴憲永がアメリカのスパイであれば、朴憲永という「人」の死をめぐる真相を明らかにすることは、朝鮮戦争という謎を解明するきっかけにもなる。

それでは、おそらく松本が接したのであろう、1953年当時の北朝鮮スパイ事件に対する日本のメディア報道は、どのような内容であったのか、確認しておきたい。『北の詩人』との関連から事件の報道の特徴を三つに整理すると、①同年ソ連で起きた「ベリヤ粛清事件」との類似性を強調した点、②朴憲永の失脚に事件全体の焦点が当てられた点、③林和に対する言及が極めて少なかった点があげられる。たとえば『毎日新聞』の

1953年8月12日の報道⁹では、「朴副首相除名の内幕——北鮮のベリヤ事件“親米、政府転覆”が理由 南鮮との妥協論に警告」と題した記事で、「朴憲永氏は（中略）北朝鮮内閣で七人の副首相中筆頭の地位にあり、その北朝鮮における実力、影響力は一時金日成首相を凌いだとさえいわれていた」と伝えた後、「これは金日成の親ソ的“主流派”が反対派を陥れるために実際あった一寸したスパイ事件にからませて作り上げた虚構ではないかとする観測筋もある」と論評している。一方、林和については「教育相林和（死刑）」という簡単な紹介にとどまっている。『世界週報』は、「朝鮮の肅清事件——ベリヤ事件の極東版」と題した文章で「まだ四十二才の金日成首相や延安派の金科奉と違った深い尊敬の的である朴憲永の追放は一種の北朝鮮版ベリヤ事件」¹⁰と記し、両者の類似性をより明確に指摘している。そして、起訴された者に対し、朴憲永と李承燁を除いては「他は比較的小物といえるかもしれない」と評価した¹¹。

「朴憲永事件」と「ベリヤ事件」の類似性は、二人が共に共産主義国家の最高権力者であった点、それぞれ米国と英国という自由陣営のスパイ容疑で処断された点などが挙げられる。しかし、より重要なことは、二人の死が「政治的肅清」とみなされ、さらに「朝鮮中央通信社」や「プラウダ」紙に代表される朝・ソ国営メディアからの限られた情報提供により、真相をめぐる信憑性が問われていたことである。事実、「肅清の季節」ともいえるほど、1950年から1960年の間には、共産圏国家における肅清事件が頻発し、新聞や雑誌を連日飾っていた。日本のメディアは、外信の報道内容に疑問符をつけ、真相に関しては保留的立場を取っていた。そうした意味で、「朴憲永＝李承燁グループスパイ事件」も共産圏国家における一つの典型的な「疑獄事件」としてとらえられていたといえる。1953年にあった事件が1962年に『北の詩人』で描かれたことの裏には、依

然としてこのような日本での共産圏国家や粛清事件に対するスタンスが働いていたことがわかる。なお、事件の報道において林和の存在感が甚だ小さかったことも指摘しておきたい。

「謀略朝鮮戦争」で示した朝鮮戦争の究極の謎に答えるべく、松本は一年後に『北の詩人』の連載を開始する。ここで注目しておきたい資料がある。それは『北の詩人』の連載を前にした1961年、『中央公論』12月号に松本が寄せた、「長編小説 青い鴉——筆者のことば」という文章である。松本が自作の『北の詩人』について言及した唯一の資料であるこの文章で、彼は林和の登場を予告しつつ、『北の詩人』の執筆に挑む意気込みを述べている。以下はその引用である。

今度は、一九四八年ごろから五二、三年の間の北朝鮮を材料に書いてみたい。朝鮮戦争直後の北鮮に起った或る政治的事件だが、私としては新しい意欲に燃えると同時に、少なからず冒険を感じている。舞台を全く日本から離して外国に設定することも最初の仕事だし、北鮮の風土事情に暗いということも私の困難を増している。しかし、私なりの野心を感じさせる内容なので、来年の一番大切な仕事として努力したい。

事件の記録は私なりに調べたつもりだが、作品的な構成はあくまでも私の創作である。

この小説の題名に「青い鴉」とつけたのは、日本でも一部知られている詩人林和を登場させたいからである¹²。

この文章で松本は、朝鮮戦争直後の北朝鮮における「或る」政治的事件、つまり北朝鮮粛清事件を材料に小説を書くことを明らかにしている。ただし、単に北朝鮮の政治事件を書くのではなく、「野心を感じさせる」「来年の一番大事な仕事」といった表現が暗示するように、『北の詩人』（この時点では「青い鴉」）を自分にとっての重大な挑戦として受け止めていることが分かる。そこには「謀略朝鮮戦争」で解明しきれなかった謎—北朝鮮—に対して、異なるアプローチで迫ろうという意味もあるだろう。そして、この文章でもっとも重要なのは、あえて林和という詩人を主人公として選んだこと、そしてタイトルの「青い鴉」である。松本は、この極めて政治的な、北朝鮮に関連する事件を題材に小説を書く時、政治的ではない、いわば文学的なアプローチを通して北朝鮮問題に取り組もうとしたのである。それは、当初予定していたタイトル「青い鴉」からも読み取れる。この「青い鴉」という言葉は、連載第一回目の冒頭にも短く引用される林和の詩「暗黒の精神」から引用されたものだが、それは林和が植民地状況下で苦悩する自分の姿を象徴的に表した言葉である。このように松本が詩人としての林和と彼の詩を作品の大きなテーマとして用いたことは見逃せない。朝鮮戦争にしても朴事件にしても、そもそも北朝鮮側の資料が乏しいため北朝鮮のことは謎のままでしかなかった。そのため、松本は謎の解明へのアプローチを変えて、林和をとりあげたのである。それは林和が詩人であり、同時に政治に関わった「複雑さ」をもつ「人」だったからである。つまり「人」、とくに多面的な側面をもつ文学者をとりあげることで、単なる資料ではわからない北朝鮮という「謎」を解明しようとしたのだ。実際、連載においては、「暗黒の精神」の他にも3編の林和の詩が引用されることになる（ただし「青い鴉」というタイトルは「北の詩人」というわかりやすいものに変更されたが）。

『北の詩人』は、GHQ の謀略を追跡する『日本の黒い霧』から始まる「スパイ事件物語」の性格を一部もちながらも、舞台を朝鮮半島に移したことによって、新たな「謎」の探索がメインテーマとなったのである。次の節では、『中央公論』連載時に松本が引用した林和の詩を確認し、そのメッセージを読み解くこととする。

第3節 初出テキストに引用された4編の詩について

当初考えていたタイトル「青い鴉」が、「北の詩人」へと改題されたのは、林和の詩人としての側面を強調しようとした松本なりのもくろみだったと考えることも可能であろう。実際、1962年『中央公論』連載に初出の「北の詩人」には林和の詩4編が引用されていた。そして、これらの詩は作品のストーリー展開と密接な関係をもっているにもかかわらず、これまでの先行研究ではそのことについてあまり論じられてこなかった。なぜなら単行本になる過程で1編を残し、他の3編が削除されたからである。しかし、当初、4編の詩が載せられていた「北の詩人」のテキストと詩が削られた『北の詩人』のテキストとを比較分析することは、『北の詩人』を考察する上で重要な役割を占めているといえる。

テキストにおける詩の所在を概略すると、まず、連載第1回に、「(仮訳)林和 暗黒の精神」と題した、林和の詩「暗黒の精神」のごく一部が引用されていた（この引用は『北の詩人』単行本にそのまま収録される）。その他に連載時には3編の詩が掲載されていた。それぞれ、第4回に「失題」、第11回に「人民抗争歌」、13回目に「旗を降ろそう」の順番で載せられていたことが確認できる（これら3編はいずれも単行本では

削除された)。果たしてこれらの詩はテキストの中でどのような位置を占め、小説全体の展開とどのような関係にあったのだろうか。それを分析するために、詩と各章の内容によって、第1回の「暗黒の精神」と第4回の「失題」を、弱い個人としての林和の内面を代弁するものとし、第11回と第13回の「人民抗争歌」、「旗を降ろせ」を林和の闘争的側面を表現するものとしてとらえて分析を行いたい。

3.1 孤独な林和の内面を表現した詩

まず、1962年1月刊、第1回連載「北の詩人」に引用された「暗黒の精神」をみよ。

いま この／まっ青な鳥は／力なく はばたき／息も 絶えだえに／冷えてゆく胸
をいだき／暗い恐怖／絶望の吐息にふるえている／——どこにも道がない／暗黒の
谷間で (360頁)

この詩は、植民地的現実とそこから脱したいという林和の希望とを表現した作品として知られる、朝鮮語詩集『玄海灘』^{ヒョンヘタン}（東光堂書店、1938年）所収「暗黒の精神」の一部である。初出テキストにおいては「暗黒の精神」の一部だと明記されていないため、読む人によっては全文だと思われる可能性もあるが、テキストの中では「(仮訳)」となり訳者は不明である。つまり松本が訳したのか、他の人が訳したものを松本が使っただけなのかは、これをみる限りでは判断できない。その点に関して、前述の萩原は、松

本が詩全文を読まずに一部の翻訳だけを参考にして、林和の像や彼の文学性を歪曲したと主張し、『北の詩人』執筆に関与した第3者の存在を疑っている¹³。また、前後の文脈が把握できるように萩原自身の翻訳で「暗黒の精神」の全文を紹介している。

本章では「暗黒の精神」のより正確な把握のために、以下のとおり原文の日本語逐語訳を行った。なお、各段落には番号をつける。

暗黒の精神

1 (以下段落番号と日本語訳は引用者による) 大洋のように青い葉を／その若い守護卒 満山の草花を／岩盤の固き地に埋めた風は／いまや孤児の裸の枝の上に叫んでいる／青春に輝いていたあの夏の夕空の金色の星たちも／幽冥の空の彼方にちり／爪のように瘦せさらばえたたった一つの三日月／それすら今は「レテ」*の水の中で呻いているのか？

2 東西南北 四方どこを見ても／大きな両手をぱっと広げ大空に振り回してみても／声を張りあげ声高に叫んでも、

3 おお、おお、／暗黒の底なき洞穴／寒さに震える木の枝の号泣／雷鳴のような嵐、巨岩を揺るがす怒呼

4 おお、今はないのか？ 暗闇以外には！／おお、ついに嵐が宇宙の支配者であるか？

5 生命の喜びである 3 月の花たちよ／青年の精神である蔓延る草むら／真理の意志である一抱えもする喬木よ／そして巨人の森林の魂よ？

6 新芽の上に靡いていたそよ風／豊かな泉、輝く太陽／そして不滅の精神である山岳、蒼空は／空に漂う一片の猜疑の雲と／死の暗黒滅亡の風だけを残して／跡もなく居場所なく倒れたのか？

7 深い落葉松の密林と濃い霧につつまれた／あの険しい溪谷の下／いまこの痩せさらばえた青ざめた鳥は羽ばたきながら／息さえ止まったぬるい胸の上に両手を置き／闇の恐怖 絶望の嘆息に震えている／一どこにも道がひらかない暗黒の溪谷で

8 ばらばら！ぽかっと！どかん！どっと！／岩壁が崩れる音、千歳の巨樹が腰を折って倒れる音／死滅の空に野獣が戦慄する音／果てしない闇、沈黙した暗黒／おお！万有から秩序は退き行くのか？

9 この無辺の大空を流れる運命の川の両岸／生と死、前進と退却、敗北と勝利／和解することのできない両丘に君は両足をかけて／懐疑にすすり泣く心臓の故、全身が震えているのではないか

10 しかし、瀕死の鳥よ！古い心臓よ！震える手足よ！／見えないのか、聞こえないのか／それとも、今は何も知らないのか

11 炎は風の胸ぐらをつかんで／暗黒の空の胸を力の限りたたいているのではないか？／喬木たちは肩をこすりながら、炎を起こし／萎んだ草むらは炎にその身を投げて／木の枝は空高く五色の花火を放っているのではないか。／そして森林は！／大きな炎の翼で巨人の山岳をその胸にしかと抱きしめ／たくましい筋肉である土壌と、鉄の骨格である岩石を真っ赤に熱しながら／百尺の長剣である火柱を纏い、高遠な精神の雷鳴と共に暗黒の世界と格闘している／真に英雄である灼熱した全山を、その中で燃やししながら……

12 おお！鳥よ！君、蒼い鳥よ！／歌を忘れた笛よ！／あなたは「ハムレット」か？「ファウスト」か？「オネーギン」なのか？／それともガラス製の良心か？

13 おお、この狂気の無秩序の狂乱の中で／屍の運命を私たちの顔に投げつける暗黒の中で／君には見えるか？見えないか？／この炎がもたらす生命の香りを／この壮烈な格闘が伝える春の美しさを／万山の草花と茂った緑、そして金色の実果の甘いその味を

14 この暗黒、嵐、雷鳴の巨大な苦痛が／密集した古木の隊伍とその一個一個の英雄である青年、樹木の肉体の中に／太くて黒い年輪をもう一本刻み付けることを！

15 君は恐れているか？／生きることを……／君は痛むのか？／青年である私たちが生存し、成長する道標である「とし」が一つ二つ増えていくことを！

16 伶俐な鳥よ—まだ良心の火種が消えていない小さな心臓よ！／突き出したその可愛い胸を叩いていながら／こう叫べ！／「来たれ！闇よ！泣け！爆風よ！／怒号せよ！死と暗黒の‘マルセイユ’よ！」

17 そうではないか！／だれが大地から滲みでる生命の春の樹液を／だれが青年の胸の中に育っていく英雄の精神を死で妨げるか／暗黒か？爆風か？雷鳴か？

18 【原注】*レテ：「ダンテ」の『神曲』の中の句。「永久に希望を捨てろ」と書いた地獄の門に入るとすぐ川があるが、この川は「忘却の川」といい、すべてを忘却の中に埋めてしまうという意味である¹⁴。

こうしてみると、「北の詩人」に引用された箇所は、当初予定されていたタイトル「青い鴉」の引用元である7段落目の一部分であることが分かる。

この詩は、意味によって大きく三つに分けることができる。まず、第1段落から第8段落までを、「大洋のような青い葉を／その若い守護卒 満山の草花を／岩盤の固き地に埋めた」風による暗黒の到来とその「果てしない闇、沈黙した暗黒」の中で鳥が「絶望の嘆息に震えている」状況としてとらえることができる。次は第9段落であり、そこ

では運命の川を挟み、対立する「生と死、前進と退却、敗北と勝利」の間で足をかけ、選択の岐路に立つ鳥の姿が描かれている。最後に、第 10 段落から第 17 段落までを通しては、炎が「風の胸ぐらをつかんで／暗黒の空の胸を力の限り叩」き、「来たれ！聞よ！爆風よ！怒号せよ！死と暗黒の“マルセイユ”よ！」と、暗黒に抵抗し反撃する鳥の格闘を形象化している。ここで重要なことは、松本は初出テキストにおいても単行本テキストにおいても、「暗黒の精神」から第 10 段落以下後半部の闘争的な文言を完全に省き、前半部の敗北主義的な文言のごく一部（第 7 段落の部分）を用いたということである。

松本のこのような取捨選択を『北の詩人』のストーリー展開に沿ってもう一度検討する必要がある。連載第 1 回目で、林和は、引用部の鳥のイメージ、すなわち「冷えてゆく胸をいだき／暗い恐怖／絶望の吐息にふるえている」鳥であるかのように、読者の前に現れる。肺結核を抱えた林和は、アメリカの使いであった安永達と会った時、まるで子供のように「わたしの額に手を当てて下さい」（362 頁）と自分の病気を知ってもらいたがる。安はびっくりした顔をして、「熱があるようですね。赤いのはそのせいですか？」（同上）と聞くのだが、林和は「ここが悪いんです」（同上）と答え、オーバーの上から「胸を叩い」た（同上）。肺結核という、当時としては重い病に苦しんでいる林和の人物造形、そしてテキスト全体を貫く暗い雰囲気を作り出すために、「暗黒の精神」の一部が引用され、後半部分が削除されているのである。この点において、松本は詩人としての林和のイメージをイデオロギー的に改変したと論ずる川村や萩原の議論は正しいといえるだろう。

このことに関してつけ加えると、連載版には、「暗黒の精神」の第9段落の内容も利用されていると考えてよいだろう。ここで1963年2月刊、第14回連載「北の詩人」の、林和がアンダースンから北朝鮮に潜入することを命じられ、川を渡る場面を見てみると、まさに「運命の川」というモチーフがそのまま使われている。以下はその引用箇所である。

黒々と流れている川の前に出た。すると、男は林和だけを残して闇の中に消えた。何かを捜しに行ったらしい。

林和は、この礼成江の上流が三十八度線の境界に入っていることを知っていた。

男の注意で林和は河原にしゃがんでいた。黒い外套を上からすっぽりと被っている。遠い所で銃声が聞こえたが、足音はなかった。林和は、うずくまったままかすかに水音の鳴る黒い川面に眼を置いていた。(中略) 向うに超えれば、どう足掻いても逃れることの出来ない絶対的な運命の中に陥る。(404頁-405頁)

朝鮮半島の上空の下を流れる川の岸にしゃがんだ林和には、川を渡ることによって、まったく違う運命の選択を迫られることになる。それは、詩で示されている「生と死、前進と退却、敗北と勝利」といった、どう足掻いても逃れることのできない、「和解することのでき」ない運命なのである。暗黒の精神の前半部から始まって、最後の締めくくりに川の前に「うずくま」りつつも、結局川を渡る林和の姿を描いているのである。

この部分に関してはさらなる検討が可能なのだが、第18段落の林和自身がつけたとされる注のレテ川の意味作用との関連を考察してみなければならない。「北の詩人」に

は、レテ川の出典であるダンテの『神曲』にみられる、罪と罰、天国、煉獄、地獄といったいくつかのモチーフが実際に使われており、しかも、最後に川を船で渡るという林和の姿はギリシャ神話、または『神曲』のレテ川のイメージを借用しているからである。

その中でまず触れたいのは、林和が自分の運命を煉獄で過去の罪の償いをしているかのように認識している、教会の教理問答の部分である。この教理問答はアンダーウッド牧師が担任する教会から林和の家送到了きたパンフレットの内容であり、これを見た林和は自分の現在の位置を煉獄だと認識している。1964年中央公論社刊『北の詩人』から確認してみたい。

問 地獄とはどういうところですか。

答 地獄とは大罪を持ったまま死んだ人が神から離れて悪魔と共にその永遠の罰を受けるところです。地獄の罰とは第一に神を永遠に失うことであり、さらに或る種の感覚的な苦しみを受けます。

問 どのような霊魂が地獄に行きますか。

答 地獄に行くのは大罪の赦しを受けずに死んだ人の霊魂です。

問 煉獄とはどういうところですか。

答 煉獄とはこの世で果たし得なかった罪の償いを果たし了るまで義人の霊魂が苦しむところです。(中略)

林和は、偶然開いたところに眼をさらした。これは誰に向かって語りかけていることばであろうか。彼は読みつづけた。

問 天国とはどういうところですか。

答 天国とは義人が神から永遠の幸福と報いを受けるところです。(中略)

問 どのような霊魂が天国に行きますか。

答 天国に行くのは、成聖の恩恵を持ち、少しも罪の穢れがなく、果さなければならぬ償いをことごとく果たし了えた霊魂です。また、この世で得た各自の成聖の恩恵といさおしと度合によって永遠の光栄と幸福の度合も異なります。

林和の眼を射たのは、その余白にインキで、

《ぜひ教会へおいで下さい。九日の午後五時ごろが都合がいいと思います》の書込みであった。

はじめての「通信」である。天国と地獄の問答のところに丁寧に書き入れられている。

——天国に行くのは、果さなければならぬ償いをことごとく果し了えた霊魂です。

——煉獄とは、果し得なかった罪の償いを果たし了えるまで霊魂が苦しみを受けるところです。

林和がその「償い」を了えるまで、彼の心は天国の安らぎを得ることはないと示唆しているようだった。(134頁-135頁)

この引用において林和は、過去の植民地時代、共産主義から転向していた秘密の記録を取り消し、解放を迎えた祖国で詩人として自由に生きていくために米諜報機関のスパイ活動に協力し始めるが、そのとき CIC の代理人として林和に指令をだす人物がアンダーウッド牧師(実在の人物)である。この教理問答はアンダーウッド牧師が担当する教

会から林和の家に送られてきた、指令を書き込んだパンフレットの内容であり、これを見た林和は自分の現在の位置を煉獄だと認識している。

ここで注意しておきたいことがある。それは、プロテスタント教会では煉獄の存在を否定する立場を取り、天国か地獄かという死の結果に対する二分法を採用しており、それに対してカトリック教会では煉獄の存在を認め、生きた人の執り成しや罪の償いによって天国に入るといった教理を採用しているということである。引用ではプロテスタント教会からカトリック教会の教理問答が送られてくるが、伝記的事実(プロテスタントであるアンダーウッド牧師と教会)と「暗黒の精神」のダンテの字句から受けたインスピレーションがテキストの中で衝突している可能性がある。その衝突は、林和をイデオロギーに翻弄される、主体性を無くした存在として位置づける役割を果たしている。この主体性をなくした存在としての林和の姿は、1963年1月掲載の第14回「北の詩人」からも読み取ることができる。

山の斜面を下りると、あたりがうす明るくなっていた。東の空に夜明けが来ていた。山の稜線がくっきりと容を顕し、その上にうす蒼いが、力の籠った光が滲んで来ていた。斜面の下に黒い川の流れと、小さな舟が岸にあった。舟だけが、いやに白く見えた。

その川と舟のかたちを眼に入れたとき、林和は、ああ、これで自分が掴まるべき物は何もかも手から失われた、と思った。彼の前に、彼の意志を絶対に封じ込んで押し流してゆく巨大なものが構えていた。(408頁)

以上の議論をまとめると、連載第 1 回目に直接引用された第 7 段落（部分）と、連載第 14 回目で間接的に引用された第 9 段落は、『北の詩人』を覆っている、暗く運命論的なトーンを強調していると言ってよい。ただし、連載時に引用された他の 3 編の詩を考慮すれば、松本がこの作品に込めたメッセージの複雑さが浮かび上がってくるだろう。

では次に、1962 年 4 月掲載の第 4 回「北の詩人」に付された「失題」（全文）について触れる。この詩は「暗黒の精神」にも似たメッセージを作品に与えている。

友よ けふこのごろ 或一つの運命に就て僕は考へさせられてゐる。

醒めては／異変を夢み／いつもわたしは／恙なかれと それのみを願ひつゞけた

幸福を祈るころが／幾度かわたしを／死に克たしめたその恩恵は／忘れよう筈がないけれど――

幸福も 歎びも／無事平穏なその日／＼に／見出されぬ道理と知つては／わたしの生甲斐なるものも／所詮は花を落した薔薇の蔓のやうなもの

緑の葉を愉しとするには／あまりにもわたしは若く／まして枯枝を愛ほしむには／あまりにも心稚いわたし――

いまはもう／生き永らへるために恙なかれと願ふことが／われからにこゝろもとな
く　うらはかなく／身もこゝろも虐みつくす／運命の褥が／なぜか恋人のやうに慕
はしくなるばかり（384頁－385頁）

この詩は、1939年2月に雑誌『文章』（文章社）第1号において「失題」という題目で掲載されたものだが、のちに単行本『賛歌』^{チャンガ}（白楊堂、1947年）において「자고 새^{ザゴ セ}면^{ミョン}」に改題が行われた。この詩を論じた韓国の朝鮮現代詩研究者 전 범 준^{ジョンボムジュン}は、「失題」を「1930年代後半の客観的状況変化が、林和を運命の問題に出会わせた」、「（日本語訳は引用者による）客観的情勢の悪化の中で異変を夢見ると同時に、無事を願う小市民的発想が表れている。ここで転向の端緒を読み取ったり、悲劇的な状況における「生に対する志向」を見出すこともできるのだが、少なくともこの時期に林和が深刻な内面の葛藤に直面していた事実は十分に伝わってくる」¹⁵と評価した。

以下では、詩の意味をより詳しく検討してみたい。この詩における話者（「わたし」）を、林和自身を示すものとみることができれば、「失題」は当時の林和の心境を鮮やかに描き出していると考えられる。ただ、「幸福を祈るところが／幾度かわたしを／死に克たしめたその恩恵は／忘れよう筈がないけれど——」の中で「幸福」が意味するものに注意したい。たしかにこの「幸福」を祈る心は林和を死から救ったにちがいない。ここで得られたのは肉体の生命であり、「幸福」は、詩人として思想の自由を持ち、詩を書くことの幸福を意味するだろう。しかし、「幸福も歎びも／無事平穏なその日／＼に／見出されぬ道理と知っては／わたしの生甲斐なるものも／所詮は花を落した薔薇の蔓のやうなもの」が暗示するものは、肉体の生命がつづく限り、はじめに願った「幸

福」は見出されないという逆説である。無事平穏な日々とは、肉体の死を免れた日々、すなわち、日本の植民地支配下で思想的に転向し、奴隷として生きていくことを受け容れた時間を意味するものである。そのため、肉体は生きているのだが、「生甲斐なるもの」である「精神」は花を落とした薔薇の蔓のように色褪せていくのである。そこで林和は「いまはもう／生き永らへるために恙なかれと願ふことが／われからにこころもなく　うらはかなく／身もこころも虐みつくす／運命の褥が／なぜか恋人のやうに慕わしくなるばかり」として、肉体を放棄し、精神を取り戻そうと試みる。ところが「身もこころも虐みつくす／運命の褥が」慕わしい「わたし」は、「あまりにもわたしは若く」「あまりにも心稚いわたし」であるがゆえに、その状況から脱することはできなかった。この詩を書いた当時の林和が 31 歳であったことを考えれば、彼が経験した内面の葛藤は『北の詩人』の林和像を理解する手がかりになるであろう。

以上、連載テキストと単行本テキスト双方に掲載された「暗黒の精神」（部分）と、単行本テキストでは削除されてしまった「失題」について触れた。どちらも厳しい政治状況を意識し、それを乗り越えようとしつつも、それがかなわないという現実打ちのめされる詩人の姿を強調していると言ってよい。しかし、連載テキストに引用された詩はこうした詩ばかりではないのである。次節では闘争を経験した詩人としての林和の姿を表現している詩について論じる。

3. 2 闘争的な詩と弱い林和の人間像

これまで確認した 2 編の詩からは、暗黒の時代に苦しみ葛藤する林和の内面を読み取ることができた。ところが、連載テキストに掲載された 3 番目と 4 番目の詩では、前半の詩とは大きく異なる闘士としての林和の側面が現れる。次に引用する詩は、1962 年 11 月掲載の第 11 回「北の詩人」に載せられていた 3 番目の詩「人民抗争歌」である。

1 敵とともに たたかい死せる／われらの死をば かなしむなかれ／旗もてお
われよ 赤き旗／その下で死をば誓いし その旗を

2 白色テロルに たおれし友の／歌声いまも 胸にひびく／友よさらば うらみ
のみちを／仇はらさん 人民遊撃隊 (298 頁)

この詩は、林和作詞・^{キムスンナム}金順男作曲の南朝鮮の解放歌謡として 1947 年前半ごろ創作されたものだが、金順男が越北直前の 1947 年後半に曲をつけ、南北朝鮮と在日朝鮮人の間で広く歌われた有名な歌である。日本では、1948 年 7 月に在日本朝鮮民主青年同盟（民青）東京本部文化部が発刊した『人民解放歌謡集』¹⁶に収録され紹介された。ただし、当時発刊されたものには日本語の訳がなく、朝鮮語の詩と楽譜が載せられていた。

『人民解放歌謡集』に収録された「南朝鮮の解放歌謡」の中には、「人民抗争歌」のほか、「民青歌」、「追悼歌」、「解放戦士の歌」など、林和作詞の曲が多数載せられていたが、その中でも「人民抗争歌」は、一時期北朝鮮の国歌として歌われていたほどポピュラーな曲として普及した。この詩は、1946 年 10 月に、南朝鮮全土で起こった労働運動である「10 月人民抗争」を歌ったものである。原詩は、全 3 節となっているが、

雑誌連載版「北の詩人」に引用された詩は2節からなっており、それは原詩の2節とも違って、第2節と第3節とを巧妙に混ぜ合わせた内容になっていることが分かる。本章では、『人民解放歌謡集』の復刻版に載っている「人民抗争歌」の日本語訳を引用したい。

人民抗争歌

敵と闘い 斃れた／われらの死を 悲しむな／旗を 掛けてくれ 赤い旗を／その
下で 戦死を 誓った旗を

血潮を流して 語るトンム¹⁷の／言葉が 胸に甦る／トンムよ さようなら 怨恨
の道を／復讐に血が 沸き上がる

白色テロに 斃れたトンム／敵を探して 震える銃剣／祖国の自由を 売る敵を殲
滅しよう／進もう 人民遊撃隊¹⁸

この「10月人民抗争」の創作の経緯については、1961年11月刊、連載第11回「北の詩人」にも詳しく描写されている。

「林和さん、ぼくらはあなたにお願いします。本当なら、現地に飛んで行って指導してもらいたいのですが、病気では仕方がないから、せめて人民を激励する詩を書

いて下さい。今こそ文学者が革命に参加する使命を与えられた時機だと思うんです。

あなたの詩で、どんなに人民の士気が鼓舞されるか分かりません」

「書こう」と林和は云った。(312頁)

この引用の最後でわかるが、林和が青年たちの提案を受け「書こう」と言った詩が、「人民抗争歌」である。つまりこの「人民抗争歌」は、そもそも本文中に位置すべきものだったが、冒頭に引用されたことが分かる。この場合、この詩をテキストに組み入れた状態でテキストを解釈してよいだろう。林和の周囲の青年たちも、林和が病に苦しむ詩人であり、革命の闘士ではないことを承知している。しかし、林和の詩には価値を認めている。つまり、彼の詩は厭世主義的で運命論的なテーマのものだけではなく、「人民の士気を鼓舞」する力があることを認めているのである。林和も、過酷な政治的状况における詩の、そして詩人の意義を悟っているといえるだろう。青年たちの要望に答えて「人民抗争歌」を書く林和は、日本の植民地時代の「暗黒の精神」や「失題」の林和と同一人物であるが、読者に与える印象は大きく異なる。

最後に、以下に引用するのが1963年掲載の第13回「北の詩人」に収録された「旗を降ろそう」である。

殺人の自由と／略奪の神聖が／昼と夜となく放送される／南部朝鮮／汚された空に
／何の旗が／ひらめいているのだ／同胞よ！／一斉に／旗を降ろそう(400頁)

この詩は、『現代日報』1946年5月20日に掲載された「旗入발을내리자」である。この詩はのちに林和の詩集『賛歌』に収録された。日本では、許南麒編訳『朝鮮はいま戦いのさ中にある——詩集』¹⁹という著作において、「旗をおろせ」という題目で紹介された。以下はその引用である。

博奕打ちと強盗とを／とりおさえた手で／偉大な革命家の／袖をからめようとする
／汚された空の下に／何の旗が／ひらめいているのだ／人々よ／いっせいに／旗を
おろせ

貧しい人民の／ふところをねらう／外國商館の／老獺な下僕達が／木綿と佃煮の
／密賣を相談する／魔王の宮殿の／商標のために／われわれの頭上に／旗をあげる
／用はないのだ／人々よ／いっせいに／旗をおろせ

殺人の自由と／掠奪の神聖が／ひるよるとなく放送される／南部朝鮮の／その汚さ
れた空の下に／何の旗が／ひらめいているのだ／人々よ／いっせいに／旗を降ろせ

20

松本が情報源として参考にした可能性もあるこの許南麒編訳『朝鮮はいま戦いのさ中にある——詩集』で許は、巻頭の「編者の言葉」において以下のように語っている。

ここに集めた詩は、決して、わが祖国の詩人の詩の全部でもなければ、また、これがわが祖国の詩を代表する、そういう珠玉の如き作品だけを選んだ、そういう立派なものでもありません。しかし、ここに集めた詩は、どの一編を取りあげて見ても、わが祖国の熾烈な人民抗争と、一九五〇年六月から始められた祖国統一への解放戦争をうたって、朝鮮人民の、本当の心、本当の気持ちがどのようなものであるかを、表している詩ばかりだと思います。いや、余りにも明確に表していて、血と硝煙のにおいが、そのまま、鼻をつく、そういう詩だともいえましょう。編者は、一九四六年から、今日までの、祖国の人民闘争がのこした多くの詩の中から、二十七編を選びました。この本を読まれるあなたの胸に、この、二十七編の詩が、わが祖国の、骨をけずる闘いのけわしさの、幾分の一でも伝えることが出来れば、編者の意図は、達したとも言えましょう²¹。

「祖国統一への解放戦争」などの言葉づかいからも窺えるように北朝鮮を擁護する立場にある編者は、別途の解説を付すことなく詩だけを紹介している。その 27 編のうち、林和の詩は、引用した「旗をおろせ」の他に 2 編（「桂冠詩人」(26 頁)、「僕達の戦区」(44 頁)）が載せられている。興味を引くのは、『北の詩人』において、米軍政庁の広報部に勤める朝鮮人として登場し、のちに林和と同様に北朝鮮でスパイ容疑によって殺される薛貞植の詩「童子受難」(100 頁)も載せられていることである。

重要なのは、林和という詩人が、「暗黒の精神」や「失題」の詩の作者でもある一方で、「人民抗争歌」や「旗を降ろそう」という詩の作者でもあるということだ。そして、少なくとも『中央公論』連載時には、松本はこれら 4 つの詩をテキストの冒頭部分にお

くことによって、林和という詩人の特徴をうまく読者にアピールしていると言ってよいだろう。この点に注目すれば、単行本テキストのみを対象とした川村と萩原の議論は、連載テキストにおいてはその有効性を相当失うということなるだろう。逆にいえば、単行本テキストにおいては、川村と萩原の議論は妥当であるということでもある。このことを確認するために、次節では、連載テキストと単行本テキストにおけるもう一つの大きな差異、最終回（最終章）冒頭について議論したい。

第4節 単行本テキストに追加された裁判記録引用部における林和の内面描写

連載テキスト最終回（第15回）と単行本テキスト終章の冒頭を比較すると、大きな変化を確認することができる。以下の引用を参照していただきたい。

〈1963年、連載「北の詩人」——最終回〉

一九五三年八月三日～六日の四日間にわたって、朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所特別軍事法廷で行われた朴憲永＝李承燁グループに対する裁判記録（一部）（346頁）

〈1964年、単行本『北の詩人』——終章〉

一九五三年、朝鮮戦争の休戦協定が成立した直後、すなわち八月三日、林和は朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所の特別軍事法廷に立っていた。牢屋生活がつづいて病状が悪化し、顔は熱で酔ったように赤く、絶えず咳き入った。萎えた脚は身体の

重みを支えかねた。弁護人が、裁判長に被告は病気のため長時間の起立に耐えられないようだから椅子にかけさせてもらいたいと頼んだ。裁判長は着席を許可した。林和の脳からはいっさいの面倒な思考が脱けていた。熱のせいかな、一種の恍惚状態になっていた。裁判長の尋問も検事の論告も、遠いところから声が滑って聞こえているようだった。彼の暗い陶酔のなかには、運命というテーマが茫乎としてひろがっていた。彼は相変わらず詩人であった。詩を^{ママ}一彼はその恍惚の中でつくっていた。

一九五三年八月三日～六日の四日間にわたって、朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所特別軍事法廷で行われた朴憲永＝李承燁グループに対する裁判記録(一部)
(173頁)

以上の引用をみる限り、連載テキストでは全く記されていない北朝鮮での林和の様子が、単行本テキストでは書き加えられている。これは、裁判記録の引用がテキスト、つまり「フィクション」の一部になっているということである。具体的にいえば、林和の病状や身体の描写が終わったあと、最後の叙述では、「彼は相変わらず詩人であった。詩を^{ママ}一彼はその恍惚の中でつくっていた」と記述されている。ここで松本は、被告・スパイとしての林和ではなく、彼の詩人という立場を強調している。語り手の作者と林和の声^{ママ}が密着した形で述べられるこの場面では、林和が過去・現在・未来において「相変わらず」詩人であることを確認している。とくに、恍惚の中でつくっていた「詩^{ママ}一」に「^{ママ}一」を入れて強調してあることは、これから引用される裁判記録が冷厳な事実ではなく、物語に編入された小説の一部であると見せかける働きをする。同時に裁判記録の内容が

「捏造」であることを暗示している。このことに関する根拠として、単行本化に際して書き加えられた林和の心理描写を分析してみたい。

まず、林和は「脳からはいっさいの面倒な思考が脱けていた。熱のせいかな、一種の恍惚状態になっていた」といっている。いっさいの面倒な思考が脱けていたのは自分の容疑に対する反駁や行動の正当性を主張するための理性的働きが停止していたことを意味する。これは容疑を事実として素直に認める諦念というより、身体的拘束(脳)から離れ、まるで自分が自分を見下ろしているような感覚で状況を受け入れるための前段階だと解釈できる。引き続き林和は一種の「恍惚状態」を体験するわけだが、裁判長の尋問も検事の論告も、「遠いところから声が滑って」聞こえているという。つまり、これから下される法廷での厳重な判決や求刑の声は、仄めかされた幻想の領域に回収されていくことを意味する。自身にかけられた容疑はとりとめのない想像に過ぎないのだが、運命という構造に抵抗しきれないゆえ、納得する林和の心理が表出されているといえる。状況はどうか、詩を通して自分の内面の中で格闘していた詩人林和の没落の姿が描かれている。言葉を奪われた詩人は、実世界では、詩人ではなく、囚人として立っているのである。

第5節 おわりに

本章では、松本の『北の詩人』の執筆動機を改めて考察し、連載小説と単行本におけるテキストの違い、とくに林和の詩の引用をめぐる変化に注目した。松本は『日本の黒い霧』の中の「謀略朝鮮戦争」で、朝鮮戦争を画策したアメリカの陰謀を解明するため

様々な資料を調査したが、肝心の北朝鮮からの資料不足のために戦争の全貌は明らかにされず、北朝鮮は謎として残された。そこで、松本は、戦争の裏に隠されていた「人」に注目することで謀略の真相へ近づこうとした。その結果、朝鮮の植民地解放期から朝鮮戦争が終わる 1953 年までに活躍した北朝鮮の政治家朴憲永に注目する。

ただし松本は、この政治家についての情報を把握できない。それゆえ彼は、政治家であった朴ではなく文学者である林和を前面にとりあげ、彼の詩を引用しながら、激動する時代の悲劇的な運命を背負った彼の姿を、複雑で多面的な「人」として描き上げたのである。しかし連載テキストがその後単行本になる際に、引用されていた詩のほとんどは削除されてしまった。そして、連載版にはなかった林和の裁判記録をめぐる松本の書き加えが、単行本テキストの最後には付されていた。この連載テキストと単行本との違いは、林和の裁判記録を物語の一部に変え、政治家でもない、詩人であり続ける林和を強調していた。そして破滅するのは、詩人である林和自身の姿で終わっている。結局、松本は、林和の多面的な姿を弱い詩人として表現し、彼を時代の流れに無力に流され破滅に向かう詩人に仕立てあげることとなった。

これは、北朝鮮の内実をとらえることの困難さの表れの一環をとらえることができる。まず、『北の詩人』において、詩は、資料としての価値を発揮するのではなく、詩人の内面を表現している。また、松本は『北の詩人』の単行本テキストにおいて、北朝鮮での裁判に臨む林和の様子をフィクションとして描写することによって、北朝鮮の内実に接近することの困難さを示している。なぜなら、単行本テキストでの松本の書き加えを次のように解釈できるからである。つまり、松本は、資料を世界に向けて開示しない北朝鮮の閉鎖性を林和の非理性的な様子として表象しようとしていたのではないだろうか。

『北の詩人』において松本は、林和の非理性的な無能力を通じて、資料を発信しない北朝鮮の閉鎖性を示していたのだと思われる。

【注】

¹伊藤博文の朝鮮での活動を描いた「統監」(1966年)、朝鮮人無政府主義者を扱った「朴烈大逆事件」(1964年、『昭和史発掘』所収)、朝鮮での軍隊体験を推理小説風に作品化したものに「百済の草」「走路」(『絢爛たる流離』に収載、1963年)、「赤いくじ」(1955年)、「遠い接近」(1971年-1972年)、「網」(1975年-1976年)、「任務」(1955年)、「繁昌するメス」(1962年)などがある。(南富鎮・鄭恵英「松本清張の朝鮮と韓国における受容」『松本清張研究』12号、北九州松本清張記念館、2011年、62頁)。

²林和は、1928年にKAPF(朝鮮プロレタリア芸術同盟)に加担し、1935年に解散するまでKAPF書記長を務めた。解放後は、南労党の一員として活動。1947年11月に越北し朝・ソ文化協会副委員長となり、朝鮮戦争時はソウルや慶尚南道で従軍した。朝鮮語で80編の詩と200本以上の評論を残した。

³1946年から朴憲永の代理人として韓国における南労党活動を指導。『解放新聞』主筆。1948年に越北した後、北朝鮮司法相・人民検閲委員長を勤めた。1953年に死刑。

⁴元朝鮮共産党の指導者。1946年9月に越北し、同年11月に結成した南朝鮮労働党を北朝鮮にて指導。北朝鮮副首相・外相をつとめたが1953年金日成による南労党系粛清で1955年12月に死刑に処された。

⁵1953年から1955年まで、北朝鮮政府内の南労党系(朴憲永・林和を含む)13名の政治家らが、米国スパイ行為や政府転覆の容疑で死刑・懲役をうけ粛清された事件。金日成派との派閥闘争における政治的敗退として知られている。

⁶川村湊は松本による『北の詩人』の執筆経緯について以下のように述べている。「松本清張は自らの反米意識、GHQによる謀略の歴史観というイデオロギーのために、林和という一人の文学者の真の姿を犠牲にしたともいえる。『北の詩人』によって林和は、二度目の死刑を執行された。一度目は、北朝鮮の裁判所によってスパイ、反革命として殺され、二度目はそのスパイという汚名を雪ぐどころか、それを補強した「フィクション」の中で、である。(松本清張が政治的には一貫して日本共産党の支持者であったことは明らかである。しかし、朝鮮労働党との直接的な関係があったとは思えないので、北朝鮮サイドからの林和に対する情報は、だから政治的ではなく、

文学的にかれに“利用”されたものと考えられる。)。 (川村湊「林和別伝」『満州崩壊——「大東亜文学」と作家たち』、文藝春秋、1997年、180頁-181頁)。萩原遼は松本について「資本主義の悪には鋭く切り込むが社会主義の悪には大甘というのがいわゆる“良心的知識人”の通弊です。松本清張もそうした一人として歴史のきびしい審判をまぬがれません」と批判している。(萩原遼「北朝鮮にはめられた松本清張——『北の詩人』の奇怪な成り立ち」『正論』411号、産経新聞社、2006年6月、148頁-157頁)。

⁷菊池昌典は『北の詩人』がもつ小説としての意義について以下のように述べている。「『北の詩人』もまた、舞台は韓国であるとはいえ、姿をみせぬ権力の不気味さをえがいている。恐らく読者は、『北の詩人』が雑誌「中央公論」に書かれた昭和三十七年から十年後に、金大中事件がおきたことに、偶然という言葉では片付けられないリアリティを感じることであろう。韓国CIAの姿は、金大中事件で一瞬かいまみせはしたが、たちまち日韓両国政府の手打式で、姿を没し去ったかに見える。『北の詩人』の主人公、林和もまた、北と南のパワー・ポリティクスの中で、無残にも彼の良心も八つ裂きにされていくのを実感せざるをえない。一体、スパイとは何か。林和の求めた「解放」と「独立」の道に、いつのまにか横から巨大な力が加わり、ベクトルがまげられた結果にすぎないのではないか。疑心暗鬼の世界にあっては、沈黙と無行為だけが安全を保証するのだが、それに耐えきれない人々は、つねに、政治舞台の暗転によって、愛国者とスパイの危険な境界領域に身をよこたえざるをえない。林和のような例は、けっして歴史上、めずらしい事例ではない。かつての革命家が、「人民の敵」として抹殺されたまま、時空が停止しているのが一九七〇年代ともいえるのだ。『北の詩人』は、いわば現代の矛盾にみちた力と力の政治の醜悪な側面を切断して、読者に、非政治的人間の政治的脆弱さを示しているといえる。」(菊池昌典「解説」松本清張『松本清張全集 第17巻』文藝春秋、1994年、493頁)。

⁸趙正民は『北の詩人』のテーマについて以下のように述べている。「林和の臨終を『詩人』として語る松本清張に、「林和がアメリカのスパイであったかどうか」の問いは無用なものであろう。要するに、彼は、朝鮮を巡ってアメリカとソ連が拮抗する中、一人の詩人であった『林和』が対立する両陣営のイデオロギーの犠牲になっていくドラマを書いたのである。」(趙正民「『北の詩人』論」北九州松本清張記念館編『第二回松本清張研究奨励事業研究報告書』北九州松本清張記念館、2001年、46頁)。

- ⁹ 「朴副首相除名の内幕——北鮮のベリヤ事件“親米、政府転覆”が理由 南鮮との妥協論に警告」『毎日新聞』1953年8月12日、2面。
- ¹⁰ 「朝鮮の肅清事件——ベリヤ事件の極東版」『世界週報』34巻26号、時事通信社、1953年、58頁。
- ¹¹ 『朝日新聞』（朝刊）1953年8月8日付け記事「十二要人を肅清」には朴憲永の写真が掲載された。また『朝日新聞』（朝刊）1955年12月19日付け記事「朴憲永元外相に死刑を判決」では、「朝鮮人民民主主義共和国 最高裁判所特別法廷は去る十五日朴憲永(元外相)の公判を行い長期にわたって米帝国主義のスパイとして共和国の転覆をはかったかどで死刑の判決を下した」と報道した。
- ¹² 松本清張「長編小説 青い鴉——筆者のことば」『中央公論』中央公論社、1961年12月号、205頁。
- ¹³ 「松本清張がもし詩の全文を読んでいたら、林和のイメージは、暗黒の谷間で恐怖と絶望にふるえるそれではなくなります。そしてもし松本清張がこの詩が一九三四年十月に発表されたものであることを知っていたら『北の詩人』は生まれていなかったかもしれません。」（萩原遼、前掲書、152頁）。
- ¹⁴ 임화『임화전집 1 시』박이정、2000年、87頁-91頁。（林和『林和全集 1 詩』パクイジョン、2000年）。
- ¹⁵ 「비극적인 상황에서의 “삶에 대한 지향”을 읽을 수도 있지만 최소한 이 시기에 임화가 심각한 내면적 갈등을 겪고 있었다는 사실은 충분히 전달된다」（전병준「1930년대 후반 임화의 시연구」『韓國詩學研究』13号、韓國詩學會、2005年8月、328頁）。（ジョンビョンジュン「1930年代後半の林和の詩研究」13号、韓國詩學會、2005年8月）
- ¹⁶ 山根俊郎編『カラスよ屍を見て啼くな——朝鮮の人民解放歌謡』長征社、1990年、75頁。
- ¹⁷ 漢字で表記すると「同務」であり、これは「仲間」のことを指す。
- ¹⁸ 山根俊郎編、前掲書、75頁。
- ¹⁹ 許南麒編訳『朝鮮はいま戦いのさ中にある——詩集』三一書房、1952年
- ²⁰ 同上、61頁-62頁。
- ²¹ 同上、1頁。

第3章 人々の表象（不）可能性

——小田実『私と朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』論

第1節 はじめに

小田実（以下「小田」と略す）は、大阪市で生まれ、小説家・評論家として活動した日本の作家である。彼は、東京大学文学部言語学科を卒業したあと、1959年に渡米、フルブライト留学生としてハーバード大学に学び、ヨーロッパ、アジアの各国を無銭旅行しながら1961年に帰国した。その体験記『何でも見てやろう』（河出書房新社、1961年）は、ベストセラーとなった。その後は予備校講師を務めながら、1965年に「ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）」の結成に関わり、反戦運動の中心的存在としても活躍したことはよく知られている。1995年に発生した阪神大震災後には、被災者支援法制定を訴える運動にも取り組んだ。小田の作品としては、『HIROSHIMA』（1981年）、『海冥』（1981年）などの小説、『「難死」の思想』（1969年）『鎖国の文学』（1975年）『私と天皇』（1975年）などの評論のほか、エッセイ『オモニ太平記』（1990年）などがある¹。

このように、小田は作家としてだけではなく、さまざまな社会運動でも活躍した知識人だったといえるだろう。本章では、小田の1970年代の活動に注目するが、その中で

も北朝鮮訪問と、その記録である訪朝記に注目したい。小田は、1976年、日朝間の文化交流における北朝鮮側の窓口であった非政府機関である「朝鮮対外文化連絡協会」²の招きを受け、北朝鮮入りした。10月22日に中国の北京経由で北朝鮮へ入国し、3週間北朝鮮に滞在したが、滞在中は、金日成主席と会見したほか、農場や人民軍などを訪れ、労働者の家庭に泊めてもらったりした。11月20日の午後帰国した小田は、東京千代田区富士見町の朝鮮総連本部で記者会見を行った³。

小田の訪朝は日本国内の各種のメディアで盛んにとりあげられた。たとえば、毎日新聞は、11月27日付の外電と総合面に「金日成主席は語る—小田実氏と一問一答」および「金日成主席と会って」と題して、小田と金日成主席との会見内容の全文と小田の個人的感想を掲載した。また、小田自身も精力的に北朝鮮旅行での体験を発表した。1977年2月から3月まで週刊誌『朝日ジャーナル』に5回にわたって連載した「北朝鮮—その現実と思想」は、『私と朝鮮』（筑摩書房、1977年）として出版された。そして、月刊誌『潮』には、1977年1月から1978年2月まで「「北朝鮮」の人びと」が連載され、連載終了と同時に同タイトルの単行本『「北朝鮮」の人びと』（潮出版社、1978年）が出版された。

ここで『私と朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』の内容を簡単に紹介しておきたい。

『私と朝鮮』は、北朝鮮だけではなく朝鮮問題全般に対する小田の認識と立場を整理したものだといえる。前書きの「一本の竿をたてよう」では、朝鮮問題を北朝鮮か韓国かという二項対立的な視点ではなく、朝鮮全体のこととしてとらえる姿勢の重要性が確認され、「北朝鮮—その現実と思想」では、北朝鮮がいかに主体思想（詳細については後述する）のもとに第三世界の模範的国家として存在しているかについて、思想的な観

点から書かれている。そして、金日成主席との会談内容を載せた「つけたし」における「それは避けて通ることはできない」および「韓国問題緊急国際会議」基調報告」では、以前韓国を訪れたときの感想と韓国の朴正熙政権批判の内容が盛り込まれている。

それに比べて北朝鮮を旅行した体験と北朝鮮の問題により集中した『「北朝鮮」の人びと』では、北朝鮮社会全体が主体思想をいかに実現し生きているかを、小田なりの「何でも見てやろう精神」で書いている。とくに、「金さん」、「韓さん」、「李おばさん」など、名字だけではあるが個人として名前をもった人々の実際の生活に飛び込み取材した記録を元にした「フロから「主体思想」まで」や「金さんと妹歌姫嬢」などをはじめ、北朝鮮に対する日本メディアの態度を批判した「「夢」と「計算」」、資本主義を批判し北朝鮮式社会主義をたたえた「働かない人の国、働く人の国」などである。

ここで重要なのは、『私と朝鮮』、『「北朝鮮」の人びと』どちらの作品においても、小田の描いたところの北朝鮮の体制や一般大衆の実像は、自由に得られたのではない情報にもとづいて書かれたということであり、そして小田自身がそれをわかっていたということである。つまり、小田は北朝鮮という理想像を称揚したが、そのことについては葛藤を抱えつつ、しかしそれを抑圧したのである。言いかえれば、「何でも見てやろう」精神の持ち主である小田は、自由ではない北朝鮮の体制や一般大衆の実像を、彼なりの自由な筆致で著作として残そうとしたわけではあるが、そもそもその情報源が自由に得られたものではないという事実を理解しつつ、その事実を看過したのである。このことは小田個人の問題であり限界なのかもしれない。しかし、小田の訪朝記は、現代日本作家が本当に自由に他者を、とくに情報統制が行われている北朝鮮とその人々を、適切に表象することができるかという問題をも突きつけている。

本章では、こうした問題意識のもとに、小田の2冊の訪朝記のテキストを具体的に検討することにしたい。まず、第2節では、小田の訪朝記に対する同時代評価を確認する。第3節では彼の北朝鮮に対する基本的な立場を確認し、小田が実際に何について書こうとしたのかを論じる。第4節では、北朝鮮の社会と人々を表現する際の問題と、その問題に対する小田の葛藤ならびにその抑圧を、テキストの分析を通して検討する。

第2節 小田訪朝記の同時代評価

小田が帰国後に雑誌へ連載しはじめた訪朝記の内容については、朝鮮問題をあつかう雑誌や、小田の活動に注目していた人々によって評価がなされた。ここでは、その内容の一部を見ておきたい。最初に『私と朝鮮』が発表される6ヶ月前、『Korea Review』2月号に掲載された田勝の「小田実訪朝記の読み方」という文章を引用する。

朝鮮総連にとって、最近の、対日プロパガンダとしての政策的ヒットは、おそらく小田実の北朝鮮招待旅行であったろう。十一月下旬くらい小田氏は、ジャーナリズムや各種講演会で、精力的にその訪朝レポートを書きまくり、しゃべりまくっている。特に、彼一流の語り口が日ごろ眠たくなるような、念仏みたいな演説や講義、講演などしか縁のない総連系の人びとには新鮮で、人気を呼んでいるようだ。そして「安定している経済」「日本より豊かな生活」^{ママ}から始まって「人類の歴史の最先端を行く先進国」まで、一見、彼のレポートによってはまたひとつ「共和国＝地上の楽園」という物語が積みあげられた感じではある。

しかし、小田訪朝記を各種詳細にみても、これまでの凡百のレポートとはひと味違ったところもある。それは、たとえば朝総連や日本の共和国ロビストたちが喜ぶ話ばかりでもないからだ。やはり、彼は見るところは見てきたようだ⁴。

まず、田勝は、「小田の朝鮮招待旅行」が朝鮮総連の「対日プロパガンダとしての政策的ヒット」であることを指摘している。そして、小田の文章は「眠たくなるような、念仏みたいな演説や講義、講演など」とは違って「新鮮」であるという。しかし、ここで田勝は明言していないが、実際に小田が書いた文章を一読すればわかるとおり、その内容は訪朝レポートであり、とくに主体思想の紹介が主眼となっている。このことを念頭におけば、「彼のレポートによってはまたひとつ「共和国＝地上の楽園」という物語が積みあげられた感じ」ではあるが「朝総連や日本の共和国ロビストたちが喜ぶ話ばかりでもない」という田勝の記述は興味深い。それは、小田の訪問記が主体思想に関する「対日プロパガンダ」になっており、それはこれまでの「「共和国＝地上の楽園」」の反復であるわけだが、他方で「共和国≠地上の楽園」という可能性をも暗示しているからである。田勝は小田の訪朝記の中に、北朝鮮に対する相反した評価を読み込んでいるのである。

次に、『私と朝鮮』の単行本が出た後の評価を、雑誌『現代の眼』と『朝鮮研究』で確認する。まず『現代の眼』1978年1月号の「読書室」欄に投稿された古屋能子⁵の「著者への手紙」の内容をみてみたい。この文章は小田実への手紙という形式で書かれたものである。

(引用者：金日成への個人崇拜)このことはこの国に官僚主義が確立しかけているということでしょう。北朝鮮では、いっぽうでは個人崇拜と官僚主義の制度化と、他方では人民の創意によるめざましい社会主義の建設とが平行現象として存在する図がみられるわけです。美と醜が同時に存在しているということでしょうか。これはほとんどすべての「社会主義国」がこんにちとっている道であり、現実にあらわれている事態です。世界史的に遅れて前面に出てきた民族にとってある意味では不可避ともいえましょう。中国もソ連もその例外とはいえないと思います⁶。

この引用において、古屋が小田の北朝鮮観に「美と醜が同時に存在している」ことを指摘していることに注目したい。なぜならば、1949年から始まる北朝鮮訪問記の歴史は、社会主義の楽園としての北朝鮮についての情報伝達の他、日本における北朝鮮のイメージ・言説作りに大いに貢献してきたのであるが、古屋は小田の『私と朝鮮』にいたってようやく「美と醜が同時に存在している」現実の存在としての北朝鮮を受け入れることが可能になったと述べているからである。

同年4月に発行された『朝鮮研究』4月号に載った佐藤勝巳の評言も同様である。

私がいままで読んだ訪朝のなかで、功罪を含め、最も印象に残っているのが寺尾五郎氏『三十八度線の北』（一九五九年新日本出版社刊・絶版）である。印象の内容は同じではないが、寺尾氏の本と同じように功罪を含め、この小田氏の『私と朝鮮』は、やはり印象に残るものであった。（中略）「主体思想」と個人崇拜に真正面か

ら言及したのは、日本人で小田氏が最初である。その点で、小田氏は「日朝家」とは明らかに異なる人だ⁷。

上の引用における「日朝家」とは、北朝鮮を支持したり北朝鮮に同情を示したりしていた人々を表す言葉である。佐藤は小田を評して「日朝家」ではないと評することで、小田が『私と朝鮮』において、これまでの訪朝記では扱ってこなかった北朝鮮の最も敏感な部分を果敢にとりあげたことを評価している。

このように、小田の訪朝記が出版された当時の評言は、小田の記述が北朝鮮寄りの「対日プロパガンダ」である点を認めつつも、北朝鮮社会の「醜」をも記述しているという点を評価している。しかし、古屋も佐藤も、実際に小田の訪朝記においては具体的にどのように北朝鮮が表現されているのか、そしてその背景になった小田実の朝鮮問題認識の問題点、とくに彼自身が気づいていた重要な問題、すなわち彼が見た北朝鮮の社会や人々の姿は彼が自由に取材できたものではなかったという点について、十分には論じていない。以下本章ではこれらの点について議論を進めることとする。

第3節 小田の北朝鮮問題に対する立場

そもそも小田はなぜ北朝鮮について積極的に語ろうとしたのか。本節ではその理由として二点を挙げる。まず、北朝鮮を報道する日本のジャーナリズムに対する小田の不満について指摘しておく。そのもっとも印象的な具体例を一つあげよう。『「北朝鮮」の人びと』の中で、小田は北朝鮮の共同農場のことを書く際に、『中央公論』1977年5

月号の「米中ソの東北アジア外交を解説する」という北朝鮮に関する外信部記者座談会をとりあげている。この対談記事は「朝鮮問題の舞台裏を探る」と題したセクションの一部であるが、その内容をここに少し引用したい。

北朝鮮の国内事情

B：だいたい北朝鮮がどうしてあんなに急に金に困りだしたのか。二十億ドルの責務をしょって身動きがとれないということですね。

F：あれは、韓国の経済発展が非常にすばらしいということが、南北の対話を通して北に分かった。（中略）

A：たとえばこのあいだの板門店事件、あれは一体どこからの指令で北朝鮮が出てきたのか。共産軍の第一線の指揮官あたりの命令でああいうトラブルを起こすことは、ちょっと考えられない。コロンボ非同盟諸国首脳会議での失敗から、国連決議案の撤回まで、外交的に相当混乱がある。経済的行き詰まりと、こういう外交的な混乱というのは、当然国内のリーダーシップに混乱があるということでしょうね。

F：いま急にどうのこうのということじゃないけれども、金日成の一元的な支配体制が、なんらかの政争によってゆらいでいる可能性がある。一種の派閥抗争が展開されているとすれば、板門店事件も、ある一派の命令で起こって、国内問題に利用されているとも考えられます。あれがほんとうに南に向かって挑発を仕掛けられるつもりでやったとは、どうも思えないわけですよ。南に対する戦術ではなくて、むしろ、ある種の緊急動員体制を作って、その中で軍事ポジションをある一派が取るとか、そういう内紛に利用されたという感じなんです。（中略）

金日成の後継者問題

A:韓国情報によると、金英柱と金日成夫人金聖愛が組んで、金正日と対立しているという。

F:金正日は前の奥さんの子供ですからね。金英柱と現夫人が結びついている。そして両派で銅像の建て合いっこをしている（笑い）。金正日は自分の、死んだお母さんの銅像を立てようとする、金英柱派は今の奥さんの銅像を建てる⁸。

小田はこの記事について『「北朝鮮」の人びと』の中で言及し、「またか」（87 頁）といい、「日本の人びとによく見られる予断と偏見」（88 頁）に強い不満を述べている。そして彼は、「簡単に言えば、こうなる。「北朝鮮」のこととなると、何でそんなに知ったかぶりをするのか。いや、もうひとつ言って、「見て来たようなウソをつき」それから、さらに、そこにあるあからさまなあなどり。軽蔑」（87 頁）と言って、実際に北朝鮮を見て来た自分こそが他者である北朝鮮を語ることができると、当時のマスメディアを真正面から批判している。とくに、上掲の記事の中の「銅像の建て合いっこ」（引用者：金日成の銅像）については『「北朝鮮」の人びと』の中で、新聞記者は見て来たようなウソをつくが、「「見て来た」私にははっきり言える」（89 頁）と述べている。ただし、小田はこの「銅像の建て合いっこ」の「反人民性」（89 頁）については批判している。

なぜ北朝鮮についてはジャーナリズムの基本が守られないのかということについて、小田は以下のように述べている。

「北朝鮮」というと、人びとには朝鮮のこととなると判っているとでも言ったふうな思い上がった気持ちがわいて来るらしくて、少しでも自分のその予断にさからうような事実がでて来ると、宣伝でしょう、ということになる。この朝鮮のこととなると判っているという思い上がった気持は、ほんとうに人びとに強いようだ。同じ人びとが、「北朝鮮」？何も知らんですな、情報がないんですな、あそこは「鎖国」してますからなと「常識」を当然のごとく語るのだが、「常識」と思い上りは表裏一体をなすことがらのように思えてならない。(92 頁)

この引用においては、情報がなくて鎖国状態に等しい北朝鮮の現状が人々に予断を促し、予断ともいうべき新しい北朝鮮像を作り出していることを指摘し、むしろその予断と異なる、事実とみなしてもよい可能性がある内容は、たちまち宣伝によって構築された幻想とみなされてしまう現実を批判している。小田は、これまでの「共和国＝地上の楽園」といった幻想としての北朝鮮に対して、冷静かつ分析的な姿勢を保ちつつ現実世界において向き合っていこうとする態度ではなく、事実を幻想としてみなそうとする安易な態度が、日本のジャーナリズムで通用していることを批判しているのである。

この批判は、興味深いことに、同時期の批評家、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』（1978 年）の議論と似ている。サイードは、第二次大戦後のアメリカにおけるアラブの表象について以下のように論じた。

映画やテレビでは、アラブは好色漢か血にうえた嘘つきかいずれかの連想とむすびついている。アラブは性欲過多の変質者であり、不正なたくらみにはたけていても、

本質的にサディストであり、腹黒い下等な人間としてあらわれる。(中略) ニュース映画やニュース写真では、アラブはつねに群衆としてあらわされる。個性も、人格も、個人としての経験も問題にされないのだ。こうした画面があらわしているのは、ほとんどが群衆の怒りや悲惨、あるいは非理性的(で、それゆえ救いようのないほど奇矯な)身ぶりである。これらのイメージすべての背後に潜んでいるのがジハードの脅威であり、その結果、イスラム教徒(ないしアラブ)が世界を征服するのではないかという恐怖が生まれる⁹。

サイードは、アラブを規定するイメージはアラブ人自身によるものではなく、イスラエルや西欧によってネガティブな価値を付与されて流布されたものであって、その背後にはオリエンタリズム的伝統や、西欧世界の石油に対する欲望が存在することを明らかにした。そしてサイードは、プリンストン大学の同窓会で非アラブ人がアラブ人の服を着たことをはじめとして、漫画、映画、ニュース、雑誌、論文などの事例をあげ¹⁰、あらゆる表象の媒体におけるアラブ表象の暴力性を批判したのである。サイードの議論は、小田による日本のマスメディア批判とよく似ており、またほぼ同時期に執筆されていることは興味深い。

もう一点、小田がとくにベトナム戦争以降アメリカに対する反感を強め、平和運動を組織する中で、北朝鮮の主体思想に肯定的な評価をするようになったことを指摘しておきたい。

小田は『私と朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』において、とくに主体思想について彼が見聞したことを書いている。その理由は、主体思想の存在自体はすでに知られている

ものの、実際にそれが北朝鮮社会においてどのように機能しているのか、具体的な記述が非常に少なかったからである。小此木政夫編『北朝鮮ハンドブック』（講談社、1997年）によれば、北朝鮮で主体思想が確立した背景には 1950 年代末から顕著になった中ソ対立がある。1960 年代に入ると、対立する中ソ両大国からの独自路線を堅持するために、金日成は「主体」を強く打ち出していくこととなる¹¹。この大国からの自主自立を原則とするという主体思想と、それを他の小国との連携に使おうとする北朝鮮に対して小田は共感を覚え、そのため主体思想について詳細に述べたと推測できる。小田が主体思想という自主独立のシステムを創りだした北朝鮮に心をひかれたことは、理解の難しいことではないだろう。

こうした小田の思想をふまえると、『私と朝鮮』からの次の引用も理解しやすくなるだろう。

マルクス主義者が言うように歴史の発展段階が封建主義から資本主義、資本主義から社会主義、社会主義から共産主義にまで進んでいくものであるなら、そこで「北朝鮮」の人びとがよく主張するのは、自分たちはその発展段階を一段階飛びこえて封建主義から社会主義にまで来たという見解だが、この見解にくみするにせよしないにせよ、「北朝鮮」を私たちの日本よりいちだん進んだ——それこそ日本を飛び越えて進んだ社会としてとらえてみることは必要なことだと思う。(131 頁)

この「北朝鮮」を私たちの日本より一段進んだそれこそ日本を飛び越えて進んだ社会としてとらえてみることは必要なことだ」という言葉には、大国（とくにアメリカ）寄

りのジャーナリズムや言説に迎合せず、間違っているかもしれないが自由の精神によって言葉を紡ぎだすのだという、小田なりの姿勢を読み取ることができるかもしれない。

ただし、北朝鮮の体制や人々を語る際の日本のジャーナリズムの問題を批判し、アメリカの世界戦略への対抗手段としての主体思想を肯定的に語った小田が、とくに主体思想の元で暮らす人々の実際の姿を語ることの問題を解決できなかったことは指摘しておくべきだろう。次節ではこの点について論じる。

第4節 人々を語ることの困難さ

小田は主体思想そのものを単に紹介し賛美したのではない。『私と朝鮮』と『「北朝鮮」の人びと』において、主体思想の理解には実際にその体制の中で暮らす人々の姿を知る必要があることを強く訴えているのである。

まず、小田が北朝鮮当局の提供する情報を鵜呑みにしていないことは注目すべきである。たとえば、『私と朝鮮』において、小田は次のように述べている。

「北朝鮮」についての情報といえば官製、おしきせの政府提供のニュースでなければ、いいことずくめ、わるいことなしの誰それの訪問記、それと頁を開けると必ずと言っていいほど「偉大なる首領さま」ということばが飛び出して来る、いかにも宣伝雑誌くさい宣伝雑誌(ということは、いかにも下手クソな宣伝雑誌だということだ)のたぐいがあるぐらいで、たとえば、かんじんの「北朝鮮」の人びとのくらしのかたちについていきいきと教えてくれる情報はどこにもないのだ。(59頁)

この「人びとの暮らしのかたちについていきいきと教えてくれる情報はどこにもない」という点について、小田は何度も繰り返して語っている。

「北朝鮮」という国、ある人のイメージのなかでは、それこそ、この文章のはじめのところに出した私の知人が言ったようにいつ何どき南へむかって侵略を開始するかもしれない好戦的な国であり、そこに住む人びともまた悪魔のごとき人間たちであるのかもしれない。いや、これは、もちろん極端すぎるイメージだろう。しかし、虚心に考えてみると、私たちの心の動きに「北朝鮮」の人びとを何やら得体の知れない存在としてみなしているところがないとは言えないにちがいない。(60 頁－61 頁)

宣伝雑誌やら、いいことづくし、わるいことなしの訪問記のたぐいが喚起し、ひたすらに強調する「北朝鮮」のイメージには、「千里馬」英雄の姿はいくらあっても、ふつうのひとびとのありどころはどこにも感じるができなくて、これでは「北朝鮮」の人びとを何やら得体の知れない、さっき述べた薄気味の悪い存在としてとらえるイメージとたいしてへだたりのあるものではない。(62 頁)

小田の関心は、主体思想の紹介ばかりにあるのではなく、むしろその思想のもとに暮らしている実際の人々の生活が、いわば悪魔化されて流通しているということにある。この人々の生活をいかに正確に伝えるかが小田の課題なのである。

実際、小田は主体思想を人々の生活の具体的な現場からとらえようとしている。たとえば、『「北朝鮮」の人びと』の冒頭で、小田は北朝鮮の風呂桶のことに言及し、自分を「そういう人間のくらしの基本みたいなことがらが気にかかって来る」(10 頁)人間だと紹介した上で、人々の生活の基本みたいなものが判然として来ない以上、「そこでのイデオロギー、そいつもまともに頭に入って来はしない」(10 頁)と述べている。このことについて小田はさらに以下のように述べている。

かなりな数の本をよんで判った気持ちになっていたその国のことがかいてもくぼんやりととらえどころがなくなったのは、フロのなかで、ふと、そこでのフロオケのことを考えたからである(中略)わが心のなかの「北朝鮮」——朝鮮民主主義人民共和国のイデオロギー、「主体思想」のほうも何やらとらえどころのないものとなった。(11 頁-12 頁)

それでは、主体思想を、北朝鮮を、納得がいくように理解するにはどうしたらよいのか。ここで小田は一つの方法に思い至る。

私が出した提案は、まず、手あたり次第にあちこちの家を訪れて、なかを見せてもらう。話をする。そこからこの社会のたたずまい、動きを見る。そうしないかぎり私の「主体思想」理解はあくまで抽象的な領域にとどまって生きたものとならない。(13 頁)

小田の心の中では、主体思想はまだ抽象的なものであり、その思想の具体例を確認するためには「手当たり次第にあちこちの家を訪れて、なかを見せてもらう。話をする。そこからこの社会のたたずまい、動きを見る」必要があると述べている。実際、小田は、この飛び込み訪問をおこない、都市部や農村部の民家に宿泊することとなる。あたかも、「何でも見てやろう」の精神をもう一度北朝鮮で発揮するかのようである。その根底には、自由に見聞し、自由に書くという彼の作家としての方針と（北朝鮮への肯定的な評価も、大国アメリカへの批判も、彼の自由の精神の発露である）彼の人間の論理と倫理が主体思想において実現可能なものなのかという問題設定があったことに注意する必要がある。

ただし、彼が「何でも見てやろう」の精神を発揮して、北朝鮮の人々の現実を記述することができたかどうかについては留保が必要である。たとえば次の引用は注目に値する。

「北朝鮮」の政府が出している宣伝用のあまたの印刷物では出て来るのはたいていが「千里馬」英雄もしくは准英雄、あるいは、英雄候補という人間たちで、もちろん、私はこういう人間たちを人間ではないと言うつもりはさらさらないが、ただ、そういう印刷物のなかでは彼らはまず何よりもセンバンの天才、石炭掘りの偉人であって、フロへ入って一席下手くそな民謡をうなったりする人間ではない。すくなくともそちらのほうは英雄像の陰にかくれた存在感がどうにもうすいのがあまたある印刷物の特色だが、「北朝鮮」を訪問したいろんな日本人がいろんなかたちで書いた書き物を見ても、たとえば、そこにピョンヤン市街にみごとに建ち並ぶアパー

ト群の記述はあまたあっても、そこに住みくらしている人間のことのほうはたいして出て来ないしくみになっている。(15頁)

小田は、北朝鮮の印象を決定付けるもろもろの書物を読み、その上で議論を展開しようとしていた。その主要な目的は、「英雄候補」ではなく、「英雄像の陰にかくれた存在感がどうにもうすい」人々にあらためて光をあてることである。そのために彼は飛び込み訪問をおこなったのである。では、実際に小田はこうした人々の生活を描写することができたのだろうか。

実は、小田は主体思想とそこでの人々の実際の生活を知るための手段としての飛び込み訪問すらも、決して彼の思う通りに行われたものではないことを認識していた。そもそも『「北朝鮮」の人びと』の13頁からの引用で、小田は飛び込み訪問について、北朝鮮側の随行員に「提案」したと明記していることは見逃せない。つまりこれは本来の意味での、予約なしでの訪問ではなくて、小田がまず「提案」し、その後その「提案」を北朝鮮当局が許可した上での訪問である可能性が高いのである。さらに、彼はこのことを『「北朝鮮」の人びと』の中で明言している。

世の中にはいくら「見て来た」って何にも見なかったあきメクラはいくらでもあることだし、「見て来た」と言っても、たかが三週間かそこらのことだ。それも私がいくらあっちこっちに「現地なだれ込み」をしたり、強引に他人の家に泊まったりしたところで、根本的には先方様招待の「おしきせ旅行」だ。ものには限りがある。こうしたことは重々承知した上で言うのだが、そういう旅行でもはっきり眼に見え

て来ることがあって、それは、たとえば、金日成さんの銅像が数多くあることだ。

(90 頁)

小田はこの旅行が、「現地なだれ込み」も含めて「おしきせ旅行」であると明言しつつ、それでもわかること（金日成の銅像群という「醜」）があると、いささか自己弁護的に述べている。これは、言葉をあつかう者としての、小田なりの誠実さのあらわれであるといえるのかもしれない。彼の訪朝記における重要な課題、すなわち主体思想や「英雄像の陰にかくれた存在感がどうにもうすい」人々に光を当てることは、情報が統制されている北朝鮮社会においては根本的に困難であることを、小田は認めているのである。

上述の引用を読んだあとに、以下の引用を読むと、小田の言葉には迫真性が欠けてしまっていると言わざるをえない。いわゆる石油ショック（1973 年）を念頭において、北朝鮮では自動車は普及していないということについて、それは石油の輸入に頼ると結局大国に頼らざるをえないためだという北朝鮮の姿勢を語る際に、小田は『私と朝鮮』で次のように述べている。

「北朝鮮」の社会を見ていると、それはあたかも働き者の一家で、みんなが懸命に働いていて、一家の頂きに「アボジ」（父親）として、金日成さんがいるという感じだが（「アボジ金日成」という歌を子供たちはよく歌う）、父親だからいかめしくあっても、ときには子供たちのあいだに来て冗談口も叩くのちがいない。（中略）そして、この一家の特色はほんとうにみんなが懸命に働いて一家をおこして来

たことで、いっしょに働いて来た「アボジ」にも一家の成員が尊敬をもっていることだ。(160－161 頁)

小田が「みんなが懸命に働いていて、一家の頂に「アボジ」(父親)として、金日成さんがいる」と感じて書くのは彼の自由である。しかし北朝鮮の人々の姿を自由に書く際
の元になるべき見聞には、不自由な「おしきせ旅行」であるがゆえの限界を伴うことも
小田は述べている。つまり、この記述が「英雄像の陰にかくれた存在感がどうにもうす
い」人々の本当の姿であるかどうかは留保せざるをえないのである。

もう一点、『「北朝鮮」の人びと』における人々の表象について確認してみよう。
『私と朝鮮』と比べると、『「北朝鮮」の人びと』には大きな特徴がある。それは、前
者においては人々には一切名前が与えられず、ただ「労働者」「工員」「軍人」といっ
た職名が与えられるのみということである。たとえば『私と朝鮮』には以下のような記
述がある。

私が会った診療所の「準医」は、後者をえらんで百四十ウォンの「生活費」を農場
からもらっていた。(中略)あとは、中学教師が九十ウォンから百二十ウォン、郵
便局の四十七歳の女局員が百ウォン、師範大学の日本語の先生が百五十ウォン、奥
さんが縫い物工場で高級衣服のお針子として働いて百ウォン、労働青年同盟中央委
で「オルグ」のような仕事をしている二十九歳の女性が百四十ウォン、彼女の夫が
同じ委員会の宣伝部にいて百四十ウォン、エカキには「技能級数」があっいちば
ん下の「五級」あたりで百二十ウォン、「一級」となると百六十ウォン以上になる

が、絵を描き上げると国家がだいたい百号くらいの絵なら「生活費」の七ヵ月分ぐらいで買い上げてくれるので、大きな作品と小さな作品をそれぞれ一つあて描くと一年分の「生活費」相当分が余分に出る。(123頁-124頁)

これに対して、『「北朝鮮」の人びと』においては、小田は人々の名前(名字のみではあるものの)を書いて、彼らの過去と現在を語ろうとしている。以下、多少長くなるが、「李おばさん」について引用してみたい。

李おばさんは郵便局員であった。四十七歳。もっとも年令は「北朝鮮」では「数え年」で数えるのがふつうなので、たぶん、「満」で四十六歳というところだろう。ご主人はいないのでどうしたのかと聞くと、朝鮮戦争——祖国解放戦争で戦死したのだという。以後、ご主人の母親の今年で七十八歳になるおばあさんと二十歳で金日成総合大学の学生だという息子さん(専攻は「社会科学」。息子さんが答えたのではない。李おばさんが自分で言った)を養って三人で生きて来た。(19頁)

李おばさんも昔は孤児で、叔父さんのところで養ってもらったのだが、たいへんな苦勞だったという。昔の自分だったら夫が死んだあとどうして生きて行けなかっただろうし、まして、息子を大学に行かせることができるなんて考えもできなかったことだと、おばさんの雄弁にいささかたじろぎながら李おばさんもつづけて言った。夫は二年半いっしょにくらただけだった。だから、自分はアメリカ帝国主義の悪を誰よりもよく知っているつもりだ、そのことを日本の人民に伝えて欲しいと、ふ

つうならいかにも外交儀礼じみたことを、そうとはまったく聞こえない口調と態度で、オンドルの床の上にきちんと正坐して坐った四十七歳の郵便局員のおばさんは言った。(26頁-27頁)

これらの引用を読むと、一人の北朝鮮人民の困難な経歴、その生活の様子、そして自分の夫を失うこととなった「朝鮮戦争—祖国解放戦争」と、その背後にあった「アメリカ帝国主義の悪」への反感が、抽象的な肩書のみの人々の言葉ではなく、47歳の郵便局員である「李おばさん」の生の声として語られており、そこには真実味を感じられるような工夫がされていると言ってよい。しかし、この「李おばさん」の家への訪問も、小田自身が北朝鮮側の随行員に「提案」をせざるを得なかった(だから本当の意味で「強引」な訪問ではない)ため、「根本的には先方様招待の「おしきせ旅行」」であったことを念頭におけば、「李おばさん」についての記述の真実味もプロパガンダの域を超えるものではないと言わざるをえない。

ここで大事なのは、小田自身、北朝鮮社会に住む人々の表象が根本的な問題を抱えていることを作品中に書き込んでいるにもかかわらず、その重要性を突き詰めていないということである。これは、反米の立場から北朝鮮の立場を擁護し、主体思想と第三世界論との連携に期待する小田からすれば、当然のことであるだろう。「みんなが懸命に働いていて、一家の頂に「アボジ」(父親)として、金日成さんがいる」かどうか、「李おばさん」のような人が「アメリカ帝国主義の悪を誰よりもよく知っている」かどうか、小田のような立場の作家には本当の意味ではわからないというのが当時の北朝鮮社会の状況だったとしても、「人びとの姿は根本的なところではわからない」と書き連ねるこ

とは、北朝鮮の人々の実情を伝えることになり、政府の対外宣伝を根本的に否定することにつながりかねないからである。当時の北朝鮮社会における人々を正当に表象することの困難さを知りつつ、そして作品中においてもそのことを明記しつつ、それでもなお訪朝記を書いた小田は、北朝鮮の社会や人々をむやみに悪魔化あるいはステレオタイプ化する傾向にあった当時のジャーナリズムに対してはある程度有効な批判を加えたと評価してもよいだろう。しかし自ら認識していた、北朝鮮の人々を語ることの根本的困難さについては、それを抑圧したと言わざるをえないのである。

第5節 おわりに

以上で、小田による北朝鮮表象を検討してきた。小田は大国への反感、とくに反米主義（およびそれと表裏をなす第三世界礼賛）から、専門家（北朝鮮通）による北朝鮮報道を批判し、自らの目で現地を視察した上で北朝鮮を語ることを選んだ。もちろん、この視察旅行によって見たものが、いわば先方によって調整されたものだったことは小田も分かっていた。しかしそれでも北朝鮮通による文献と伝聞によった北朝鮮表象よりは鮮度の高い北朝鮮像を日本の読者に届けようとしたのであった。ここで注意したいのは、小田にせよ小田が批判した「北朝鮮通」にせよ、北朝鮮の人々や体制あるいは思想を、議論すべき対象としてとらえるべきであるという構えは共通しているということである。

小田は、北朝鮮の人々の生活を書いたが、それは自由に書かれたものではないことを知っていた。しかもそのことを自ら作品の中に書き込んでいた。ところがその重要性を追求することなく、北朝鮮の人々の実情を伝えることができず、結果として北朝鮮当局

が対外的に宣伝して欲しい理想像（主体思想のもとでの人々の生活）を提示することになった。このことは、彼のバランス志向と、反米思想＝北朝鮮（第三世界）支持の思想が強固であったことを示すものである。

他方で、小田の葛藤とその抑圧は、敵対的な関係にある、情報が統制された地域や人々をどのように適切に表象できるのかという問題を投げかけてもいる。重要なのは、理想像や宣伝をいったん引き受けつつも、それに性急な批判を投げかけるのではなく、まずは冷静に分析し、理想像の齟齬や亀裂を見出し、そこから垣間みえる複数の実像を読み解く方法を模索することではないだろうか。

【注】

¹大高利夫『新訂 作家・小説家人名事典』日外アソシエーツ、2002年、181頁。

²パクジョンジン朴正鎮によれば、朝鮮対外文化連絡協会は1965年4月14日に設立された。基本任務は非政府間の国際交流、中でも未修好国との民間交流を担当することと知られている。（朴正鎮『日朝冷戦構造の誕生——1945—1965 封印された外交史』平凡社、2012年、203頁）。

³「学習の日々「よど号」乗っ取り犯——作家・小田氏が会う」『毎日新聞』1976年11月21日、23面。

⁴田勝「小田実訪朝記の読み方、日本教科書に韓国から要望(ニュース・レビュー)」『Korea Review』20巻182号、コリア評論社、1977年2月、2頁。

⁵反戦運動家の古屋能子(1920年—1983年)について『朝日新聞』の記事は以下のように述べている。「昭和四十年ベ平連結成と同時に参加、新宿ベ平連を結成、代表となり、以来安保、日韓、沖縄問題などに取り組んだ。」（「古谷能子さん」『朝日新聞』1983年10月16日、23面）。

⁶古屋能子「私と朝鮮」小田実著——著者への手紙『現代の眼』19巻1号、現代評論社、1978年1月、302頁—303頁。

⁷佐藤勝巳「共和国のくらし——小田実の「私と朝鮮」を論ずる（〔朝鮮民主主義人民〕共和国のくらし・外交・経済〈特集〉）」『朝鮮研究』177号、日本朝鮮研究所、1978年4月、2頁—20頁。

⁸中央公論社外信部「米中ソの東北アジア外交を解説する」『中央公論』92巻5号、中央公論社、1977年5月、170頁—174頁。

⁹サイド、エドワード・W、今沢紀子訳『オリエンタリズム 下』平凡社、1993年、200頁—201頁。

¹⁰同上、196—214頁。

¹¹小此木政夫編『北朝鮮ハンドブック』講談社、1997年、222頁—224頁。

第4章 消費の対象としての北朝鮮

——伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』論

第1節 はじめに

第3章では小田実による北朝鮮表象を検討した。小田は反米主義（およびそれと表裏をなす第三世界礼賛）から、専門家（北朝鮮通）による北朝鮮報道を批判し、自らの目で現地を視察した上で北朝鮮を語ることを選んだ。もちろん、小田もこの視察旅行によって見たものが、いわば先方によって調整されたものであったことは分かっていた。しかしそれでも、北朝鮮通による文献と伝聞によった北朝鮮表象よりは鮮度の高い北朝鮮像を日本の読者に届けようとしたのであった。ここで注意したいのは、小田にせよ小田が批判した「北朝鮮通」にせよ、北朝鮮の人々や体制あるいは思想を、議論すべき対象としてとらえるべきであるという構えは共通しているということである。ところが、冷戦崩壊と金日成主席死去に応じるかのように、それまでとは異なる北朝鮮表象のあり方が登場した。伊藤輝夫¹の『お笑い北朝鮮』（コスモの本、1993年）である。

『お笑い北朝鮮』は、小田や小田の批判者と異なるとはいふものの、実はある意味では小田の北朝鮮訪問記と共通するところがある。伊藤は実際に北朝鮮を訪問しているのである。伊藤は、正確な時期は不明だがおそらく1992年から1993年5月の間に、漫画

家の根本敬、ジャーナリストの本橋信宏、編集者の藤代勇人の3人と共に名古屋空港からチャーター便に乗って北朝鮮を訪問した。訪問の目的は、「①金日成・金正日親子長期独裁政権の謎の検証 ②北朝鮮におけるお笑いの現状視察 ③噂に聞く天才少年ディレクターの発掘とスカウト」（180頁）であった。伊藤は、一度目に申請したビザが却下され、二度目にやっと許可が下りて北朝鮮に行くことができた。ビザが却下された理由を「申請書の職業欄に放送と出版と書いたため、西側のマスコミの取材を警戒している北朝鮮にチェックされたようだ」（181頁）と書いていることからみて、招待元なしの観光であったことがわかる。

ここで、日本人の北朝鮮観光の歴史を『朝日新聞』の報道に沿って簡単にまとめてみたい。北朝鮮は1987年10月に日本から戦後初めての一般観光客を受け入れた²。最初に観光客に解放された地域は、首都平壤はじめ、元山、南浦、軍事境界線の板門店、開城、金剛山、妙香山の7ヵ所で、観光客はまず空路で北京に向かい、そこからさらに空路で平壤に入るのであるが、10人以上のツアーの形のみとなっていた³。同年末までに9グループ130人が北朝鮮を訪れたが、1987年11月11日に起きたKAL爆破事件をきっかけに日朝関係が悪化、中断された⁴。以後は1989年10月に70人の観光客が北朝鮮へ旅行するという例外的な事例が一件のみあり、その後1年8カ月ぶりの1991年6月に再開されることになった。観光再開に先立ち、同年5月からは政治家を運んだ直行チャーター便のほか、日朝間の商業ベースによるチャーター便運航が初めて実施された⁵。このことについて『朝日新聞』は、「今年1月から国交正常化のための政府間交渉が始まり、日朝関係が好転したことから実現。北朝鮮の国際旅行社の日本総代理店である中外旅行社（東京都台東区、安鉦善社長）が「日朝国交正常化直前記念限定ツアー」とし

て日本人の一般観光客 30 人を募集し、6 月 10 日から 6 日間の予定で出発する。費用は 27 万 9000 円」⁶と詳しく報じている。その後、1993 年 6 月には北朝鮮が検査問題で外国人の入国を禁止し、北朝鮮観光は 1994 年 8 月まで二度目の中断の時期を迎える。

以上の経過からも伺い知れることだが、1990 年代初頭に行われた伊藤の北朝鮮訪問は、一般人としての北朝鮮観光だったのであり、小田ほど「おしきせ」ではなかったといえるだろう。そのため、伊藤が書いた北朝鮮訪問記『お笑い北朝鮮』は、小田やその批判者たちのテキストとは大きく異なる。このベストセラー⁷は、小田のような現地視察に基づく北朝鮮礼賛でもなく、党派的立場やステレオタイプに影響された北朝鮮批判とも異なり、北朝鮮の体制をいわば（伊藤がプロデューサーとして関わっていた）お笑い番組の「リポーター」のような感覚でとらえつつ、（第 2 節で詳述するように荻野アンナの言葉を借りれば）読者に対して北朝鮮を「愚直」に観察し論じるのではなく、そこからの情報を「ナナメに受け取る」ことを求めるものであった。

以下、本章では伊藤の著作に関して非常に重要な指摘をしている荻野アンナの議論を念頭に置きつつも、彼女が行っていない作業、すなわち伊藤の著作を小田やその批判者、そして 1980 年代や 1990 年代における北朝鮮表象の系譜の中に位置づけ、その意味を考察する。

第 2 節 「ナナメ」と「愚直」——荻野の『お笑い北朝鮮』論について

本節では、『お笑い北朝鮮』に関するほぼ唯一の論考である荻野アンナの「笑止と笑死のあいだ——斎藤濤奈子著『超一流主義』、伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』、鶴見済『完

全自殺マニュアル』」⁸の論点をまとめておく。この書評は、荻野が「今という時代が見えてくる」と評価した三冊のベストセラーを比較検討し、1993年前後の、「愚直さ」を「欠落」していると荻野が嘆く日本社会の特質が、その文体によって表現されていることを検討している。具体的にいえば、「まったく位相の異なるものを論じながら、著者が力点をおく箇所に来ると、三者三様に筆がたわみ、きしみ、ブレていくのである」⁹と述べる荻野は、その例として『お笑い北朝鮮』の文章における「考えてもみてほしい」¹⁰や「凄すぎる」¹¹という表現をとりあげ分析している。荻野は、伊藤が読者の注意を喚起しようとするたびに繰り返す「考えてもみてほしい」を「口語体のオリジナルな文語化」と定義し、「口語の語感の強烈さを文章に取り入れることで、著者は文体にヤマ場を作っていく」¹²と分析している。「凄すぎる」の場合は、「内容を強調するつもりで、強烈な文体を用いることで、両者が相殺されてしまう」と述べた上で、金正日書記が「黒人パワーを味方につけた」¹³ことを評した一文を例に挙げ、「〈将来を考えるとこの視点は不気味なほど凄すぎる。〉「凄すぎる」は日常語から、徐々にコラムの文体に浸透しつつある表現のひとつである。単に「凄い」というよりは派手だが、欠点としては、言葉自体が派手すぎて、肝心の凄さの印象が薄れてしまうのである」¹⁴と論じて、文体によるテキストの叙述形式のブレを説明しようとした。

さらに荻野は、『お笑い北朝鮮』の著者伊藤の態度と、他の2冊の著者・編者の態度との共通点として、「書いてあることをナナメに受け取ることを、著者あるいは編者が望んでいる」¹⁵ことを挙げている。荻野は、斎藤漣奈子の『超一流主義』で示されている「アッパー」の概念を批判し、また『完全自殺マニュアル』における死に対する軽さへの批判を、「愚直さ」の欠如という表現によって以下のように論じている。

〈いじめられるヤツはなにをしてもいじめられる。(略)彼の取った選択は正しかったと言えよう。(略)早めに自殺しておくこともまた大切なのだ。〉／たしかに「早め」の自殺は、「何かをマスターするのに無駄なエネルギーを使う」ことを省いてくれるだろう。「生きてるなんてどうせくだらない」のだから。しかし無駄を恐れない愚直さを持たずして、「くだらない」と言い切ることも又、虚しいものだ。そしてその愚直さこそが、この華やかな三冊を生んだ、今という時代に最も欠落しているものかもしれない¹⁶。

以上荻野の議論を整理してみると、『お笑い北朝鮮』は「今という時代」の典型であり、その「今という時代」における「愚直さ」の欠落を克明に映し出しているテキストだということである。手法や結論はどうあれ、北朝鮮を議論の対象として正面からとらえ、じっくり考える「愚直さ」を避け、北朝鮮に関する事柄を「ナナメに受け取る」¹⁷態度を目指しているというのである。つまり、北朝鮮に対して熱心な批判や拒絶あるいは肯定や礼賛をするのではなく、じっくり考察するのでもなく、『お笑い北朝鮮』の著者も読者も北朝鮮を「片頬で笑いつつ、半分真顔で崇めようとする」¹⁸という不真面目でかつ屈折した態度をあらわにしていると荻野は読み取っている。

ここで荻野が持ちだした「愚直さ」と「ナナメに受け取る」というキーワードは、伊藤のテキストにおいて、「インテリ」とそれを批判した伊藤自身の対決の構図に当てはめて考えることができるだろう。次節では、荻野の議論を念頭におきつつ、伊藤の『お笑い北朝鮮』に先行する1970年代から1990年代にわたる日本での金正日に関するテク

ストをいくつかとりあげ、北朝鮮（とくに金正日）が日本においてどのように紹介されていたのかを提示する。日本における金正日のとらえ方は、『お笑い北朝鮮』とそれに先行する 1970 年代から 1990 年代までの時期の北朝鮮表象とを比較検討できるよい例であると考えられる。

第 3 節 『お笑い北朝鮮』以前の「インテリ」による北朝鮮表象

北朝鮮表象における「愚直さ」と「ナナメに受け取る」という観点を提示した前節の議論をふまえて、伊藤の「ナナメに受け取る」北朝鮮表象の特徴を例示したい。その際、まず伊藤が強調している「インテリ批判」を足がかりとしたい。

伊藤は『お笑い北朝鮮』において「しかし考えてもみてほしい。北朝鮮や金正日書記を分析評論している新聞やテレビ、雑誌といったマスコミの人々は、みなインテリだ。インテリに限って北朝鮮をどうしても政治レベルで語ろうとしてしまう。実はここに大きな落とし穴がある」（30 頁）と断り、「北朝鮮の親愛なる二代目・金正日書記を語るには、インテリの見方をもってしては正確な分析ができっこないのだ。インテリの頭で考えてしまえば、ますます金正日書記にベールを被せて、謎めいたものにしてしまうだけなのだ」（30 頁－31 頁）と主張する。

伊藤はマスコミの人々を「インテリ」だと定義している。しかし、伊藤自身もマスコミの中心であるテレビ業界の売れっ子ディレクターとして広く知られた存在であり、明らかに自分が批判するインテリの範疇に属している人間であることを見逃してはならない。彼のこのような態度は、一種のひらきなおりであり、むしろ伊藤自身もインテリで

あることを逆説的に読む側へ強くアピールするような働きをしている。しかし、ここで伊藤が批判の対象としている「インテリ」にしても、伊藤自身にしても、遠まわりでも時間がかかってもよいからじっくりものごとを見据えて、きちんとつきあいながら考えていこうという、萩野のいうところの「愚直」な人々ではない。ものごとについて権威者としての自信をもって「ストレート」にいう人々が「インテリ」で、伊藤はそれを少し茶化して「ナナメ」にいうだけの差だといえるだろう。

次に、伊藤が批判的とした、「インテリ」による金正日をめぐる情報をまとめてみたい。

まず金正日についての初めての情報が見られるのは 1970 年代後半、金正日が父金日成の後継者候補の一人として世に知られはじめた頃である。この時はまだ金正日が「金正一」という名前で紹介されるほど基本的な事実も把握しがたい状況であったがゆえに、日本での報道では、金正日個人に対する分析よりも金家内部における後継者をめぐる争いに焦点が当てられていた。

たとえば、時事通信社刊行の『世界週報』は北朝鮮に関する情報の乏しい 1970 年代の時期に貴重な情報源として機能していた。この『世界週報』の 1976 年 10 月号に記事をよせた宇治川剛は、次のような基本情報の提供を行っている。「これ（引用者：金日成の実の弟^{キムヨンジュ}金英柱の失脚）と対照的に躍進著しいのが、金日成主席の実子、金正日である。金日成主席と前夫人（故人）^{キムジョンスク}金貞淑女史の間に一九四一年二月十六日に生まれた三十五歳の青年。東ドイツの空軍大学に留学したことがあるといわれている」¹⁹。このような金日成の後継者候補に躍り出た金正日を紹介する記事が出る一方で、その翌年に玉城素が「金正一氏の後継者化をめぐって、まだそれを完全に公認することのできない

多くの障害が横たわっている。その第一は、イデオロギー的な障害である」²⁰と書くな
ど、金日成の後継者に関する情報が、専門家だけが伝えうる特別な秘密情報であるとい
ったニュアンスのもとに紹介されていた。なお、これらの記事の執筆者である宇治川や
玉城はいずれも記事において自分の名前の下に「朝鮮問題研究家」²¹という肩書きを使
っているが、彼らこそ典型的な、伊藤が批判するところの「インテリ」ということにな
るだろう。

1980年代になると、金正日という人物自体はすでに知られていたため、そのキャラ
クターや内面に迫ろうとする情報が多くみられるようになる。まず初めに批判的な立場
の紹介を見てみよう。以下は、元ジャーナリストの木屋隆安の『北朝鮮の悲劇—金王朝
崩壊のシナリオ』（泰流社、1986年）において言及された金正日である。やや長い上に、
ほとんど中傷に近い文章ではあるが、資料的価値があるので引用する。

「色に狂い、殺しに狂う——北朝鮮の摂政・金正日の正体——典型的な偏執狂的な
人物」／世界の指導者で、とくに共産主義国（社会主義国）のそれは、とうてい民
主主義国（自由主義国）の人たちの常識では考えられない人物がズラリとガン首を並
べている。アメリカの大使館を一年余りにわたって占領し続けたイランのホメイニ
師は、非共産主義だが、やることなすこと、リビアのカダフィ大佐とまったく同じ
である。二人は親子ほど齢の隔たりがあるが、“アラブ人对ペルシャ人”という宿
命の対決史を超越して親密の度を増している。一方が米国大使館を占領すれば、他
方は駐英大使館（カダフィ大佐は『駐英リビア人民代表部』とことさら改称してい
る）内から機関銃を発射するなど、親がやれば子供もそれをマネるたぐいの非常識

ぶりを発揮している。／そのほか、キューバのカストロ議長、北朝鮮の金日成主席が、非常識においては、“兄たりがたく弟たりがたい”関係だ。もっとも金日成は七十二歳の高齢で、彼の非常識は、実は彼の長男金正日秘書（書記というより秘書のほうが『北』ではランクが上位）のそれであり、彼は、すでに、“摂政”となり、事実上最高権力を掌握している。カダフィ、カストロにはイデオロギーなど微塵もない。しかし、アジテーターとしては無知な人民をだますに必要な“非凡な叫び方”を身につけている。私生活もベールをかぶせているが、いちおう“清潔”ということになっている。ところが北朝鮮の摂政金正日は、おしゃべりもできなければ、ハングル(朝鮮文字)もろくすっぽ読み書きできない。できることは、一にセックス、二つにセックス、三つにセックス、四にセックスで、五に“セックスにまつわる殺人”である²²。

木屋は、戦前に軍隊に入って満州でソ連の捕虜となり、シベリアに抑留された経験を持つ人物である。金正日を「典型的な偏執狂的な人物」と紹介した上の引用で、金正日はイランのホメイニ、リビアのカダフィ、キューバのカストロと同じく「非常識」な指導者であり、父金日成につづき北朝鮮の実権を握った人物だと紹介している。ここで注目したいのは、木屋が金正日の悪行（と彼が判断するところのもの）を、揶揄したり嘲笑したりするのではなく率直に非難している点である。北朝鮮に関して真剣かつ多方面で考えようとする努力よりは、著者自身の権威に頼って自身の感想に近い評価を「ストレート」に言ってしまうタイプであるといえる。これは荻野のいう「愚直さ」とは明らかに違うものである。

1990年代に入っても、金正日に対する批判は少なからずあった。次の引用は、在日韓国人(民団系)で同じくジャーナリストの全富億チョンブウクが書いた『金日成・正日の北朝鮮——今どうなっているかこれからどうなるか』(日新報道、1991年)の一部である。

金正日に対する修飾呼称の大乱舞と金正日讃歌の大乱作に合わせて、その権威づくりが傍若無人に始められた。まず、金日成の直接命令で全宣伝煽動媒体を総動員し、金正日を不世出の偶像的な存在として美化粉飾するとともに、金正日に対して忠誠を尽くすことを強調。(中略)金正日をクローズアップするための虚偽捏造宣伝は、北朝鮮で催す総ての行事にもれなく組み込まれている。例えば芸術部門をみると、北朝鮮が宣伝している革命歌劇「花を売る乙女」を、公演五十周年記念公演において、金正日が、「革命伝統がはっきりする共和国文学芸術のモデルケースとして発展させた」と主張し始めた。／従来の主張は、「花を売る乙女」は金日成が直接、創作したというものであった。そればかりでなく、総ての文学芸術が金正日の「文芸思想と理論によって全面的に体系化された」と宣伝することによって、金正日を北朝鮮文学芸術部門の最頂点に据えようと策動している²³。

金正日に対する偶像化・神格化作業が始まったのは、金日成の後継者として指名された1970年代からのことである。上の引用で興味深いことは、金正日をめぐる天才芸術家としての面を紹介している点である。『お笑い北朝鮮』においても金正日の芸術家としての側面は重要な題材であるが、この点についての全の評価は、上述の引用のとおり、金正日の芸術的才能は「美化粉飾」によって誕生した虚偽であり、そもそもが「虚偽捏

造宣伝」であるというものである。全の批判からも萩野のいうところの「愚直さ」よりは、急いで「ストレート」に言おうとする姿勢がうかがえる。

玉城素が監修した NK 会編の『北朝鮮 Q&A100』（亜紀書房、1992 年）では、金正日の出生の秘密を以下のように紹介している。

Q23 世襲後継者となった金正日書記の経歴と業績は？

A いま北朝鮮では、「二代目首領」予定者である金正日の神格化・絶対化作業が、当の金正日の命令でしゃにむに推し進められています。／金正日は一九四二年二月十六日、ソ連のハバロフスク北西八〇km にあるビヤツコエで、金日成と金貞淑（後に正淑と改名）^{ママ}間で生まれた。生まれた当初の名前は「金ユーラ」（愛称はアレキサンドル）でした。（中略）金正日が出生地を（引用者：白頭山であると）捏造する理由は、金日成が抗日パルチザン活動をした根拠地が白頭山であり、その白頭山で生まれたことにより、運命的に金日成の唯一の後継者になる資格を有していることをアピールするのと、また白頭山は朝鮮民族の伝説上の聖山であり、その聖山で生まれたことでもって、民族の指導者になることが運命づけられていることを一般に暗示するためです。／このインチキな工作をそれらしく示すため、三池淵付近に、金正日が生まれた場所だとして、「丸太小屋」をわざわざ建てるとともに、「誕生記念碑」も建て、そして、三池淵一帯を「金正日史跡地」に指定し、学生たちおよび一般住民たちを強制的に参拝させています²⁴。

問答形式によって一般の人も簡単に北朝鮮に触れられるような構成をとっているこの本で、著者は「インチキ」な神格化作業を「インチキ」であると率直に、つまり「ストレート」に述べている。

これらのような批判的紹介の他に、北朝鮮に対して好意的な紹介も当然あった。1977年に作家の小田実が北朝鮮を訪問して書いた『私と朝鮮』と同じように、1980年代や90年代の知識人の中には、依然として北朝鮮のチュチェ思想や、新たな指導者と目されている金正日を擁護する論や著作を書く人たちがいた。経済学者の井上周八が書いた『現代朝鮮と金正日書記』（雄山閣出版、1983年）では、「書記（引用者：金正日）が抗日革命の時期に主席によって創作された不朽の古典的名作を、文学・芸術のさまざまな形式をつうじて高い思想・芸術的見地からりっぱに再現させた」、「金日成主席の偉大な風格と革命活動の歴史を芸術的に形象化する上で、やはり金正日書記の指導が大きな役割を果たした」²⁵と記している。さらに、ジャーナリストの石川昌が著した『金正日書記——その人と業績』²⁶（雄山閣出版、1987年）は、「朝鮮人民だけではなく、世界の国々の人民大衆にとって、新しい時代を担う後継者金正日書記への期待は日増しにふくらみつつあるようである」²⁷と締め括っている。井上や石川の文章には、すでに紹介してきた北朝鮮批判者の皮肉や嘲笑のない無味乾燥な北朝鮮批判とは全く異なる、皮肉や嘲笑のない「ストレート」な北朝鮮賛美がある。

以上、日本における金正日の紹介を概観したが、共通するのは北朝鮮専門家といわれる人たち（ジャーナリスト、大学教授など）によって提供される金正日・北朝鮮の情報は、批判であれ賞賛であれ、対象をじっくり考える姿勢を欠いており、かなり短絡的な、

つまりは「ストレート」な仕方で読み手をイデオロギー的に二者択一の立場に立たせるものであったという点である。

第4節 「ナナメに受け取る」伊藤の北朝鮮表象

本節では、伊藤輝夫が批判の対象とした「インテリ」たちによる北朝鮮表象の特徴を例示した前節の議論をふまえて、伊藤の「ナナメに受け取る」北朝鮮表象の特徴を示したい。第3章で論じた小田実もまた「北朝鮮通」による北朝鮮表象を批判すべく、「おしきせ」の旅行ではあれ、ともかく現地を視察した上で北朝鮮社会や思想を擁護した。それと同様に、伊藤も観光旅行ではあるが個人で北朝鮮を訪問し、その見聞を元に、「インテリ批判」をすると称して著書を執筆している。この「インテリ批判」という点において、小田と伊藤には共通点があるのかもしれない。それは、小田も伊藤も北朝鮮についてどのように語るのかという問題において、他の論者たちと比較して常に自分を特権化しようとしたからである。たとえば、小田は北朝鮮に行ったこともない人たち（ジャーナリスト）の北朝鮮についての偏見交じりの書き方を批判したが、それは小田自身が北朝鮮からの招待をうけて訪問を行うことができた特別な存在であり、それこそが北朝鮮について何かを語ることのできるある種の資格のようなものとして機能したといえる。伊藤の場合は、望めば北朝鮮にだれでも行けた時代ではあるものの、自身がテレビ番組のディレクターとして磨いてきた視点こそが金正日という謎の存在を解き明かせるのだとして、これまでの北朝鮮紹介者たちと自身とを区別している。そういった意味で小田と伊藤は似ている。しかし小田とは異なり、伊藤は北朝鮮社会や主体思想の内

実を論じてそれを賛美したりはせず、「ナナメに受け取る」という手法で新たな「インテリ」としての自己をアピールしているのである。

伊藤は、他人に自分の長所を言わせてカリスマ性を獲得していく金正日の政治手腕を『お笑い北朝鮮』で「奥様ラーマ状態」と命名した。「奥様ラーマ状態」とはマーガリンの「ラーマ」²⁸のCMで、司会者が通りがかりの主婦たちにラーマの味を聞くと主婦たちがあらかじめ仕込まれた答えをすることから伊藤が命名したものである。伊藤はこの「奥様ラーマ状態」の例として、あるエピソードをとりあげている。以下はその引用である。

年の暮れがおし迫ったある日、部下達は金正日書記に呼ばれた。正月の準備問題だろうと部下達は推測したが、書記の発言はまるで違っていた。万寿台芸術団が祖国で正月をすごせるように特別機をさし向け、その便で漬物を送ってやろうというのである。／書記はしみじみとした口調で言った。「長いあいだの外国旅行だから、さぞ祖国の食べ物が食べたいことでしょう。ついでにご飯の味も味わえるよう米や唐辛子みそ、その他の副食も一緒に送ってははどうでしょう」新年に寂しい思いをさせてはと心をわずらわす書記の温情に、部下達は目がしらがじーんとなり、感動で泣き出す者さえいた。(57頁-58頁)

エピソードを紹介したあとで、伊藤が自ら「ポイント」という項目を立てて、それについての明らかに強引でおもしろおかしい解説を付し、著者の才気で読者を笑わせる仕掛

けになっているのだが、上の逸話についての「ポイント」説明はどうなっているのだろうか。以下の引用で確認する。

ポイント②／実は、この話は今まで日本で出版された北朝鮮批判本の中で金正日書記の浪費ぐせとして紹介されていた。が、私の見方は違う。普通は、二つのエピソードを読んで、何を金正日書記はバカなことやってるんだろ、そんなオーバーなんて外国で買っちゃえばいいじゃん、なんて思ってしまうだろう。それがヨーロッパならなおさらむこうの洋服がいいに決まっているのだから、なんて無駄なことをやっているんだと思うかもしれないが、実はここが金正日書記のスゴイところなのだ。よく考えてもみてほしい。エリートサラリーマンがロンドンに単身赴任しているとしよう。その彼のもとに岩手のおふくろから夜なべして「息子よ、寒かろう」とねんねこぼんてんを送られてきたら、その息子は馬鹿にするだろうか？「バカだなあ オフクロは、こちらは洋服の本場なんだぞ。こんなねんねこぼんてんなんて、」と言いながらも、きっと息子は遠く離れた岩手のある方角の空を見上げながら、涙を流すことだろう。この親子の情が朝鮮民族の血を燃えさせるのだ。この気持ちが大事なのだ。「私はこんないいことをしてきました」とみずから言っではおしまいだ。第三者にさりげなく言わせることが独裁者のカリスマ性を高めていくことなのだ。

(58 頁－59 頁)

伊藤は、これまで金正日の浪費癖を批判するために用いられたというエピソードを「ナメに受け取る」ことによって、紹介する元の事実には手を加えないが、誉め殺しの手

法を駆使しているといえる。岩手から送られてきたねんねこぼんてんを手にして母親の愛情を思いだす、ロンドンのエリートサラリーマンという多分に誇張された対比によって、コッケイ味を感じさせるイメージを提示し、わざとらしくそれを美化することで、読者に違和感を覚えさせるように工夫している。そして、金正日を褒め称える宣伝話の語り手となっている第三者のことを、「第三者にさりげなく言わせることが独裁者のカリスマ性を高めていく」ということによって、伊藤自身が金正日を褒める第三者と同じ立場に立つことを読者にあえて披露し、徹底して金正日を嘲っているのである。

もしここで、第3節で紹介した論者たちのように物事を単に「ストレート」に言ってしまうのであれば、ただ「浪費癖が悪い」という言い方をする他なく、そうなれば従来の「インテリ」の語り口との差異化ができなくなる。そこで、伊藤はそのような言い方を意図的にさけて、読者が「ナナメに受け取る」語りを採用しているといえるだろう。ここでは、北朝鮮の実情がどうであるかという関心ではなく、新しいネタを元にして、とにかくそれを「ナナメに」からかう楽しみが優先されているのである。

第5節 伊藤と同時代の北朝鮮表象——主体思想塔をめぐる

『お笑い北朝鮮』における伊藤の「ナナメに受け取る」態度の比較対象となる例は他にもある。たとえば1982年に父金日成の70周年誕生日を記念し金正日が計画し建てたとされる主体思想塔をめぐる記述がそれである。「主体思想塔」は北朝鮮の観光名所であるがゆえに、伊藤輝夫が北朝鮮を訪問した1993年を前後して出された北朝鮮訪問記には、多くの訪問者たちがこの塔について記している。

その中で、まず大学教授で北朝鮮ジャーナリストである宮塚利雄は『北朝鮮観光』（宝島社、1992年）で「主体思想塔——奇怪なイデオロギーと日本人妻の悲劇」という見出しで、日本人観光客向けの主体思想塔の案内役を担当した日本人妻「小林久子」の話を紹介している。宮塚は、主体思想塔を説明するためにあらわれた彼女について、「しかしわれわれにとってみれば、彼女から、聞いてもよくわからない主体思想と塔自体についての説明を受けるよりも、日本人妻としての境遇を聞き出すことのほうにはるかに関心がある」²⁹と述べた後、「われわれ日本人の上に重くのしかかっている朝鮮人強制連行、朝鮮人従軍慰安問題とは反対に、北朝鮮に渡った日本人妻の問題は、日本のマスメディアで公然と語られることはほとんどない」³⁰と述べて、日本人妻の話題性を主体思想塔に象徴される金正日統治の北朝鮮と日本の関係に結びつけて語ろうとする。さらに宮塚は、「八千三百十一人の日本人妻たちは日朝間の歴史の狭間に落ち込み、解決の糸口すら見出せないままに時間だけがいたずらに過ぎていく」³¹と日本人妻をめぐる悲劇を強調している。

帰国事業が行われていた1950年代における「日本人妻」問題については第1章で論じたが、ここで帰国事業終了後の日本人妻のことを述べておく。帰国事業の熱気が冷めた1974年³²、日本では「日本人妻自由往来実現運動の会」が結成され、日本人妻の里帰りの実現や安否調査団の派遣が政府や日本赤十字社、朝鮮総連などに求められた³³。この運動の中心人物であった池田文子³⁴は、日本人妻の里帰りについて、「国交がなくても帰還したのですから、国交がなくても人道主義にもとづいて里帰りをするのは当然の人道上の権利だと思います」³⁵と主張した。とくに日本と北朝鮮の間に「国交がなくても」推進された帰国事業の矛盾は、これ以後、日本人妻の悲劇を象徴し、国内の批判的

な世論の矛先を北朝鮮にむける装置として機能することになる。1997年11月8日にごく一部の日本人妻が里帰りを遂げたが、日本人妻は、日本人拉致被害者の存在とともに北朝鮮による犠牲者の代名詞として位置づけられたのである。

宮塚の引用に戻れば、日本人妻が説明してくれる主体思想塔は、それ自体日本人にも無縁ではないある暴力性を内包しているかのように読み取れる。以下の引用は主体思想塔に関する箇所である。

その日本人妻のひとりである彼女の説明によれば、主体思想塔を作るために使用された花崗岩の数は金日成主席の生きてきた日数にあやかって二万五百五十個（七十歳×三百六十五日）、金日成主席の革命的功績を謳った碑文は幅十五メートル、高さ四メートルであるが、これは金日成主席が四月一五日に生まれたから、さらにその碑文の歌は十二の節からなっているが、それは主席が一九一二年に生まれたからだという。偶像化・神格化もここまで徹底していると、感嘆するというより唾然とするしかない³⁶。

宮塚は、金日成主席が生まれて70年間生きた日数である20550という数字と誕生日である4月15日をあらかず碑文の15・4という数字、さらに、生まれ年である12節の歌を「偶像化・神格化」ととらえ、直接的に批判している。しかし、これには、北朝鮮という国自体にむける驚きと違和感はもちろん、日本人妻をつつむ日本での政治的無関心に対する怒りまでもが表れているように読み取れる。単純な情報提供を超え、塔が持つ

北朝鮮の人々に対する暴力性に、なぜ日本人妻までが担い手となって翻弄されざるをえないのかというメッセージだともいえる。それが宮塚を「啞然」とさせた理由であろう。

毎日新聞社論説委員で、香港と北京で 10 年間特派員生活を送ったジャーナリストの山本展男も、1991 年に他の日本のジャーナリスト 30 人と訪朝した際の体験をまとめ、『肉眼で見た北朝鮮』（毎日新聞社、1992 年）という訪問記を出している。山本は、この著書の「観光の目玉「主体思想塔」」で、主体思想塔を見に行ったときに宮塚と同様、説明役の日本人妻小林久子に出会ったことを記している。少々長くなるが、引用する。

説明役の高希星さんに耳を傾けよう。高さんは元日本女性で横浜市鶴見区出身、元の名前は小林久子さんという。在日朝鮮人と結婚して北朝鮮に渡り、いまは金日成主席と朝鮮労働党のおかげで「幸せに暮らしている」とのことだ。

「この塔は主席の七十歳の誕生日を記念して建設されました。塔の高さは百五十メートル、先端の炎の高さが二十メートル、炎には電気の装置がしてありますから、夜になると一段と明るく燃え上がるように見えます。塔の台座に登る階段は前後十八段ずつあります。左右それぞれ十七段、合わせて七十段になり、これは主席の七十歳の誕生日を表しています。塔は一枚々々の花崗岩で張り巡らせていますが、枚数は二万五千五百枚、これは主席が誕生されてからの日数です。」（中略）平壤市民はこの塔に魅力を感じているのだろうか。私たち日本人記者団は、好天気恵まれた日に見学したのだが、大勢の日本人記者団に配慮したのだろうか、塔の周辺に市民の姿はまったく見られなかった。平壤市内にはもともと人が少なく、塔の周り

に人がいなくても、あえて異とするに当たらないかもしれないが、それにしても人っ子一人いないのは異様だった。ひょっとして市民は、この塔に興味を持っていないのではないかと思った。精神的要素以外に使い道のないものだけに、この塔の将来はみものだと思う³⁷。

主体思想塔に関する基本的な情報は宮塚の書いたものときほど変わらないものである。たとえば、塔に使われた花崗岩の数のところにいたると、金日成の生きた日数であるという基礎的な事実を、聞いたとおりに直接引用する形で提示している。興味を引くのは、説明役の小林久子の朝鮮式名前「高希星」を明かして、彼女が「いまは、金日成主席と朝鮮労働党のおかげで「幸せに暮らしている」とのことだ」と記している部分である。括弧つきの幸せな暮らしは宮塚と同じく、日本人妻のいう「幸せ」に対する著者の不信感や、「幸せではない」実態に対する冷笑を感じさせる。山本は途中「説明はなめらかだが、時々意味不明の言葉が混じる。意味が十分理解されていないからのようだ」³⁸と述べて、日本人妻が心から金日成や主体思想塔について褒め称えているのだろうかという懐疑的な目線で語っている。明らかに北朝鮮に対して批判的な政治的認識に基づいた表現であるといえる。それは塔に対する著者自身の思いにも表れる。山本は、塔の周りに人の影がみられないことを指摘しながら、「平壤市民はこの塔に魅力を感じているのだろうか」「ひょっとして市民は、この塔に興味をもっていないのではないかと思った。精神的要素以外に使い道のないものだけに、この塔の将来はみものだと思う」と述べて、北朝鮮の人々の心を外側から眺めるような口調を用いて、塔に対する批判的な見かたを提示して終わっている。

宮塚・山本両者ともに、塔自体については客観的な事実をそのまま率直に書いているのに比べて、『お笑い北朝鮮』はどうだろうか。『お笑い北朝鮮』において伊藤は、「長期政権の解明その③ 金正日書記が一見生産性のない巨大建造物を作り続ける訳に朝鮮民族の“血”があった」と題した章で、「巨大建造物に隠された仕掛け」という見出しで、この塔に関する伊藤自身の所感を書いている。伊藤は宮塚や山本が見たのと同じ主体思想塔を見てきたわけだが、塔に関する情報の出どころを明らかにせず、まるで自分が塔の説明を行っているかのように記述している。

具体的にチュチェ思想塔を検証してみよう。この塔には金正日書記の親を思う子心がかい演出でこめられている。チュチェ思想塔とは、チュチェ思想の創始者金日成主席の革命業績を末永く伝え、チュチェ偉業の勝利をめざして戦おうというために平壤の中心を流れる大同江畔に建てられた。金日成主席の生誕七〇周年にあたる一九八二年四月一五日に除幕式が行われた。高さ一七〇メートルのチュチェ思想塔は、白色天然花崗岩でできている。塔身の前面には「主体（チュチェ）」という金文字がうちつけられ、塔のてっぺんには直径八メートルの皿状の台にチュチェの光を象徴した高さ二〇メートルの烽火がある。夜ともなるとこの烽火が特殊な電気仕掛けによってさらに赤々と燃え上がるように見える。永久不滅のチュチェ思想を創始して輝かしく具現する過程で不滅の功績をあげた金日成主席を讃えるために作られたこの塔は、前面と後面にそれぞれ一八段、左右両面にそれぞれ一七段、計七〇個の基壇からなっている。七〇という数字はこのときの金日成主席の年令を思い浮かべれば、なるほどと思うだろう。（108 頁－110 頁）

ここまで読む限り、情報の内容は先述の二人の著者とかわらないが、「この塔には金正日書記の親を思う子心がにくい演出でこめられている」という導入部から伺えるように、主体思想塔が政治的目的、金日成支配体制の神秘的要素を強調するためではなく、親を大事にする息子の「子心」から建てられたものだと述べている。この前提は、続いて説明される塔の仕掛けが金正日という個人の人格から生み出されたかのように見せる働きをする。まずは北朝鮮でよく用いられる修飾、たとえば「チュチュ思想の創始者金日成主席の革命業績を末永く伝え、チュチェ偉業の勝利をめざして戦おうというために」や「永久不滅のチュチェ思想を創始して輝かしく具現する過程で不滅の功績をあげた金日成主席を讃えるために」などの表現をそのまま用いて、まるで著者自身が北朝鮮の熱烈な宣伝者にでもなったかのようにこの塔の意味づけを行っている。これを通して、塔の中に仕掛けられた金正日の思惑がいかにも貧しく、人を笑わせるものなのかを最大限に増幅させる意図があると思われる。それから伊藤は、肝心の使用された花崗岩の数や頌詩碑の大きさに秘められた数字の意味について独特の解釈を行っている。

さらに心憎い演出がある。それは、六六〇〇平方メートルに及ぶ塔身の表面に装着された二五五五〇個の白色花崗岩の数である。読者のみなさんは、この数字を見てなにかピントこないだろうか？よく考えてもみてほしい。朝鮮民族は親を大切にす。ましてや親思いの情では人後におちない金正日書記のことだ。なにかしらにくい演出がここではなされているはずだ。私は七〇周年というキーワードでふと考え付いたことがあった。

そうだ、これは一年三六五日を七〇年でかけると、この大理石の総数になるではないか！金正日書記はこの塔を、親父の生きてきた日数とまったく変わらない数の大理石でこしらえたのだった。さらに、塔基壇の前面には、金日成主席の革命業績と恩徳を讃える一二連の頌詩を刻んだ頌詩碑があるのだが、この碑の大きさは高さ四メートル、幅一五メートルもある。賢い読者はもうおわかりだろう。「四と一五」、主席の誕生日をさりげなく表わしているのだ。これらの数字が親を大切にす朝鮮民族を歓喜にむせび泣かせるのだ。金正日書記はここまで親を大切にしているのか。やはり親を思う金正日書記はなんやかんや言われようと、このように北朝鮮人民の心をつかんでいるあなどれない人なのだ。（中略）この臆面もなさがいい。普段はエラそうにしている地方の政治家が、選挙期間になると急にスーツ姿のまま田んぼに入って、ドロだらけになりながら清き一票を求め農民に握手しに行く姿と一緒にだ。（110頁－112頁）

70歳という金日成の年齢に365日かけた20550個の白色花崗岩の数は、案内人から聞いた情報である可能性が高い。ところが、伊藤は自分が発見した仕掛けであるかのよう「私は七〇周年というキーワードでふと考え付いたことがあった。そうだ、それは一年三六五日を七〇年でかけると、この大理石の総数になるではないか！」と、いわば演技をしている。つまり、伊藤いわく主体思想塔の「にくい演出」に、伊藤自身がもう一度演出を重ねているのである。また、「十二連の頌詩を刻んだ頌詩碑」の大きさを表す4と15という数字については、すでに公表されている情報を読者にも問いかけることによって、読者を伊藤の演出に参加させているのである。

さらに、これらすべての仕掛けの背景にあるのが、朝鮮民族の「血」であり、金正日書記の親思いの情であると伊藤は決め付けている。これは問題の本質を政治や北朝鮮の構造的な問題点からずらしていき、伊藤独特の軽薄な叙述方式だといえるのではないか。

第6節 おわりに

以上で論じてきたように、伊藤の『お笑い北朝鮮』の「軽薄さ」は、「非常識的な国家」として「崩壊」しそうにみえた北朝鮮に対する諦念を根底にしていると見てよいだろう。それゆえ、気楽に笑いの対象にすることができたともいえる。1970年代の小田ともかなり異なるこのような語り方の出現は、理想化することもできない「社会主義先進国家幻想の崩壊」に伴うものであったと考えることができる。このことは、1980年代に入りめざましい経済成長を遂げつつあった韓国とは対照的に、思想的にも経済的にも行き詰まりを見せはじめた北朝鮮が世界的に孤立し、次々とビルマテロ事件（1983年）、KAL 爆破事件（1987年）などを起こし、「犯罪国家」として認識されはじめた流れとも無関係ではない。そして、度重なる日朝交渉の過程でも成果がみられず、もはや北朝鮮に対しては一抹の希望をも持てなくなったという認識が広まり、真面目で真剣な態度をとることが無意味になったという一種の「政治的絶望感」の表れだともいえるだろう。そうした意味においても、ニュアンスは違うにせよ、荻野アンナが指摘したとおり、『お笑い北朝鮮』は「今という時代」の典型としてとらえることができるかもしれない。政治的議論の対象ではなく、メディア娯楽として消費される北朝鮮表象が登場したのである。

本章で伊藤を通じてとりあげてきた、北朝鮮表象の伝統的な語り方や真面目な接近を拒む、「ナナメに受け取る」姿勢は、報道や解説以外の分野でも北朝鮮をある種の娯楽対象と化す風潮を生み出すことにつながっていったといえるだろう。そして、その象徴的な現象としてあげられるのが軍事シミュレーション小説に代表される北朝鮮物のライトノベルの大量生産と、それを背景として 2000 年以降に現れる、北朝鮮の「人々」を直接語り手に仕立て自分たちのことを語らせる村上龍の『半島を出よ』のような、より積極的に一般の人々の感覚で北朝鮮の人々の心象にせまろうとする北朝鮮表象の動きである。

『お笑い北朝鮮』は、伊藤自身が批判的とした、「インテリ」たちの著作が発信する北朝鮮表象の枠組を根底からくつがえすには至らなかった。その理由は、伊藤によってもたされた「ナナメに受け取る」という態度は、結局のところ、北朝鮮に対して時間をかけて根気強く向き合うことにつながらないからである。要するに、北朝鮮表象の問題は娯楽的な受容という消費のレベルにとどめおかれた。荻野の言葉を借りれば、対象を真正面からとらえようとする「愚直さ」が欠如しているのである。しかし、「ナナメに受け取る」ことを実践に移して、北朝鮮を表象するねじ曲がった叙述の次元を切り拓くことにより、日本における新しい北朝鮮表象のステップを一步踏み出し、時代の羅針盤の役割を果たそうとしたことは評価できる。

【注】

- ¹芸名「テリー伊藤」で知られる。伊藤は 2004 年に出版された『新お笑い北朝鮮』の著者紹介によれば、1949 年に東京に生まれ、日本大学卒業後、TV ディレクターとして『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』（日本テレビ、1985 年 4 月 14 日－1996 年 10 月 6 日）『ねるとん紅鯨団』（関西テレビ、1987 年 10 月 3 日－1994 年 12 月 24 日）など、数々のヒット番組を手がける。現在は、演出家と並行し、コメンテーター、CM 製作など、マルチな活躍ぶりを見せている。おもな著書に、『お笑い大蔵省極秘情報』（飛鳥新社、1996 年）、『「人をつくる」という仕事』（青春出版社・共著、2003 年）、『俺の巨匠』（ぴあ、2004 年）などがある。
- ²「北朝鮮観光再開へ一石か——日朝友好訪問団、団体で白頭山に登る」『朝日新聞』1990 年 7 月 2 日、2 面。
- ³「北朝鮮、日本に観光解禁」『朝日新聞』1987 年 7 月 19 日、1 面。
- ⁴「北朝鮮へ観光再び——関係の改善へ受け入れ」『朝日新聞』1989 年 9 月 14 日、22 面。
- ⁵「名古屋—平壤間結ぶ商業チャーター便離陸——北朝鮮、観光振興に期待」『朝日新聞』1991 年 5 月 17 日、1 面。
- ⁶「北朝鮮への観光旅行を再開——関係好転で 1 年 8 ヶ月ぶり」『朝日新聞』1991 年 5 月 16 日、3 面。
- ⁷『お笑い北朝鮮』は、1993 年 9 月 15 日第 1 刷発行からおよそ 1 年後の 1994 年 10 月 25 日に第 38 刷発行となっている。それに対して『お笑い北朝鮮』の 1 年前に出版された同じく北朝鮮訪問記である宮塚利雄の『北朝鮮観光』が 1992 年 8 月 10 日から 1994 年 11 月 25 日まで第 10 刷になったのと比べれば、『お笑い北朝鮮』の売れ筋が推測できる。以後、伊藤は『お笑い北朝鮮』をシリーズ化し、『私が愛した金正日』（宝島社、1995 年）、『新お笑い北朝鮮』（ダイヤモンド社、2004 年）、『新版 お笑い北朝鮮——ならずもの国家“金正日王国”の研究』（ロコモーションパブリッシング、2009 年）を出版した。
- ⁸荻野アナン「斎藤濤奈子著『超一流主義』 伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』 鶴見済『完全自殺マニュアル』——笑止と笑死のあいだ」『文学界』48 巻 2 号、文藝春秋、1994 年 2 月、267 頁－272 頁。

⁹同上、267 頁。

¹⁰荻野は文体の特徴がもたらす「揺れ」について以下のように述べている。「他にも「最後で正体を明かす」ワザを「遠山の金四郎状態」などと呼んでいるが、この「状態」の用法は、最近よく流通しているものである。「私、もうどうしていいか分からない状態よ」などと用いる。「ラーマ」に関してはイメージ喚起力が強く、成功しているようだが、いまどきの口語は、時として著者の思惑を裏切ることもある。」（同上、267 頁－268 頁）。

¹¹同上、268 頁。

¹²同上、268 頁。

¹³同上、268 頁。

¹⁴同上、268 頁。

¹⁵同上、270 頁。

¹⁶同上、272 頁。

¹⁷同上、270 頁。

¹⁸荻野は「ナナメに受け取ること」の例として以下の引用を用いている。「『お笑い北朝鮮』で、自分が笑っている対象に憧れているのは、他ならぬ著者である。側近に自分を誉めまくらせ、父金日成の銅像を国中に建立し、国の経済状態を無視して生産性のない巨大建築物をどかすかと建てまくる金正日は、著者によると「田舎町の社長の息子として生まれたわがままで天才肌の二代目」である。これは決して否定的な見方なのではない。著者伊藤輝夫は熟達の TV ディレクターでもある。「いつもライバルに負けまいと戦略を練る」立場の人間にとって、「韓国のテレビやラジオの電波を国民がキャッチできないようにチューナーをハンダで固定させてしまっている」とも言われる金正日の独裁体制は、皮肉抜きでまぶしいものがあるに違いない。「お笑い」の鎧の下から、ホンネの独白がちらりと覗くこともある。〈今の日本の価値感だとスターも政治家も国民も皆等身大になってしまって、なかなかスーパースターが育たない状況下にあるが、本当はスーパースターを望んでいるのではないだろうか〉かといって、日本国民はさすがに金正日方式をストレートに受け入れる「純粹」さは持ち合わせていないからして、スーパースターをトリックスターとして、あるいはトリックスターをスーパースターに仕立てて、片頬で笑いつつ、半分真顔で崇めようとする」（同上、270 頁－271 頁）。

- ¹⁹宇治川剛「後継者めぐり抗争説——対外柔軟路線へ戦術的転換か（北朝鮮で何が起っているのか〈特集〉）」『世界週報』57巻42号、時事通信社、1976年10月、15頁。
- ²⁰玉城素「宮廷闘争に揺れる北朝鮮——金正一氏の後継者説とその背景」『世界週報』58巻14号、時事通信社、1977年4月、66頁。
- ²¹宇治川剛、前掲書、61頁。玉城、前掲書、66頁。
- ²²木屋隆安『北朝鮮の悲劇——「金王朝」崩壊のシナリオ』泰流社、1986年、10頁－11頁。
- ²³全富億『金日成・正日の北朝鮮——今どうなっているかこれからどうなるか』日新報道、1991年、188頁－190頁。
- ²⁴NK会編『北朝鮮 Q&A100』亜紀書房、1992年、50頁。
- ²⁵井上周八『現代朝鮮と金正日書記』雄山閣出版、1983年、244頁－247頁。
- ²⁶1994年に再版された。
- ²⁷石川昌『金正日書記——その人と業績』雄山閣出版、1987年、218頁。
- ²⁸1966年に販売開始した豊年リーバ（株）のマーガリンの商品名。以後、1977年に豊年リーバが日本リーバ（株）へと社名を変更し販売された。
- ²⁹宮塚利雄『北朝鮮観光』宝島社、1992年、58頁。
- ³⁰同上、60頁。
- ³¹同上、60頁。
- ³²1967年、帰還協定の終了とともに帰国申請の受付が締め切られた。1971年、新たに「帰還未了者の帰還に関する暫定措置の合意書」が調印されたが、帰国事業が開始された1959年から1968年までに約89000人が北朝鮮へ渡ったのに対して、1971年から帰国事業が終了する1984年までに帰国したのはわずか4000人ほどであった。（高崎宗司、前掲書、370頁－371頁）。
- ³³菊池嘉晃、前掲書、202頁。
- ³⁴本名は江利川安栄。1974年結成した「日本人妻自由往来実現運動本部」代表世話人。
- ³⁵1979年4月に北朝鮮を訪問し日本人妻たちの「明るい」生活をメディアに伝えた参議院議員山口淑子に対し池田文子は「せっかく北朝鮮の最高責任者にお会いになられたのですから、さらに突っ込んで真にこの日本人妻問題の悲劇が解決されるよう、発言していただきたいかと思っています。ポーズだけではなくして……。それから山口さんは『国交がないから』と発言されま

したが、これはおかしいと存じます。（中略）ましてや、出航当時、『二、三年したら里帰りできる』と勧誘していたのでございますよ」と言った。」（木屋隆安「北朝鮮日本人妻の悲劇——カーター訪韓と北朝鮮の人権〈特集〉」『自由』21 卷 9 号、自由社、1979 年 9 月、129 頁）。

³⁶宮塚利雄、前掲書、61 頁。

³⁷山本展男『肉眼で見た北朝鮮』毎日新聞社、1992 年、35 頁－38 頁。

³⁸同上、36 頁。

第5章 過去と他者の消失

——村上龍『半島を出よ』論

第1節 はじめに

村上龍（以下「村上」と略す）は、長崎県佐世保市に生まれ、武蔵野美術大学在学中の1976年に『限りなく透明に近いブルー』（講談社、1976年）でデビューし、この作品で群像新人文学賞と芥川賞を受賞した。それ以来、『コインロッカー・ベイビーズ』（講談社、1980年）、『五分後の世界』（幻冬舎、1994年）など数多くの作品を発表した村上龍は、2005年、36番目の長編小説であり、北朝鮮を題材にした最初の小説である『半島を出よ』（上・下）（幻冬社、2005年）を書きおろしで発表した。『半島を出よ』は、2007年には同じく幻冬社から、小説家の島田雅彦の解説を加え文庫として発刊された。

この作品の舞台は、出版年である2005年からみた近未来（2011年）、侵略者として現れた北朝鮮のコマンド（高麗遠征軍）に占領される福岡市である。作品のあらすじは、この占領事件の中で生じた多様な集団や個人の葛藤を描きつつ、日本社会から排斥されたマイノリティ集団イシハラグループの反撃によって北朝鮮コマンドが全滅し、九州が平和を取り戻すというものである。1990年代には軍事シミュレーションものと呼ばれ

る、北朝鮮を題材とする大衆小説が多数出版されたが¹、村上は、そうした作品群を念頭に置きつつも、そうした作品と自分が書くべき作品との違いについて、「あとがき」で次のように説明している。「『昭和歌謡大全集』という小説の登場人物の生き残りとその新しい仲間が福岡でテロを計画しているが、それより先に北朝鮮のコマンドが福岡を制圧してしまう、そういった構想の作品を十年くらい前から考えていた。だが、小泉首相の最初の訪朝以来、北朝鮮はメディアにおけるほとんど最大トピックスになって、中途半端な扱いができなくなった」（下、494 頁）。すなわち村上は、この作品には、執筆当時話題になっていた拉致問題とそれをめぐる社会的雰囲気²が反映されていることを、作品発表と同時に明確に表明しているのである。

ここで、この作品についてよく語られる点について確認しておく。この作品は全 24 章から成っており、そのうち 7 つの章が北朝鮮兵士の視点から書かれている。この点について、北朝鮮兵士という、日本にとっての他者の視点を取り入れたことにとりわけ注目し、高く評価している先行論は少なくない。たとえば、本格的な研究とはいえないが、小説家の星野智幸と松浦寿輝の評言を紹介したい。「最初に圧倒されたのは北朝鮮のコマンドの視点で書いたという点です。『半島を出よ』は後日談の三章を除くと全部で二十一章あるんですけど、数えたら三分の一にあたる七章が北朝鮮兵士の視点になっているんですよ。そこまで踏み込んで書くかどうかということは、小説を書く上ですごく重要なことだと思うんです」²（星野）、「他者として北朝鮮を日本にぶつけようと考えたとき、きっと彼は「他者を書く」というのはどういうことかを徹底的に考え抜いたんだと思います。それはこちら側からの発話だけでは駄目なんだと。向う側からの視点が絶対に必要で、その無理なことをやるほかないと考え、こんなこと無理だという思いに

耐えながら最後まで書き続けたということなんですよ」³（松浦）。また、作品の解説を担当した島田雅彦も「この作品が画期的なのは、私たちとは別世界に暮らす他者である北朝鮮のコマンドを語り手に仕立て、その内面を語らせているからである。まさに内輪のルールがまったく通じない相手の言葉に踏み込んでいる」⁴と評価している。

一方、高和政は星野と松浦の発言をとりあげ、それへの反論として「果たして『半島を出よ』は他者を描き得ているのか」⁵と問いかけている。高の主張を引用して確認したい。

単純に言って、他の視点人物と同じような感覚を抱いている「北朝鮮のコマンド」には、松浦寿輝がいうような「『他者を書く』というのはどういうことかを徹底的に考え抜いた」跡を見出すことははなはだ難しいのである。福岡に侵入して武力占拠をおこない、日本人たちの「生きものとしての手応えのなさ」に違和感を抱く「北朝鮮のコマンド」たちは、日本国家・社会の〈平和ボケ〉を際だたせる役割を担わされているといえる。だから、その役割を果たすのであれば、日本に攻め入るのは実は「北朝鮮のコマンド」でなくてもよかったといわざるをえない。ではなぜ、この物語においては「北朝鮮のコマンド」でなければならなかったのか。それは、結局のところ「北朝鮮なら、せめてきそうだから」というあまりにも皮相な「想像力」による判断にすぎないのではないか⁶。

高の批判の要点は、北朝鮮兵士が、日本人の登場人物には分からない、共有すらし得ないような独特の視点を持たないゆえに、その兵士の出現が単なる日本における北朝鮮敵

視の反復にすぎない、ということであろう。高はその根拠として、福岡を制圧する作戦を担う作戦隊長キム・ハッス、北朝鮮コマンドたちに抵抗するイシハラ・グループの少年たち、官房副長官を罷免された山際清孝、そして西日本新聞社会部記者である横川茂人の4人による4つの引用を示している⁷。しかし、この作品において重要なのは、北朝鮮コマンドは日本国家・社会の「平和ボケ」を際立たせる役割を担うのみならず、北朝鮮人自身のことを語ってもいるということである。なかでも注目すべきは、日本人には理解しがたい、過去に侵略を受けた朝鮮半島の人間としての歴史認識を語らせている部分である。この点は高の論文では指摘がない側面であり、北朝鮮兵士の視点が日本と北朝鮮の間に横たわる加害と被害の歴史をどのように喚起するか、という点でも興味深い。

さらに目を引くのは、この作品が、戦前に侵略者として朝鮮半島を経験した日本人医師を作中に登場させ、北朝鮮兵士たちの歴史認識を相対化しようとする点である。

『半島を出よ』についてのもっとも本格的な研究である石川巧の「侵略者は誰か——村上龍『半島を出よ』」⁸はまさにその点を主眼としている。石川は、「この作品が本当に問題化しているのは、〈他者〉である北朝鮮と〈わたし〉＝日本の対立ではなく、〈他者〉である北朝鮮にまなざされることで忘却していた記憶をよびさまされる日本という主体のありようである」⁹と述べて、歴史認識の問題と作品の構造には関係があることを論じている。

以上の議論を念頭においた上で、本章では『半島を出よ』について頻繁に論じられる北朝鮮兵士の視点問題を中心に据えながら、北朝鮮兵士と日本人それぞれの視点人物が語る過去の歴史認識を検討する。そして、作品が出版された2005年当時の日本の状況、

とくに日本人拉致問題や歴史修正主義を中心に、『半島を出よ』における他者の視点と北朝鮮表象の問題を論じることとする。

第2節 北朝鮮兵士たちの歴史認識——過去の日本の侵略に対する怒り

『半島を出よ』における北朝鮮兵士たちの歴史認識は、日本の朝鮮半島侵略と深く関係づけられている。具体的には壬辰倭乱¹⁰（1592年－1598年）と植民地支配（1910年－1945年）が挙げられる。そして、日本の侵略による苦痛の記憶は、兵士たちの日本に対する敵愾心を掻き立て、彼らの福岡侵攻を、彼らの立場から見て道徳的に正当化する役割を果たしている。たとえば、金正日政治軍事大学の日本語教授で、反乱軍を名乗る9人のコマンド部隊を指揮監督するパク・ヨンスは、福岡侵攻作戦の歴史的意義を「南朝鮮の同胞が傷つくこともないし、国土が荒れることもない。戦場は海の向こうにある。人々の血が流れ、街が破壊されるのは、かつて祖国を統治し、数えきれない民を強制連行し、祖国が分断する原因を作った鬼の国日本だ」（上、54頁－55頁）と述べる。このように、パクは、はじめて日本を戦場に変えることの興奮を隠さない。日本に支配された植民地期朝鮮の記憶は、南朝鮮までを敵ではなく「同胞」として包み込み、「祖国」（朝鮮半島全体）対日本という図式を形成している。また、政治将校であるカン・ドッサンは、作戦に挑む兵士たちに対し「君たちは、あえて半島を出て、その昔朝鮮の陶工や労働者が強制連行された島である九州を、理想の国に変えるのだ」（上、121頁）と励ましている。つまり、半島を出て日本の九州を侵攻することは、豊臣秀吉の朝鮮侵略の歴史まで遡る、朝鮮民族にとっては避けて通れない宿命であることを強調

しているのである。以上の引用を念頭におけば、『半島を出よ』という作品のテーマの一つが、歴史をめぐる北朝鮮兵士たちと日本人との間の記憶の戦いであることは明らかである。

さて、ここでパク・ヨンスが日本人を鬼に例えたレトリックに注目したい。このレトリックは、実際に福岡に上陸するコマンドたちが歴史認識を語る箇所に繰り返し表れる。具体例として、兵站担当女性将校であるキム・ヒャンモクと北朝鮮側警察隊隊長チェ・ヒョイルに関する記述を引用する。

キム・ヒャンモクの目には憎悪があった。キム・ヒャンモクの祖父は若くして抗日ゲリラに加わり、普天堡の戦いで捕虜になって日本軍に拷問を受け殺されたそうだった。日本人は鬼のような人間だと父親に聞かされて育った。キム・ヒャンモクは初めて見る敵国の大都会を前にして憎悪をかき立てているのだろう。大きな瞳に福岡の夜景が映っていて、瞳から火花が散っているように見えた。（上、132頁-133頁）

福岡を制圧したら日本の警察の武装を解き全員を処刑するものだと思っていた。幼いころ、祖母がよく話してくれた。一九四五年八月十五日、解放された朝鮮人民はまず駐在所を襲って日本人警官を殺したそうだった。朝鮮語で歌をうたいながら農機具を手にして村の全員で駐在所を襲ったのだと、祖母は何度もその話をしてくれた。駐在所の警察官は日帝末端の手先として直接朝鮮人民を支配蹂躪したのだ。物心つく前から、日本人は南朝鮮人よりアメリカ人より悪い鬼のような人間たちだとずっ

と教えられてきた。チェ・ヒョイルにとって警察官は日本人の象徴だった。（上、389 頁－390 頁）

上掲の一つ目の引用において、キム・ヒャンモクは、祖国の独立のために^{ボチョンボ}普天堡戦闘¹¹で戦った祖父の死を想起している。自分の祖父が戦闘中に日本軍の捕虜になり、拷問によって殺害されたキム・ヒャンモクにとって、普天堡の戦いは、祖国の独立や自由を勝ち取るための崇高な戦いであり、祖父は帝国主義の犠牲となった英雄である。そのような英雄を殺した日本人に抱く感情は、まさに「鬼のような人間たち」、つまり悪魔的存在に対する感情であるのはやむを得ないところがある。

二つ目の引用において、チェ・ヒョイルは、幼いころから教わった過去の歴史を思い出しつつ、いわばその歴史的暴力に復讐するため、暴力的な福岡統治を夢見る人物として描かれている。チェは、1945 年に日本の支配から解放された朝鮮で、朝鮮人たちが日本人の駐在所を襲撃し、警察官を殺害していたという過去をよみがえらせ、いわばそれを福岡において繰り返そうとしているのである。そして、こうした行為が正当化されるのは、チェによれば、日本人は人間性を失った「南朝鮮人よりアメリカ人より悪い鬼のような人間たち」だからである。

以上の引用の語り手である北朝鮮軍人たちは、過去の日本の加害に対する怒りと、過去の朝鮮をその被害者とみなす認識に立つ点で一致している。いいかえれば、現在の日本人にとって受け入れがたい歴史認識を語る、いわば日本社会における他者として語っている。彼らの歴史認識を気持ちよくそのまま受け入れる読者は少ないだろうが、『半島を出よ』が出版された 2005 年前後の日本の言説状況において、既存の北朝鮮体制や

北朝鮮の人々全体に対して簡単に「悪魔」や「テロ国家」などという蔑称¹²がつけられて非難されていたことを念頭におけば¹³、北朝鮮兵士たちの歴史認識を伝える言葉は、実は日本人の見方が一方的に偏っていることを日本人が認識させられる機会を生み出しているともいえるだろう。先に述べたガン・ドッサンの場合も、九州への侵攻の動議づけのため、壬辰倭乱という朝鮮民族にとっての被害の記憶と今回の作戦とを繋ぐことで、この作戦を正当化している。彼らの言葉だけを読むならば、北朝鮮の（日本側から見れば侵略）行為を、両国の歴史を念頭において、当然起こりうることだという結論も導き出せるだろう。しかし、彼らが歴史認識について語っている時点において、福岡で繰り広げられている高麗遠征軍による制圧と統治が、過酷な暴力を伴うものであることは重要である。

福岡市の制圧に成功した高麗遠征軍が行なう占領統治は、福岡の人々を死の恐怖に襲われる弱い市民という立場へと追いやり、圧倒的な暴力にさらされた被害者という日本人としての自己表象を作らせるものである。そして、暴力によって促された日本人の新しい自己認識は、北朝鮮人という他者の歴史に根ざした被害者としての意識とそれともなう他者の訴えかけを無力化させ、むしろ自分のものとして取り込む。北朝鮮兵士の、日本による朝鮮への侵攻という歴史認識は、いつのまにか復讐の理念を正当化するキーワードのみになってしまうのである。

以上述べた点について、作品の展開に従って確認する。最初、コマンドたちは、ノコノ島に上陸した際にパイパイヤを売る親子を殺害する。その後、福岡ドームでは銃や RPG（ソ連製の携帯型対戦車ロケット弾）で観客を脅かすことでドームの制圧に成功する。ドーム占領直後には、九州警察局長の沖山を拷問して瀕死に至らせる。また、占領統治

の財源を確保するために、政治犯や経済犯を正当な法律的根拠なしで強制連行したり、裁判なしに射殺したりする。決定的な事件としては、高麗遠征軍の本部であるシーホークホテルの地下駐車場に臨時収容所を造り、連行してきた日本人を残酷な手法で拷問する。この時点において、(かつての)加害者(日本)と(かつての)被害者(「祖国」朝鮮半島)の位置関係が逆転する。つまり、北朝鮮は巨悪であり、北朝鮮側の歴史認識は巨悪を擁護する免罪符の意味をもつことになる。これを違う立場から考えるとしたら、平和で善良な日本人であるはずの福岡市民が犠牲になったという図式が成立することになる。

第3節 被害者＝日本人としての自己形成——作中におけるメディアの機能

第2節で論じた、被害者と加害者の立場の逆転という問題を、作品発表当時の日本の社会的背景に照らし合わせてみれば、この逆転が孕むメッセージが理解できると考えられる。なぜなら、この小説が設定している時間的背景は2011年という(2005年からみた)近未来であるが、その2011年においても、北朝鮮による拉致問題が完全に解決されないままであり¹⁴、平壤宣言以後、日本に形成された北朝鮮に対する攻撃的世論が持続する状況下であるからだ¹⁵。つまり、この小説における2011年は、小説が実際に刊行された2005年の状況の延長線上にあり、それゆえこの作品は2005年前後の状況に即して読むことが可能である。

まず、この作品における被害者としての日本人像の生成は具体的にどのようなプロセスで行われるのかを確認したい。第一に、メディアによる恐怖の大量生産に注目したい。

この作品には、テレビ（NHK）や新聞（西日本新聞社）など、メディアに関連した人物の活躍が目立つが、とくにテレビによる生中継の威力は注目に値する。作中では高麗遠征軍による暴力や殺害の映像が NHK の中継で全国に流される¹⁶。引用はその描写部分である。

NHK のテレビカメラは、インターフォンで話す警官や、三カ所で待機する高麗遠征軍警察隊員、それにマンションのベランダにいる人や野次馬を交互に撮影し、その映像は衛星とインターネット回線を経由して生中継されていた。（中略）その瞬間、マエゾノの左斜め後方にいたタツ・チョランがカラシニコフを構えると同時に坊主頭の男に向けて二発撃った。銃口からオレンジ色の火が噴き出すのが見えた。（中略）頬のあたりに貼りついたベタベタしたものを指で取り除いているうちに、横川は我慢できなくなり数歩歩いたとこでしゃがみ込んで嘔吐し始めた。（上、373 頁－375 頁）

福岡の統治を始めた高麗遠征軍は、風俗紊乱と不正金融取引の容疑で逮捕されたマエゾノを庇う坊主頭の男を銃で殺す。そして、その逮捕・殺害の過程を生中継するメディアは、さらに凄惨なシーンを全国に伝えてゆくことになる。作中では、福岡ドームでの電光掲示板の爆破場面、拷問された沖山の身体の悲惨な姿、暴力団幹部の消えた脳、大濠公園の銃撃戦や処刑式で飛び散る兵士の血などのイメージがカメラに映し出され、中継され、テレビをみる人々に恐怖と嫌悪感を呼び起こす様子が描写されている。そしてこ

うしたシーンに対する恐怖と嫌悪感から、高麗遠征軍に服従するしかない、無力で惨めな日本人という自己像が生み出されていくのである¹⁷。

実は、以上述べたほど凄惨なものではないが、メディアによる被害者意識の醸成は、北朝鮮による日本人拉致被害者問題においても見て取ることができる。次の引用は、小泉首相による日朝首脳会談（2004年）の報道に関する、社会学者の藤竹暁の評価である。

北朝鮮による日本人拉致問題が熱い注目の焦点となったのは、歴史的な事件として報道された日朝首脳会談の文脈からすると、“副次的な”テレビ中継の結果であった。日本の世論を顕在化させたのは、小泉首相の言葉でも、政府の方針でもなく、拉致被害者家族の表情と言葉であった。（中略）小泉首相が語る画面の下に、被害者家族の食い入るような表情が切り取り画面としてインサートされていたのが印象的であった。テレビ中継を見ている人々は、家族の表情に自分の気持ちをダブらせていたからである。（中略）日本人は小泉首相の言葉も、外務省の姿勢も、国会の審議もあてにならないことを、拉致被害者の表情と言葉から感じとった。拉致問題をめぐるテレビ中継が果たした大きな役割は、ここにあった。記者会見のテレビ中継は拉致問題に関する日本の世論を作り、その後の北朝鮮問題の展開を方向づけた。

（中略）好奇心から同情が生まれ、怒りがこみあげる。何とかしなければならないという気持ちが起きる。好奇心を強くかきたてられるからこそ、拉致問題を自分の身に引きつけて、さまざまなヒューマン・インタレスト・ストーリーを期待し、自分でも描いてみるができる。拉致問題は日本の家族問題となった¹⁸。

藤竹は、北朝鮮による日本人拉致問題が世論を喚起したことにおいて、テレビ中継が果たした役割を強調している。彼は切り取り画面としてインサートされていた拉致被害者家族の表情や記者会見のテレビ中継こそが、政治家や官僚にはできなかった世論の醸成を果たしたと評価した。それはテレビ中継を見ている人々が、拉致家族の表情に自分の気持ちを感情移入することで、はじめて世論として実体となったことを意味する。藤竹の議論を念頭におけば、『半島を出よ』において強調されていた、テレビによって中継される高麗遠征軍の凄惨な行為に対して日本人が抱く感情の形成にも、同様のプロセスが働いているといえるだろう。それは被害者としての共同体意識が形成されるということである。

第二の特徴は、家族という絆の強調である。家族同士の団らんを破壊され、愛する娘や息子、そして親のために何もできない挫折感や同情の気持ちは、人々の間に怒りを生みだす。とくに北朝鮮による拉致事件は日本人に家族への思いを想起させ、いわば拉致問題は日本の家族の問題になったのである。この作品における被害者意識においても、家族を通じた自己認識への注目は著しい。以下の引用は、登場人物たちが家族のことを思い出す場面である。

ナチスの収容所で反抗ではなく発言しただけで射殺されるユダヤ人女性を描いた映画があった。ナチスと同じように、暴力によってあらゆるものを奪われてもなお生きようとする人間の本能を利用して高麗遠征軍は収容所を支配していた。収容者の中に家族がいたら自分はどうしただろうか。浴衣の隙間から皺だらけの乳房が見え

たあの女が、もし妻や母親だったら自分はどうしただろうか。きっと、何らかの方法で抗議しなくてはいけなかったのだ。（下、241 頁）

官房長官の重光卓は旧民主党保守派の中堅議員で、日本緑の党結成のときは自民からの脱党者との連絡役になった。重光は岡山から新幹線で戻ってきて雨の東京駅でメディアの大群に見つかり捕まってしまった。総理と連絡がとれていないからと、最初テレビカメラを振り切ろうとした。記者たちもさすがに切れて、逃げるな、と何人かが大声を出した。逃げるな、福岡の人質の家族の身になってみろ。報道陣に囲まれもみくちゃにされ、テレビカメラのレンズの縁で額を切り、雨と血で顔を濡らした重光は、福岡のみなさまの生命の安全を第一に考え、これから内閣危機管理センターで対策を協議します、と答えて SP に守られながら車に乗り込んだ。（上、224 頁）

最初の引用は医者黒田の視点からの言葉だが、彼はシーホークホテルの地下駐車場に作られた臨時収容所で目撃した収容者の姿を見て、自分の家族のことを思い出す。その際、死に瀕している収容者と自分の家族を同一視することによって、暴力に対する怒りや無力感、同情、恐怖が折り混ざった複雑な感情を極大化するのである。そして北朝鮮の兵士たちはナチスになぞらえられ、日本人はいわばナチスに迫害されるユダヤ人であるかのように表象されることとなる。二番目の引用においては、官房長官である重光が、記者たちに囲まれ、「福岡の人質の家族の身になってみろ」と非難されることが注目に値する。これらの引用において強調されている「家族の身になって」みるということは、

高麗遠征軍による福岡市民の拉致・殺害・監禁・拷問という悲惨な事件が、個人の問題を超え、まずは議論の余地のない結びつきとしての血縁家族の危機へと直結する問題として、そしてそこからいわば隣人をも含めた日本全体の問題へその性格を変えていくことを表している。

ここで改めて繰り返すならば、日本社会の中に他者として出現した北朝鮮兵士のもつ歴史認識は、日本人に過去の加害の記憶を喚起させる可能性を孕むものだった。だが、作品の全体をみるならば、北朝鮮兵士たちはむしろ加害者の影を負ってしまっている。そしてこの転換は、現実の北朝鮮による日本人拉致問題でみられた事態と同様に、メディアの介在によって生じたのである。この小説は、星野・松浦、島田や石川といった先行論者たちが示唆していたように、他者の視点を取り込むという試みではあるものの、拉致問題に関して形成された日本内のネガティブな北朝鮮言説をなぞっているのであり、それを乗り越えているとは言いがたいのである。

第4節 植民地近代化論と戦争の記憶という矛盾した歴史認識

日本における北朝鮮言説に関する状況において、拉致問題が示唆するもう一つのポイントは、歴史的責任の免罪である。次の引用は大塚英志の論考である。

近代史の中で日本が「北朝鮮」という国家が生まれる要因として作用した役割はあまりに根深い。だが「拉致」問題は皮肉にも「拉致被害者の存在」によって「北朝鮮」と日本との加害者／被害者の関係を反転させてしまった。（中略）この「被害

者」国家観への転換は実は「歴史」の延長の上現在をみることを回避してしまうことにつながっている。フジテレビの解説委員が「北朝鮮が言う日本の戦争責任は過去の問題で現在の問題ではない」と語るのを耳にしたことがあるが、「拉致」問題はこの国の中で朝鮮半島への歴史的責任という立場の僕たちを免罪するものとして作用しようとしている。（中略）「北朝鮮」への被害意識を根拠とした感情が「強者としての被害者」というどうにも歪んだ国家像として表出している。だからこそ「護身」としてのナイフよろしく「北朝鮮」の脅威に備えるための核武装さえ今やフライング気味に語られる¹⁹。

大塚は、拉致事件によって日本が「被害者」国家に転換したとみている。そして被害者という立場が現実の北朝鮮問題を歴史的観点からみることを妨げると指摘している。

『半島を出よ』においても、まさに「「歴史」の延長の上現在をみることを回避」する傾向は顕著である。それは日本と朝鮮半島との過去の歴史について言及する日本人がテキスト全体を通してたった一人しか見られないことから分かる。しかもその一人は、過去の侵略の歴史が肯定的な側面ももっていると述べる人物である。

作中で過去の朝鮮半島と日本の歴史を語る唯一の日本人世良木は、旧日本軍の少年兵として戦争に参加し、今の北朝鮮地域に駐屯していたという設定になっている。彼は植民地朝鮮の近代化や戦争責任に対する見解を次のように述べている。

笑いが収まったあと、世良木は真剣な表情になって、ぼくが付き合っていた下士官の中には立派な人間がいたよ、と言った。彼らは各地の高等工業学校や工学院など

で化学や工学を勉強していてね。優秀だったし人格的にも優れていたんだ。よくね、勉強ばかりすると頭でっかちでろくな人間にならんなどという人がいるが、そんなことは大嘘だと思うね。知識や技術がその人の人格を作るんだ。座禅したり滝にうたれたりするくらいなら、自然科学や哲学の本を一冊でも読んだほうがいいんだよ。当たり前なことだが、半島や大陸で全部の日本兵がひどいことをやったわけではない。（下、192頁）

（引用者：キム・ヒャンモクは）世良木先生はどうして処刑式のときに抗議しましたか、とかすれ声で聞いた。（中略）昔のことだけどね、と世良木が話している。戦争中、あなたの国で何度か処刑を体験したんだ。ぼくたちは、あなたの国に対して悪いことばかりをしたわけではないが、良いことばかりしたわけでもない。道路やダムや鉄道や工場を造ったり、灌漑工事や干拓をしたが、ひどいこともたくさんした。私は陸軍の少年兵で、処刑を止められなかったし、止めようとも思わなかった。つまりそれが悪いことだと思わなかったんだ。（中略）わたしは十五歳だった。世良木はそう言っている。何も知らなかったんだ。悪逆非道というより、無知だったんだな。それで、無知ほど恐ろしいものはないんだね。（下、462頁－463頁）

これらの引用で明らかだが、少年兵として朝鮮半島に駐屯していた経験をもつ医者の子世良木は、日本の侵略戦争や植民地支配の過程で行われたすべてが悪いことばかりではないと述べている。ここで注意したいのは、彼の「道路やダムや鉄道や工場を造ったり、灌漑工事や干拓をした」という主張である。これは 1990 年代の日本において勢力を増

してきた歴史修正主義者のそれと似ているのである²⁰。太平洋戦争がもたらす合理化や植民地近代化論は²¹、日本による朝鮮半島（韓半島）での植民地支配を肯定するものであり、歴史修正主義の主張の核心である。さらに、世良木は「当たり前のことだが、半島や大陸で全部の日本兵がひどいことをやったわけではない」と言いながら、戦争中に日本兵が犯した残虐行為の責任を、一部の兵士たちの個人の問題へと限定してしまっている。さらに、自分の「悪逆非道」な行為については、少年兵としては仕方ないことだったと言い逃れているのである。

ここで重要なのは、過去の日本の植民地支配や侵略戦争を肯定する北朝鮮兵士がいるということである。高麗遠征軍ハン・スンジン司令官の副官であるキム・ハッスは、過去の帝国日本が遂行した戦争を賛美し、植民地支配が北朝鮮の近代化に貢献した内容を高く評価している。以下はその引用部である。

共和国の知識層は日本に対し基本的に憎悪を持ち、そして心の片隅ではかつて西欧を敵に回して堂々と戦った国という倒錯した敬意を抱いている。その複雑な思いはおそらく中国でも南朝鮮でも、あるいはベトナムやインドネシアなどの他のアジアの国でも同じではないだろうか。共和国の代表的な工場や道路や橋やトンネルは占領時代に日本が建設したものだ。清津にある大製鉄所も、咸興の化学肥料工場も、あるいは中国国境の豆満江に架かる橋のほとんども日本によって建設された。おそらく戦争で傷ついた東アジアの民衆の共通した感情として、憎しみとともに、内臓を針で刺されるような認めたくない敬意を併せ持っている。（上、153頁）

ビルマやインド、南太平洋からシベリアまで兵を送り、アジアのみならず全世界を震撼させた日本はどこにあるのかと我慢ならなかった。（上、156頁）

上掲の引用でわかるように、キム・ハスは共和国の知識層が日本に対して憎悪と敬意を併せもっており、さらに帝国列強の侵略にさらされたアジアの国々も同じであると述べている。キムによれば、彼らが日本に敬意をもつ理由の一つは、日本がアジアの国としては唯一西欧と戦えたという過去の日本の強さである。もう一つは植民地近代化論の核心たる、近代的産業インフラ建設を評価するもので、日本が植民地の経済や産業の発展に貢献したという主張である。約言すれば、軍国主義日本の侵略戦争の被害者であった北朝鮮側が、自ら加害者の行為を正当化しているのである。この場面において、北朝鮮兵士たちの、朝鮮半島（韓半島）と日本との複雑かつ悲劇的な過去の歴史についての認識が、キム・ハスのような者による認識に置換えられて、北朝鮮兵士たちの声、その歴史認識が、日本社会が受け入れたくない、他者の声ではなくなってしまうのである。

第5節 おわりに

以上、北朝鮮兵士の視点で書かれた歴史認識に焦点をあて、日本社会にとっての他者の視点が、日本の北朝鮮関連言説状況を解体する役割を果たしているかどうかを考察した。北朝鮮兵士の視点や発言は、二つの理由で日本の定型化した言説状況の解体に失敗したといえる。

第一の理由は、日本社会において他者である作中の北朝鮮兵士たちの歴史認識が、日本人の被害者としての自己表象を作らせ、他者の立場を代弁する声としての力を失ったからである。日本にとって他者のものである高麗遠征軍の歴史認識は、メディアの力によって脱力化され、北朝鮮兵士の加害者性が強調されてしまっているのである。

第二の理由は、朝鮮を植民地支配し、アジアで戦争を行った日本の負の歴史を肯定的に評価する歴史修正主義的観点をもつ日本人と、本来は日本社会にとって他者である北朝鮮兵士の歴史観が一致してしまう場合があるため、北朝鮮兵士の視点は必ずしも日本社会にとっての他者の視点ではないからである。

北朝鮮に対する日本の言説状況を意識して書かれた『半島を出よ』において、日本人は、過去の日本が朝鮮半島全体に及ぼした暴力を自身の記憶から抹消し、被害者として、あるいは朝鮮近代化の貢献者としての自画像をあらためて獲得するのである。

【注】

- ¹以下は、和田春樹・高崎宗司編『北朝鮮本をどう読むか』（明石書店、2003年）を参照しながら、この論文の筆者が調べた情報も加えた、北朝鮮を扱った戦争小説の目録である。
- ・相澤遼二郎『クライシス——朝鮮半島の危機』コミックインターナショナル、1999年。
 - ・麻生日岳『北朝鮮・日本侵攻』鳥影社、2003年。
 - ・上田信『米韓連合軍 vs 北朝鮮軍——第2次朝鮮戦争』日本出版社、1994年。
 - ・神浦元影『北朝鮮最後の謀略』二見書房、1994年。
 - ・砧大蔵『北朝鮮ゲリラ侵攻——自衛隊特殊部隊ブラックアウルズ』コスミック出版、2003年。
 - ・霧島那智『朝鮮日本侵略』コスミック出版、1999年。
——『朝鮮核侵略』コスミック出版、2007年。
 - ・草薙圭一郎『極東大戦——北朝鮮暴発』コスミック出版、2000年。
——『北朝鮮大侵攻』コスミック出版、2004年。
 - ・志茂田景樹『金正日宣戦布告——北朝鮮崩壊ス』飛天出版、1999年。
——『北朝鮮大崩壊！！——長編戦記シミュレーション・ノベル 上下』コスミック出版、2009年。
 - ・柘植久慶『北朝鮮軍ついに南侵す！ソウル陥落・激震の日本』PHP研究所、1999年。
 - ・森詠『日本朝鮮戦争』（全15巻）トクマ・ノベルズ、1993年—1997年。（のち全11巻徳間文庫）
——『新・日本朝鮮戦争』（全4巻）トクマ・ノベルズ、2009年—2010年。（のち文庫）
 - ・橋本純『半島有事——北朝鮮空爆指令』アスペクトノベルズ、1999年。
 - ・深田祐介『高麗奔流』文藝春秋、1997年。
- ²松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史「鼎談 村上龍『半島を出よ』を読み解く」『文学界』59巻7号、文藝春秋、2005年7月、124頁。
- ³同上、134頁。
- ⁴島田雅彦「解説 日本が半島だった頃」『半島を出よ』（下）幻冬舎文庫、2007年、590頁。

- ⁵高和政「俗情の再生産——村上龍『半島を出よ』の「想像力」〈特集〉国家の変貌)』『前夜』1期7号、2006年春、129頁。
- ⁶同上、132頁。
- ⁷同上、129頁—131頁。
- ⁸石川巧「侵略者は誰か——村上龍『半島を出よ』」松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、2007年、168頁—206頁。
- ⁹同上、183頁。
- ¹⁰文禄・慶長の役のこと。
- ¹¹1937年6月4日、金日成が率いる東北抗日聯軍第六師90名が、鴨緑江付近の普天堡地域の駐在所を襲撃した事件。(和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992年、184頁—186頁)。
- ¹²2002年9月以降になると、西岡力『テロ国家・北朝鮮に騙されるな』(PHP研究所、11月)や青山健熙『北朝鮮という悪魔の正体—崩壊寸前の「金王国」の驚くべき国民生活実態が初めて明かされた北朝鮮秘話集』(光文社、12月)など、タイトルに悪魔、テロという言葉を使った本が出されるようになる。(和田春樹・高崎宗司編、前掲書、232頁)。
- ¹³たとえば、ある保守系雑誌において、舛添要一は次のように発言し、日本人の認識変化を促してもいる。「アメリカと価値観をすべてを共有することはできないという気持ちもわかります。独裁体制を許さないというのは、アメリカの建国の理念であり、それはイギリスで迫害されたピューリタンが、新しい国を作ったときの宗教的信念でもある。(中略)彼らにとってサダム・フセインや金正日は、「悪魔の使い」であり、それを叩くことは神の栄光を顕かにすることですから、周りがなんと言っても止められないわけです。私のように、八百万の神でいいというタイプは、とてもついていくことができません(笑)。そこまで価値観を共有しろとは言いませんが。ただ、その一歩手前までは踏み込むべきだと思います。」(袴田茂樹・舛添要一・村田良平「独裁・テロと戦う決意をせよ——イラク・北朝鮮さし迫る危機・日本の選択」『諸君!』35巻4号、文藝春秋、2003年4月、45頁)。

- ¹⁴「だが日本では拉致事件が解決していなかった。拉致被害者の中で安否のはっきりしない人がまだ大勢だ。また北朝鮮がどこかに核弾頭を隠し持っていていつでも日本を攻撃できるのだという世論も根強かった。」（上、280頁）。
- ¹⁵「総連は一世の指導者がことごとくいなくなったあとその性格を変化させております。若い世代の多くが日本人と同じような意識を持つようになり、とくに、平壤宣言以後、拉致事件をめぐる世論の攻撃に遭って祖国への忠誠心を失いかけていますが、要するに、いつも同志が言っておられるように、犬に育てられたオオカミは犬になる、ということであります。」（上、55頁）。
- ¹⁶「ドーナツ型の円卓の内部中央のテレビモニターに NHK の中継映像が映っている。破壊された電光掲示板からはまだ煙がでているが」（上、186頁）、「沖山は二人の高麗遠征軍兵士に後ろ手に縛られ、両脇を固められながら、収容施設に引き立てられた。NHK 福岡がその始終を撮影した。」（上、251頁－252頁）。
- ¹⁷「情報調査室で驚きと恐怖の声が上がった。福岡ドームを占拠したゲリラがロケット弾で球場の電光掲示板を破壊したのだった。NHK のアナウンサーが、ロケット弾が発射され福岡ドームが破壊されました、死傷者がいないか心配です、と興奮して叫んでいる。バックスクリーンの左横から黒煙が上がり、無数の細かい火花が散っている。一部の観客がアップになったが、泣いている子どもや女性もいて、まさに茫然自失という表情で黒焦げになった電光掲示板を眺めていた。」（上、180頁－181頁）。
- ¹⁸藤竹暁「北朝鮮問題をめぐる政治、大衆感情、そしてメディア——特集「9・17」から1年」『月刊民放』33巻9号、コーケン出版、2003年9月、18頁－19頁。
- ¹⁹大塚英志「「被害者という強者」化する日本——保守論壇誌の「責任」と「成熟」のために（特集「北朝鮮」の語られ方）」『論座』103号、朝日新聞社、2003年12月、102頁－103頁。
- ²⁰高橋哲哉によれば、1990年代後半の日本において、「自虐史観」批判を掲げて登場し、「日本軍〈慰安婦〉問題は国内外の反日勢力の陰謀」「南京大虐殺はなかった」とまで叫ぶにいたった勢力が、「日本版歴史修正主義」とよばれるようになった。（高橋哲哉『歴史／修正主義』岩波書店、2001年、1頁）。

²¹ ユンゴンチャ尹健次によれば「経済発展を軸とする近代化の連続性という主張は、実際には植民地支配は悪ではなかったという歴史修正主義者の言説に回収されてしまう危険性を孕んでいる」という。

（尹健次「韓国に「修正主義」はあるのか——植民地近代化論の意味」歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』青木書店、2000年、41頁）。

結章

本論文は、1960年代から2000年代の北朝鮮表象をとらえるために、金達寿、松本清張、小田実、伊藤輝夫、村上龍のテキストを分析し考察してきた。以下では、その具体的な意義や成果について各章ごとに述べることにする。

第1章では、帰国事業が推進されていた時期の北朝鮮が金達寿の二つの作品「日本に残す登録証」と「日本人妻」においてどのように表象されていたかを論じた。帰国事業をめぐって北朝鮮を「楽園」として位置づける言説は、在日朝鮮人をはじめ日本人妻たちにも民族差別のない「祖国」、経済的に豊かな生活が待っている「新しい社会」として北朝鮮を想像するように働きかけていた。とくに、彼は多数の新聞・雑誌といったマスメディアを通して北朝鮮への「帰国」を奨励する寄稿活動を行い、帰国事業を背景とした小説を書いていた。しかし、「日本に残す登録証」においては、在日朝鮮人が帰国すべき、希望に満ちた場所としての北朝鮮像を提示しようとする姿勢が反映されなかった。本論文では、金達寿がそのように北朝鮮を描写した理由を、在日朝鮮人が北朝鮮に帰国しなくても安定的な生活が営為できる日本の状況について描いているところから探って確認した。「日本に残す登録証」は、確かに帰国事業を背景とし、北朝鮮に行こうとする呉青年の姿を描いている。しかし、単純に帰国を奨励する帰国事業プロパガンダとして把握する前に、「日本に残す登録証」が呉青年の帰国へのためらいを孕んでいる

ことに注目すると、「日本に残す登録証」における北朝鮮表象が、当時の帰国事業奨励という時代的な状況について疑問を抱いていた金達寿の内面の葛藤から起因していると判断することができた。

次に、帰国事業における北朝鮮「幻想」について本格的に取り組んでいる「日本人妻」をとりあげ、「民族差別のない祖国」と「失業者のない新しい社会」という表現を通して北朝鮮が表象されていることを確認した。劉・芳江夫婦が帰るにふさわしい理想の地であったに違いない北朝鮮であったが、日本人妻の芳江はその北朝鮮をただ肯定するのではなく、判断を留保し、疑念をいただくことで絶対化することはなかった。むしろ、一定の距離を保ち、夫と息子がその距離を失い「帰国」を単に喜ぶ場面では「さびしい気さえする」のである。そしてそのような行為は、北朝鮮「帰国」へのためらいであり、帰国事業言説ともいうべきプロパガンダに対する保留として機能しているといえる。

「日本人妻」という作品が帰国事業を肯定する作品であるかどうかは別として、この作品の細部には帰国事業における北朝鮮に対する不安と疑念、「帰国」に対するためらいが書き込まれているのである。つまり、マスメディアや作品において基本的には帰国事業と北朝鮮を肯定する金が、作品の細部では必ずしも肯定ばかりはしていなかったということである。

金達寿は、現実世界では帰国事業のプロパガンディストとして活躍したが、文学の世界では帰国事業が助長した「楽園」幻想に疑念を持ち、さらには、「帰国」をためらうかのような人物を登場させることによって、彼の作品は間接的にはあるが、楽園として表象されていた北朝鮮像を保留するアプローチとして評価できると考えられる。

第2章では、松本清張の『北の詩人』が示した、謎としての北朝鮮という側面を論じた。「謀略朝鮮戦争」から『北の詩人』に至る過程の中で、松本清張の関心は、戦争そのものからその戦争の背後で生きていた「人」に移っていた。「人」をとらえることで朝鮮戦争の内実を把握しようとした松本清張は、詩人であり、共産主義者、時代の激浪に流される知識人という姿をあわせもつ林和に注目した。

連載「北の詩人」では、林和はアメリカによって復活させられた戦前同様ともいうべき植民地主義に苦しめられると同時に、みずからの「詩」作品を通じて自分の内面の弱さと熾烈に戦う闘士としての両面をもつキャラクターとして描かれた。林和がそのようなキャラクターをもつ理由は、戦争の背後に隠された人間の姿を描くことで、アメリカの「暴力」を暴き出そうとした松本清張の意図が反映された結果であるといえる。しかし、結局のところ、この作品の単行本において、林和は、苦しみ破滅してゆくだけの存在になってしまう。そして北朝鮮は、資料を元にした徹底的な検証と事実の解明を得意とするこの作家にとってさえ、「謎」として在り続けることになる。この「謎」としての北朝鮮を、本論文では『北の詩人』単行本テキストにおける林和の裁判記録への書き加えを通じた、松本の北朝鮮表象の実践として提示した。すなわち、北朝鮮の閉鎖性が表象されていると結論づけたのである。

第3章では、小田実の北朝鮮訪問記『私と朝鮮』、および『「北朝鮮」の人びと』における北朝鮮表象の問題を論じた。反米主義者であり、自由な思想をもった小田実は、北朝鮮の招待を受けて北朝鮮に行った自分の立場を、比較的冷静に認識していたといえる。小田実は、自分の北朝鮮訪問が北朝鮮政府と朝鮮総連によって仕組まれたお仕着せ旅行であることを認識していながらも、制約された条件の下で北朝鮮の人々の生活の実

態に接近しようとした。「おしきせ」旅行に基づく小田の紀行文には人々の表象に限界があった。

第4章では、伊藤輝夫の『お笑い北朝鮮』における、北朝鮮を表象する際の「ナナメに受け取る」姿勢について論じた。荻野アンナのいうところの「ナナメに受け取る」姿勢は、『お笑い北朝鮮』におけるジャーナリスティックな著述家の伊藤輝夫と彼が批判する「インテリ」とを区別するものである。しかし、「インテリ」による北朝鮮研究を批判する立場を取るこの作家自身こそ、新しい意味での「インテリ」であり、「インテリ」も伊藤輝夫も北朝鮮についてじっくり考えて丁寧に語る精神に欠けていることでは共通しているのである。ただし、「インテリ」が事実を事実のまま「ストレート」に言ってしまうのに対して、『お笑い北朝鮮』はそれをわざと「ナナメに受け取」って歪めながら誇張することによって、北朝鮮を笑いという消費の対象としてとらえているという意味において、新しいものであった。この意味において、『お笑い北朝鮮』は、それ以後に出現する北朝鮮という素材の娯楽化、具体的にいえば、北朝鮮をテーマとするライトノベルや大衆小説への移行過程において一つの始発点となったと位置づけられる。

第5章では、2000年代の日本において最大の話題の一つとなった北朝鮮問題を近未来小説の形式で書いた村上龍の『半島を出よ』を考察した。この作品が前面に打ち出した北朝鮮兵士の視点は、結局のところ日本人作家のそれを写しとったものであり、同時代の日本の文脈と決別して作品を書くことができない村上龍には、とうてい北朝鮮の人々の声を代表することができないという限界をむしろあらわにする結果となった。日本で「悪魔化」されていく北朝鮮表象の問題を乗り越えようと試みた作品である『半島を出よ』において、北朝鮮はそれがもつ他者性と固有の過去とを打ち消され、皮肉にも

北朝鮮という問題性そのものが不透明になってしまう。この小説はそのジレンマそのものを日本人読者につきつける作品となっているのである。

以上で論じてきたように、戦後日本作家による北朝鮮表象は各時代に求められた北朝鮮像に拮抗しながら、あるいは同化しながら存在してきた。5人の作家たちのテキストにおける北朝鮮は、常に確固たる一つの「北朝鮮」を指し示すことを拒否し、多様性を含むものでもあったといえる。北朝鮮表象は、完全な成功を遂げることなく、常に失敗におわるが、日本にとって自己認識と時代認識の試金石であり、どのように異質に思われても日本と密接な関係の存在としてあり続けるのであろう。

本論文は、これまでイデオロギー的に敵対的な関係にあり、憶測や想像を煽り立てられた閉じこもった国の人々とどう付き合うかあるいは、どのようにそうした人々を表象しうるのかという問題に根ざしている。それは、北朝鮮という対象のあり方を素直に受け止め、それを冷静に見極めることのできる力を日本はもっているかという問題提起でもあり、自己反省でもあるのではないのか。幻想や謎というような一面だけではなく人間を通して北朝鮮という対象をとらえようとする試みを模索しつづけることが要求されることは間違いない。

北朝鮮表象を通じて明らかになった日本にとっての北朝鮮の意味とは、隣国に対する日本の認識の枠組の一つを提示していることである。

主要参考文献一覧

凡例

- ・参考文献は原則として、「主要分析対象」と「その他の文献」に分けて並べ、「その他の文献」は「単行本」と「雑誌」に分けて並べた。
- ・本文と注で言及はされていても、直接引用または分析されていない文献については、この主要参考文献一覧には記載しない。
- ・著者もしくは編者の姓を五十音順に配列し、外国人著者の場合、姓、名の順に記載し、五十音順に配列した。韓国語文献に関しては単行本、雑誌の最後に記載し、著者もしくは編者の姓を五十音順に配列した。
- ・同一著者による複数の著書の場合、発刊年度が早い順に配列した。
- ・雑誌、学術誌などの巻号記号情報は、すべて「巻、号」（どちらか一方しかない場合は「号」のみ）に名称を統一した。
- ・主題と副題の間は「——」を挿入することで統一した。
- ・新聞記事は別途表記し、年度、日付順に並べた。

1. 主要分析対象

伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』コスモの本、1993年

小田実『私と朝鮮』筑摩書房、1977年

——『「北朝鮮」の人びと』潮出版社、1978年

金達寿『朝鮮——民族・歴史・文化』岩波書店、1958年

——「日本人妻」『金達寿小説全集 第2巻』筑摩書房、1980年

——「日本に残す登録証」『金達寿小説全集 第2巻』筑摩書房、1980年

——『金達寿小説集』講談社文芸文庫、2001年

松本清張「北の詩人」『中央公論』892号—905号、中央公論社、1962年1月—1963年

3月

——『北の詩人』中央公論社、1964年

——「日本の黒い霧」『松本清張全集 第30巻』文藝春秋、1972年

——「北の詩人」『松本清張全集 第17巻』文藝春秋、1974年

村上龍『半島を出よ』（上・下）幻冬舎、2005年

——『半島を出よ』（上・下）幻冬舎文庫、2007年

2. その他の文献

1) 単行本

- 石川昌『金正日書記——その人と業績』雄山閣出版、1987年
- 石坂浩一編『北朝鮮を知るための51章』明石書店、2006年
- 石田収編『北朝鮮の日本人妻からの手紙——金政権が続く限りこの悲劇は終わらない』
日新報道、1994年
- 李鐘元・木宮正史・浅野豊美編『東アジア冷戦編——歴史としての日韓国交正常化 1』
法政大学出版局、2011年
- 井上周八『現代朝鮮と金正日書記』雄山閣出版、1983年
- NK会編『北朝鮮Q&A100』亜紀書房、1992年
- 大高利夫『新訂 作家・小説家人名事典』日外アソシエーツ、2002年
- 大沼久夫『朝鮮分断の歴史——1945年—1950年』新幹社、1993年
- 小此木政夫編『北朝鮮ハンドブック』講談社、1997年
- 鹿島正裕『冷戦終結後の世界と日本』風行社、1997年
- 川口恵美子『戦争未亡人——被害と加害のはざままで』ドメス出版、2003年
- 川村湊『満州崩壊——「大東亜文学」と作家たち』文藝春秋、1997年
——『生まれたらそこがふるさと——在日朝鮮人文学論』平凡社、1999年
- 菊池嘉晃『北朝鮮帰国事業——「壮大な拉致」か「追放」か』中央公論新社、2009年
- 北九州市立松本清張記念館編『第二回松本清張研究奨励事業研究報告書』北九州市立松
本清張記念館、2001年
- 金賛汀『在日コリアン100年史』三五館、1997年
——『朝鮮総連』新潮社、2004年
- 金英達・高柳俊男編『北朝鮮帰国事業関係資料集』新幹社、1995年

- 木屋隆安『北朝鮮の悲劇——「金王朝」崩壊のシナリオ』泰流社、1986年
- サイド、エドワード・W、今沢紀子訳『オリエンタリズム 下』平凡社、1993年
- 信田智人『冷戦後の日本外交——安全保障政策の国内政治過程』ミネルヴァ書房、2006年
- 全富億『金日成・正日の北朝鮮——今どうなっているかこれからどうなるか』日新報道、1991年
- スズキ＝モーリス、テッサ、田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社、2007年
- スタインホフ、パトリシア、木村由美子訳『死へのイデオロギー——日本赤軍派』岩波書店、2003年
- 関川夏央『退屈な迷宮——「北朝鮮」とは何だったのか』新潮社、1992年
- 高崎宗司・朴正鎮編『帰国運動とは何だったのか——封印された日朝関係史』平凡社、2005年
- 高橋哲哉『歴史／修正主義』岩波書店、2001年
- 中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌——近代日本と他者をめぐる知の植民地化』新曜社、2004年
- 西尾幹二編『新しい歴史教科書「つくる会」の主張』徳間書店、2001年
- 日本経済新聞社編・衆議院内閣委員会専門員室編・日本国民年金協会広報部著『軍人恩給早わかり・戦後における恩給制度の変遷・国民年金二十年秘史——日本社会保障基本文献集 第26巻』日本図書センター、2008年
- 朴正鎮『日朝冷戦構造の誕——1945-1965 封印された外交史』平凡社、2012年

朴鐘鳴編『在日朝鮮人——歴史・現状・展望』明石書店、1999年

朴春日『近代日本文学における朝鮮像』未来社、1969年

樋口雄一『日本の朝鮮・韓国人』同成社、2002年

防衛省防衛研究所編『朝鮮戦争の再検討——その遺産』防衛省防衛研究所、2007年

許南麒編訳『朝鮮はいま戦いのさ中にある——詩集』三一書房、1952年

松本常彦・大島明秀編『九州という思想』花書院、2007年

宮塚利雄『北朝鮮観光』宝島社、1992年

山田照美・朴鐘鳴編『在日朝鮮人——歴史と現状』明石書店、1991年

山根俊郎編『カラスよ屍を見て啼くな——朝鮮の人民解放歌謡』長征社、1990年

山本展男『肉眼で見た北朝鮮』毎日新聞社、1992年

歴史学研究会編『歴史における「修正主義」』青木書店、2000年

渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮——文学的考察』岩波書店、2003年

和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992年

和田春樹・高崎宗司編『北朝鮮本をどう読むか』明石書店、2003年

임화『玄海灘』東光堂書店、1938年

——『賛歌』白楊堂、1947年

——『임화전집 1 시 (林和全集 1 詩)』박이정、2000年

정재정『일본의논리』현음사、1998年

한국오코노기연구회편『新한일관계론——과거에서미래로』도서출판오름、2005年

2) 雑誌

石川文洋「北朝鮮日本人妻の意外に平穏な暮らし（ルポ）」『朝日ジャーナル』27巻
30号、朝日新聞社、1985年7月

宇治川剛「後継者めぐり抗争説——対外柔軟路線へ戦術的転換か（北朝鮮で何が起っ
ているのか〈特集〉）」『世界週報』57巻42号、時事通信社、1976年10月

大塚英志「「被害者という強者」化する日本——保守論壇誌の「責任」と「成熟」のた
めに（特集「北朝鮮」の語られ方）」『論座』103号、朝日新聞社、2003年1月

荻野アンナ「斎藤澪奈子著『超一流主義』 伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』 鶴見済『完
全自殺マニュアル』——笑止と笑死のあいだ」『文学界』48巻2号、文藝春
秋、1994年2月

木屋隆安「北朝鮮日本人妻の悲劇——（カーター訪韓と北朝鮮の人権〈特集〉）」『自由』
21巻9号、自由社、1979年9月

金達寿「夫の国朝鮮へ帰る“日本人妻”」『婦人公論』44巻5号、中央公論新社、
1959年5月

——「新潟から帰った人々——意外に多い日本人妻」『週刊朝日・別冊』昭和35年2
号、朝日新聞社、1960年3月

高和政「俗情の再生産——村上龍『半島を出よ』の「想像力」〈特集〉国家の変貌）」
『前夜』1期7号、前夜、2006年

佐藤勝巳「共和国の暮らし——小田実の「私と朝鮮」を論ずる（〔朝鮮民主主義人民〕

- 共和国のくらし・外交・経済〈特集〉) 『朝鮮研究』177号、日本朝鮮研究所、
1978年4月
- 世界週報編集部「朝鮮の粛清事件——ベリヤ事件の極東版」『世界週報』34巻26号、
時事通信社、1953年
- 玉城素「宮廷闘争に揺れる北朝鮮——金正一氏の後継者説とその背景」『世界週報』
58巻14号、時事通信社、1977年4月
- 中央公論社外信部「米中ソの東北アジア外交を解説する」『中央公論』92巻5号、中
央公論社、1977年5月
- 田勝「小田実訪朝記の読み方、日本教科書に韓国から要望(ニュース・レビュー)」
『Korea Review』20巻182号、コリア評論社、1977年2月
- 南富鎮・鄭恵英「松本清張の朝鮮と韓国における受容」『松本清張研究』12号、北九
州松本清張記念館、2011年
- 西岡勉「共和国のくらし——「私と朝鮮」を論ずる(〔朝鮮民主主義人民〕共和国のく
らし・外交・経済〈特集〉)」『朝鮮研究』177号、日本朝鮮研究所、1978年
4月
- 袴田茂樹・舛添要一・村田良平「独裁・テロと戦う決意をせよ——イラク・北朝鮮さ
し迫る危機・日本の選択」『諸君!』35巻4号、文藝春秋、2003年4月
- 萩原遼「北朝鮮にはめられた松本清張——『北の詩人』の奇怪な成り立ち」『正論』
411号、産経新聞社、2006年6月
- 藤竹暁「北朝鮮問題をめぐる政治、大衆感情、そしてメディア——特集「9・17」から
1年」『月刊民放』33巻9号、コーケン出版、2003年9月

古屋能子「私と朝鮮」小田実著——著者への手紙 『現代の眼』19巻1号、現代評論社、1978年1月

松浦寿輝・星野智幸・陣野俊史「鼎談 村上龍『半島を出よ』を読み解く」『文学界』59巻7号、文藝春秋、2005年7月

松本清張「長編小説 青い鴉—筆者のことば」『中央公論』中央公論社、1961年12月

渡辺武達「メディア操作される北朝鮮像——メディア・ホークス(4)」『評論・社会科学』50号、同志社大学人文学会、1994年9月

和田春樹「『北の詩人』ノート」『清張研究』12号、北九州松本清張記念館、2011年

이철현「미국의 “악의축” 政策과 한반도정세」『社會科學論叢』VOL. 18、명지대학교 사회과학연구소、2002年

전병준「1930년대후반임화의회시연구」『한국시학연구』제13호、한국시학회、2008年

3. 新聞記事

「十二要人を肅清」『朝日新聞』1953年8月8日

「朴副首相除名の内幕——北鮮のベリヤ事件“親米、政府転覆”が理由 南鮮との妥協論に警告」『毎日新聞』1953年8月12日

「賛成できない軍人恩給増額」『朝日新聞』1955年6月30日

「朴憲永元外相に死刑を判決」『朝日新聞』1955年12月19日

「恩給増額はか非か」『読売新聞』1958年2月2日

「恩給増額か国民年金か」『朝日新聞』1958年2月4日

「帰国する朝鮮人——“日本人”も朝鮮へ」 『読売新聞』 1959年2月19日

「帰国話はタブー——夫と子供にはさまれ」 『朝日新聞』 1959年8月14日

「北朝鮮に帰る人たちに」 『毎日新聞』 1959年12月13日

「帰国船を見送って」 『読売新聞』 1959年12月15日

「学習の日々「よど号」乗っ取り犯——作家・小田氏が会う」 『毎日新聞』 1976年11月21日

「古谷能子さん」 『朝日新聞』 1983年10月16日

「北朝鮮、日本に観光解禁」 『朝日新聞』 1987年7月19日

「北朝鮮へ観光再び——関係の改善へ受け入れ」 『朝日新聞』 1989年9月14日

「北朝鮮観光再開へ一石か——日朝友好訪問団、団体で白頭山に登る」 1990年7月2日

「北朝鮮への観光旅行を再開——関係好転で1年8ヵ月ぶり」 『朝日新聞』 1991年05月16日

「名古屋—平壤間結ぶ商業チャーター便離陸——北朝鮮、観光振興に期待」 『朝日新聞』 1991年5月17日

初出一覧

第1章 論文（査読あり）：「帰国事業における楽園幻想の解体——金達寿「日本人妻」論」、『文学研究論集』30号、比較・理論文学会、2012年2月

第2章 口頭発表：「松本清張文学における北朝鮮——『北の詩人』を中心に」、日本比較文学会第75回全国大会、於名古屋大学、2013年6月15日

第3章 書き下ろし

第4章 （1）口頭発表：「伊藤輝夫の『お笑い北朝鮮』における北朝鮮表象の考察」、テクスト研究学会第13回大会、於甲南女子大学、2013年8月30日、（2）口頭発表：「伊藤輝夫『お笑い北朝鮮』における「インテリ」批判の意味」、平成25年度筑波大学比較・理論文学会年次大会 於筑波大学、2014年3月18日

第5章 論文（査読あり）：「過去と他者の消失——村上龍『半島を出よ』論」、『比較文化研究』113号、日本比較文化学会、2014年10月